

●国際連合大学 2011-2012 年国際教育交流事業●

中国教職員招へいプログラム

実施報告書

東京都・山口県美祢市・熊本県荒尾市・東京都多摩市・岡山県総社市・徳島県・大阪府

2011 年 10 月 12 日(水) — 10 月 23 日(日)

国 際 連 合 大 学 (UNU)
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)

はじめに

国際連合大学 (United Nations University) は、持続可能な人類の安全保障、気候変動、開発、平和構築など、国連とその加盟国が直面している、喫緊の地球規模の諸問題の解決への取り組みに、研究、教育、能力開発、知識の普及を通じて寄与することを目的とする国連機関です。

国際連合大学は、2002 年に主にアジア太平洋地域の教職員や教育分野の専門家等の資質の向上と相互理解の促進を目的とし、日本政府からの拠出金をもとに「日本国際教育交流プロジェクト」を開始しました。本事業のもと、同年、日中国交正常化 30 周年を記念した「中国教職員招へいプログラム」が開始され、同大学からの委託を受けてユネスコ・アジア文化センター (ACCU) が実施を担当し、昨年まで9回にわたり、1,100 名近い中国の教職員を日本に招へいしてきました。

第 10 回目となる今回の国際連合大学国際教育交流事業・中国教職員招へいプログラムは、2011 年 10 月 12 日 (水) から 10 月 23 日 (日) までの 12 日間にわたり、中国の小・中・高等学校の教職員等 134 名を我が国に招へいしました。このプログラムは学校およびその他の教育・文化施設を訪問・見学することにより、日本の教育制度およびその現状についての理解を深め、ひいては、両国の相互理解と友好を促進することを目的としています。

実施にあたりましては、文部科学省、中国政府教育部、外務省、および山口県美祢市・熊本県荒尾市・東京都多摩市・岡山県総社市・徳島県の各教育委員会、訪問先の学校、その他教育・文化機関等、多数の方々の多大なるご支援とご協力をいただきました。ここにあらためて関係の皆様方に厚く御礼申し上げます。

2011 年 12 月
国際連合大学
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

目次

第Ⅰ章 実施内容

1. 全体プログラム(東京) 3
2. グループ・プログラム(各県・市) 10
3. 全体プログラム(京都・大阪) 32

第Ⅱ章 コメントと提案

1. 中国教職員 39
2. 受入れ教育委員会 55
3. 主な受入れ学校および機関 59

付録

1. 実施要項 73
2. プログラム日程 75
3. 参加者リスト 82
4. 関係機関リスト 87
5. 文部科学省講義資料 88

第I章 実施内容

1. 全体プログラム(東京)
2. グループ・プログラム(各県・市)
3. 全体プログラム(京都・大阪)

1.全体プログラム（東京）

1-1.来日、オリエンテーション（第1日）

「中国教職員招へいプログラム」の参加者 134 名は、2011 年 10 月 12 日（水）に来日した。

同日、滞在先のホテルメトロポリタンエドモント 2 階「悠久」にて、オリエンテーションが行われた。公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）島津正数事務局長から参加者に歓迎のあいさつが述べられたあと、それぞれのグループに随行する ACCU 担当スタッフが紹介され、最後に ACCU 職員よりプログラム日程説明や滞在ガイダンス等が行われた。

1-2.開会式（第2日）



国際連合大学 加藤敬大学院事務局長あいさつ

プログラム第2日、10月13日（木）、開会式が行われた。はじめに中国教職員団を歓迎して、本事業主催者である国際連合大学 加藤敬大学院事務局長よりあいさつがあり、今年で第10回を迎えるこの事業は、アジア太平洋地域の教職員交流を通じて、各国の間の友好と相互理解の促進を目的として実施されてきている、短い期間ではあるが、今回の訪問が日本の学校教育制度やその現状、さらには日本の文化に触れるよい機会になることを希望する、と述べた。続いて ACCU より佐藤禎一顧問、文部科学省より佐々木亨国際課企画調整室長、中華人民共和国駐日本国大使館より、過去2度にわたり同プログラムに訪問団の一員として参加されたこともある楊光 二等書記官からあいさつがあり、最後に訪問団を代表して郭樹良（GUO Shuliang）団長が、日

本には参考とすべきことがたくさんあると考える。今回の訪問において、真剣に視察を行い、深く理解し、心からの交流を行い、謙虚に学び、両国人民の理解を深め、友好を増進していきたい、とあいさつした。



郭樹良総団長あいさつ

1-3.講義 I（第2日）

「日本の初等中等教育制度について」
文部科学省 初等中等教育局 初等中等教育企画課 課長補佐 南野 圭史

開会式に続き、同会場にて、日本の初等中等教育制度について、文部科学省の講義が行われた。講義内容は、以下の通りであった。



- 1) 学校教育制度
- 2) 初等中等教育段階の学校数、在籍者数、本務教員数
- 3) 在籍者数、就園率・就学率の経年変化
- 4) 義務教育制度の概要
- 5) 教育行政制度の概要（国・都道府県・市町村の役割）
- 6) 教育委員会制度の概要
- 7) 新しい教育基本法の概要（平成 18 年 12 月成立）
- 8) 教育の目標
- 9) 新しい学習指導要領
- 10) 思考力・判断力・表現力等をはぐくむ学習活動の例

- 11) 小学校の標準授業時数
- 12) 中学校の標準授業時数
- 13) 高等学校の各学科に共通する教科・科目等及び標準単位数
- 14) 教科書制度の概要
- 15) 教員養成・免許制度の概要
- 16) 特別支援教育
- 17) 公立高等学校の授業料無償化制度の概要



文部科学省 講義Ⅰ

その後の質疑応答では、主に以下の内容について積極的に質問が挙がった。

- ・就学前の教育に関する国からの支援について
- ・日本で行われている高水準の教育について
- ・道徳の授業内容および課題
- ・義務教育における宿題について
- ・教科書採択機関について
- ・高校進学率に技能学校も含まれるのか
- ・高校入試内容について(全国统一されているのか)

1-4.講義Ⅱ（第2日）

「日本の教員養成・免許制度について」
文部科学省 初等中等教育局 教職員課
教員免許企画室長 新田 正樹



講義Ⅰの後、昼食を挟み、「教員養成について」について文部科学省の講義が行われた。

講義内容は、以下の通りであった。

- 1) 初等中等教育段階の学校数、在学者数、本務教員数
- 2) 教員養成・免許制度について
- 3) 普通免許状の種類
- 4) 大学における教員養成の仕組み
- 5) 課程認定を有する大学等の数
- 6) 免許状取得者数及び教員採用者数について
- 7) 所有免許状教員養成構成等
- 8) 教職員大学院（専門職学位課程）制度の概要
- 9) 教職員大学院の現状（平成22年度）
- 10) 教員免許更新制の概要
- 11) 現行の教員養成・採用・研修・免許制度
- 12) 教員研修の実施体系

その後の質疑応答では、主に以下の内容について積極的に質問が挙がった。

- ・教員の評価制度について、評価制度の学校での運用の実態について
- ・「良い学校」の基準について
- ・人事異動制度（どのくらいの勤務で異動になるのか、異動理由）
- ・特別支援学校の教員について（採用方法、待遇等の差異）

1-5.歓迎交流会（第2日）

同日18時より、同ホテル2階の「悠久」において国際連合大学主催・文部科学省協力・ACCU運営による歓迎交流会が開催された。式には国際連合大学 武内和彦副学長をはじめ、ACCU 高坂節三理事、文部科学省 藤嶋信夫国際統括官、中華人民共和国駐日本国大使館より、孫建明(SUN JianMing)公使参事官が出席した。



歓迎交流会 来賓

それぞれの来賓からは、中国教員団を歓迎し、これから始まる交流プログラムにおいて大きな収穫を得、成果を収めて欲しい、とのあいさつがあった。各代表あいさつの後、ACCUより中国教職員訪問団 郭樹良 (GUO Shuliang) 団長と、中国教育部から同プログラムに随行している王禹耕 (WANG Yugeng) 氏に記念品の贈呈が行われ、訪問団からも記念品が贈られた。しばらくの懇談をはさみ東京藝術大学邦楽科教育研究助手 箏曲生田流 日原暢子氏による琴、尺八専攻修士2年 福田大輔氏による尺八にて「春の海」の演奏が披露された。



琴と尺八の演奏

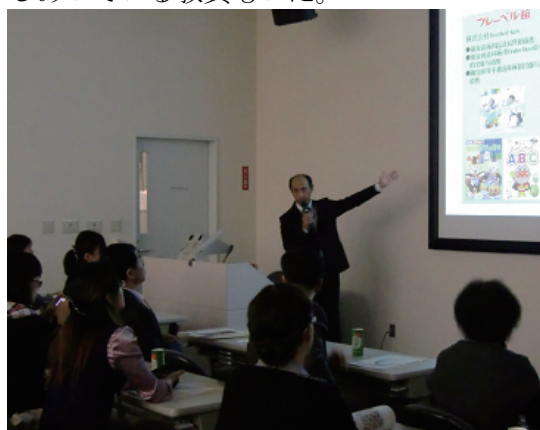
日本側出席者の中には、同年6月に日本教員団として中国を訪問した日本教員もあり中国での思い出を語らい合う場面も見られた。また東京近郊訪問先の担当者もあり、例年同様、財団法人辻アジア国際奨学財団の協力により優秀な通訳協力者を得て、中国教員たちは終始、他グループの参加者や日本側出席者と和やかに懇談に興じていた。

1-6. 学校、教育文化施設訪問 (第3日)

凸版印刷株式会社 VRtheater 印刷博物館

10月14日(金)Aグループは10:00-12:00、Bグループは14:00-16:00、Cグループは15:00-17:00に訪問した。同社は1900年創業、教科書印刷だけでなく証券・カードから半導体関連の8部門で多彩な事業を展開している総合印刷企業。印刷博物館は、印刷の歴史的な役割や意義を発信していくことを目的に2000年設立され、社会文化貢献活動の一つとして小学校の体験教室など実施している。VR(Virtual Reality)シアターは仮想現実コンテンツを見ることが出来るカーブ型スクリーンで故宫博物院との共同開発コンテンツを含め現在31作品がある。

山本正己法務本部 CSR 推進室長の出迎えを受け訪問団はまず企業とVRシアターについて概要説明を受けた。シアターでは中国と縁の深いコンテンツ「唐招提寺」「故宮」を上映、「故宮」ではオペレーションも試し、貴重な文化財・空間を再現された技術の高さを体験した。続いて印刷博物館の概要説明を受け、地元小学校との連携授業を知り、子供、特に小学生といった小さい年代のうちに企業など社会と関わりを持つことは将来働くということを意識させる点でも重要だと博物館を自由見学しながら話しあっている教員もいた。



凸版印刷 山本室長の説明を聞く

(1)A グループ

青山学院初等部

10月14日(金)午後、Aグループは青山学院初等部を訪問した。同校はキリスト教

信仰（プロテスタント）に基づく教育で、学年毎に行う宿泊行事、体験学習と渋谷キャンパスでの授業のキャッチボールによる人格形成が特徴である。

中村貞雄教頭の出迎えを受け大学正門から初等部へ向かい、まず最初に特徴がわかりやすくあらわされたパンフレットに沿って島根照夫初等部部長による学校概要説明が行われた。初等部の特徴である自然の中での体験学習は「特に小学生という感性を磨く年代の子供達にとって体験がいかに重要かよく理解でき今後の参考になった」という声が訪問団からあがっていた。また通信簿といった点数ではなく成長の記録として教員・保護者・本人とで確認しあい課題を決めるきめ細やかな指導方法においては、同じ私立学校の中国教員が「どのように生徒を集めるかに苦心しているが参考にしたい点が多々ある」と感想を述べていた。説明の途中で5年生の生徒が中国語であいさつに来てくれ思いがけず生徒との中国語での会話となり訪問団に喜ばれた。その後、中村教頭と佐々木教諭の2班に分かれ校内見学となった。普通教室での授業以外にも図工や音楽などの特別教室、更に教会ではキリストの一生を絵で知る重要な役目だったステンドグラスや「アベマリア」を演奏したドイツ製のパイプオルガンも含め説明があった。



青山学院初等部見学

(2)B グループ

慶應義塾幼稚舎

10月14日（金）の午前、Bグループは慶應義塾幼稚舎を訪問した。同校は1874年創立の私立小学校のひとつで、今年は創立137周年にあたる。慶應義塾の創立者である「福澤諭吉の教えを身に行う」こと、すなわち「独立自尊」を実践できる人材の育成を目指している。「先ず獣身を成して後に人心を養へ」という福澤の教えにしたがって身体能力を鍛えることに力を入れ、多彩な体育行事や体験活動を行っている。おりしも運動会を翌週にひかえ、競技練習の熱気あふれるなか、訪問は行われた。

訪問プログラムでは、まず加藤三明舎長から、歓迎のあいさつと慶應義塾幼稚舎の歴史やクラス編成と教員の役割分担、志願者の動向などを含む幼稚舎の概要と特色について説明を受けた。訪問団からは内モンゴル自治区教育庁の王利生（WANG Lisheng）処長がお礼の言葉を述べ、記念品を交換した。その後2グループに分かれて、それぞれ加藤舎長と近藤由紀彦主事の案内のもと施設・授業見学を行った。

情報でのパワーポイントの使い方の授業、英語でのクイズ形式の授業、図書室での読み聞かせ、理科の屋外での太陽光観察や絵画科など多くの授業・活動を見学した。児童がのびのびと元気に行動している様子を見て訪問団から「校内で児童が怪我をし、問題になることはないのか」という質問が出たが、加藤舎長から「児童が怪我をしないように配慮しすぎて不自然な環境を作り出すよりも、普通の状況の中で怪我をしたり友達とけんかをしたりしながら、生きていく力を身につけることが大切です」という旨の回答があった。その他、入試の内容や選抜方法、担任教師が受け持つ授業数、児童の評価方法、都からの補助金やその管理方法、在校生の男女比とその根拠など、訪問団からの多岐にわたる質問にそれぞれ回答いただいた。

(3)C グループ

市川学園 市川中学校・市川高等学校



市川学園での模擬授業「一次方程式の解放と概念」

同校は、1937年に市川中学校として開校し、1948年に市川高等学校を設置(いずれも男子校)、中高一貫教育を行っており、2003年に新校舎に移転し、男女共学となった、千葉県市川市に位置する私立学校である。

学校に到着した中国教職員26名は、古賀正一理事長、小川暢久校長、及川秀二副校長等や生徒たちに出迎えられ、多目的ホールへ案内された。初めに古賀理事長からあいさつがあり、続いて学園側の教職員紹介が行われた。その後、中学2年生の何騰君より、中国語で歓迎のあいさつがあり、学園での生活が紹介された。

一行は2グループに別れ、中学1年生を対象とした模擬授業を行った。上海市閔行区鶴北初級中学の李国平(LI Guoping)校長は1次方程式の解放と概念を、吉林省第二実験学校の杜穎亮(DU Keliang)副校長は中華料理をテーマにそれぞれ授業を行い、生徒たちは皆熱心に中国教職員の話を聞いていた。その後は、1年生の授業の様子を見学し、古賀記念アリーナ、第三教育センター、市川学園歴史センター、ほっとる一む(カウンセリングルーム)、職員室など、学校施設を見学した。100名のオーケストラが演奏可能な國枝記念国際ホールでは、音楽の教師でもある鈴木教頭より「先生方の学校と同校との間で交流が深まり、中国の生徒の皆さんがこのホールで演奏される日が来ることを期待している」と話があった。

一行は構内視察から多目的ホールに戻り、及川副校長進行の元、ミニシンポジウムが開催された。小川副校長より、『日本の私学

を取り巻く環境と市川学園の教育』としてプレゼンテーションが行われ、同校の教育の特徴のほか、公立校私立校の特徴、役割の違いなどが説明された。その後のシンポジウムでは、「日中の教育問題について」をテーマに討論が行われ、昨今、家庭で大切に育てられるなど、コミュニケーション力が乏しく自分中心で協調性に欠ける生徒などへの指導など、日中共通の課題がテーマとして挙げられ、それぞれの国の教員の立場から、率直な意見交換が行われた。

最後に、訪問団のグループ長である瀋陽市盲校の秦世広(QIN Shiguang)校長から古賀会長に記念品が贈呈され、古賀理事長からも同校の校章が記された煎餅などが参加者全員に渡された。学校前で記念撮影を行い、一行は同校を後にした。



市川学園 ミニシンポジウム 小川暢久校長

(4)D グループ

聖徳学園中学・高等学校

84年の歴史があり、伝統と規律を重んじる聖徳学園中学・高等学校では、中国教職員招へいプログラムの受け入れは、今回で二度目となる。午前中は学校概要の説明と校内施設の見学、午後には5・6時限目の授業見学を行った。各クラスに担任の教諭が二人いること、英語・数学はレベル別に分け、少人数制を採用していることなど、私立ならではの特色ある体制に中国訪問団は関心を寄せていた。世界各国と国際交流をしており、機会があれば今回の受け入れをきっかけに訪問団の学校と交流を図りたいと藤尾直樹教頭先生があいさつをした。

意見交換の場では、活発な意見交換が行われた。

心の教育に力を入れているが、その具体的な内容はどんなものか、という訪問団の質問に対し、「カウンセラーが常駐しており、問題が起こる前に生徒が自由に相談室へいくことができるので、問題などを事前に防ぐことができる。また、担任の教諭が二人いるため、生徒へのサポートを充分にすることができ、生徒の変化に教員同士が気づくことができる。」と回答があった。



英語の授業でのグループワークに参加

また、部活動やイベントなど行事がたくさんあるが、生徒への安全面への配慮はどのように行っているのか、という質問に対しては、「学校内で起こったことはすべて学校の責任となる。生徒が怪我をした場合は、生徒を自宅まで送り届け、治療費も全て学校が負担をしている。東日本大震災の時は、校庭に生徒を避難させ、迎えに来た保護者

へ生徒を引き渡したが、帰宅できなかった生徒が12人おり、その日は学校に宿泊した。学校には全校生徒3日分の食料を確保しており、緊急時にも対応できるようにしている。」との回答があった。

桂林市清風実験学校校長 王湘壮 (WANG Xiangzhuang) は桂林省へ来る際は、自分の学校を訪問くださいと藤尾教頭と名刺交換をする場面も見られた。

最後に正門の前で、全員で記念撮影を行い、後日、訪問団ひとりひとりへ現像された写真が学校よりプレゼントされた。

(5)E グループ

筑波大学附属駒場中学校・高等学校

河北師範大学付属実験中学の王昕 (WANG Xin) 校長を分団長とし、27名で構成されたEグループは、10月14日(金)終日、筑波大学附属駒場中学校・高等学校を訪問した。



生徒との昼食交流

同校は、1947年に創立され「自由闊達の校風のもと、挑戦し、創造し、貢献する生き方を目指す」を学校目標としている。様々な学校行事に積極的に取り組んでおり、2002年には文部科学省より「スーパー・サイエンス・ハイスクール」の指定を受けている。

学校へ到着すると、はじめに宮崎副校長から歓迎のあいさつがあり、王分団長よりお礼の言葉が述べられ、記念品の贈呈が行われた。続いて3グループに分かれて授業見学が行われた。中国教職員は、数学、化学、英語、剣道の授業等を視察した。その後、大会議室に戻り、中国教職員は中国語の話せる生徒等10数名と交流しながら

昼食をとった。中国教職員は、学校の事について話をしたり写真を撮るなど和やかな交流ができた。昼食後、引き続き授業を見学した。その後、教員との意見交換の時間があった。中国教職員からは、人事・財務における大学との関係、理科のカリキュラムづくり、修学旅行、教師研修等についての質問があった。宮崎副校長が学校に対する印象を尋ねると、中国教職員からは、生徒も教員も自由で自主的なことや、先生が生徒に教えることに対して非常に熱心であること等の感想があがった。また、施設面では、理科系の授業での実験器具や設備が充実していたという意見があった。意見交換の後、放課後の様子を参観した。中国教職員は、学問だけでなく学校行事や部活動に積極的に取り組む生徒の様子を熱心に見学していた。最後に記念撮影をして見送りを受け、一行は学校を後にした。



教員と記念撮影

1-7. 都内視察（第4日）

プログラム第4日目の10月15日(土)はまず第一回目のグループ別情報共有会を宿泊先のエドモントホテルの各会議室で行った。08:30-10:00を予定していたがCグループは1時間足らずで終了、BとDグループが約1時間、AとEグループは約1時間15分で終了した。

東京視察ではグループ毎にバス5台でまず浅草へ向かい浅草寺を各自見学し全体で昼食後、国立科学博物館、皇居、銀座を車窓見学した。

国立科学博物館

同館は1877年設立、国立の唯一の総合科学博物館、自然史、科学技術史の中核的研究機関として400万点を超える標本資料を保管し、これら調査研究、知的・物的資源を展示・学習支援という方法で社会に還元し、生涯を通じた科学リテラシーの涵養を促進している。また体験学習プログラムなど学校連携にも努めている。



国立科学博物館 亀井課長の講義

C,D,EグループとA,Bグループを30分の時間差を設け、最初に地球館3F講義室で事業推進部 連携協力課長 亀井修氏から概要説明を受けた。工学博士である亀井氏は元教員で、学校と博物館それぞれの教育への関わり方の違いを表でわかりやすく説明した導入で始まり、博物館の機能と活動、セグメントに分けた教育プログラム、日本館・地球館の説明、また教員のためのプログラムや授業に役立つヒントなど教職員を対象にして焦点を絞った内容で訪問団にとって聞きやすくわかりやすく、それぞれ真剣にメモを取っていた。

その後は各自自由見学となり、企画展を含め全フロア（地球館3F～B3F、日本館1～3F）を見学した。数人固まって見学している場合もあったが、じっくり見たい教員は1人で回られている場合が多かった。

2. グループ・プログラム（各県・市）

2-1. Aグループ：山口県美祢市

瀋陽市和平区教育局の師曉星（SHI Xiaoxing）副局長をグループ長に、主に小学校教職員を中心とした A グループ 24 名は、10 月 16 日から 20 日までの 5 日間、山口県美祢市を訪問し、同市教育委員会の協力により、市立小学校および中学校を各 2 校、県立高等学校 1 校、文化施設として秋芳洞、秋吉台科学博物館、企業訪問として宇部興産株式会社伊佐セメント工場を訪問した。更には北隣する長門市教育委員会の協力もあり金子みすず記念館も訪問した。永富康文教育長は毎日いずれかの訪問先へ足をお運び頂き、学校教育課 柴田眞弓課長補佐は全行程同行して頂いた。



ホストファミリー対面式で永富教育長あいさつ

プログラム第 5 日の 10 月 16 日（日）、一行は宿泊先ホテルから羽田空港、北九州空港経由で美祢市へ赴いた。美祢グランドホテルチェックイン後ホームビジット対面式会場「市民会館」へ行くと、歓迎の横断幕、両国国旗、花、市内の幼稚園生手作りのパンダ人形で会場は飾られ、音楽は中国語版「世界でひとつだけの花」、各テーブルではホストファミリーが中国教職員の名前を A4 プリントアウトして掲げてわかりやすく心温まる歓迎を受けた。各テーブルで名刺やお土産交換がすぐに始まり、ホストファミリーでもある永富教育長の挨拶の後、全員で記念写真撮影し出かけた。

ホームビジットから戻って来た中国教職員は皆リラックスし、一緒にピアノを弾いて歌を歌った、お餅つきをした、お料理がどれもとてもおいしかった、と日本の家庭

を十分楽しんだ様子だった。



ホストファミリー対面式で名前を掲げて歓迎いただく

プログラム第 6 日の 10 月 17 日（月）、一行は徒歩で表敬訪問・教育委員会オリエンテーションへ出かけた。ホテル・会場の市民会館・市役所が徒歩 5 分圏内であることから、市役所の方々が建物から出て訪問団を歓迎いただき、会場では市内の小学生手作りの美祢の花の葉を記念にいただく温かなもてなしを受けた。



表敬訪問 教育委員会 柴田課長補佐のご案内

村田弘司市長の挨拶では美祢市が山東省棗莊市と友好都市であり相互に観光交流の促進を行なっていること、美祢市でのセメント生産量が日本全体の 10%にあたること等紹介され、永富教育長の挨拶では「教育者にとって子供達が健やかに育って欲しい」という思いは世界共通の願い」という部分が訪問団の共感を得ていた。訪問団の挨拶では前日のホームビジットで時間を忘れ家に居るような温かなもてなしを頂いた御礼および教育交流の使者として謙虚な気持ち

で学び今後の教育に役立てたいという抱負が語られた。



表敬訪問 村田市長（右）と師曉星グループ長

教育委員会オリエンテーションでは柴田氏が写真を使って美祢市の紹介と「知徳体」のバランスがとれた力強い子供を育てる方針が説明された。予め中文訳された教育方針 A4x2 枚にメモしながら中国教職員は集中して聞いていた。「市教委は学校をどのように評価するのか?」「学校訪問し点数を付け校長・教頭を集め指導している」「研修はあるのか?」「教員が授業力をつけられるよう内外の研修制度あり」など質疑応答があった。



表敬訪問 永富教育長（左）と肖祥艶副グループ長

続く、大嶺小学校では白井一成校長の出迎えを受け、訪問団からは瀋陽市皇姑区岐山路第一小学校の劉春鳳 (LIU Chunfeng) 校長が挨拶した。概要説明では「年 35 時間の英語教育は少なすぎないか」と訪問団から声があがっていた。2 班に分かれての授業見学では最初に見た支援学級の個別指導は印象的であったようで費用の質問があり補助金が出るので家庭の負担はそれほど大きくないという説明を受けていた。家庭科

など実習はやはり物があるので児童と交流しやすそうだった。続く体育館での児童との交流会は特に「質問コーナー」が面白く、宇田川明恵教頭に聞くと事前準備なしで児童に任せたとのこと。「中国で一番強い人は?」「月は何に見える?」「どこが人気?」と子供らしい質問が飛び出した。「中国語じゃんけん」も双方楽しそうで「シートウ、ジエンタオ、プー」(グー、チョキ、パー)と児童のかわいい声があがっていた。給食体験は児童の出迎えが微笑ましかった。



大嶺小学校 児童とのじゃんけんゲーム

秋芳洞では朝各自が持って出た歩きやすい靴に履き替え怪我無く「百枚皿」など 8 箇所の見所を見学できた。続く秋吉台博物館の見学では 2 班に分かれ、地学・生物 2 名の学芸員の説明を受け、5 年生の地学で体験学習を始める、低学年は化石探し、といった学校教育との関わり、更に児童・生徒を指導する大学生の指導など見学しながら随時質問をしていた。美祢市の風土の特徴を大地の上下から見学したことになった。

同日午後 6 時より、美祢市教育委員会、ACCU 共催の歓迎交流会が催された。日中友好協会 山本忠雄会長、村田市長をはじめ市役所の方々、秋山哲郎議長をはじめ市議会の方々、訪問校の校長、古屋道子委員長をはじめ教育委員の方々、ホストファミリーの方々が出席され、各テーブルのボランティア通訳のお陰で再会を楽しめた。オープニングの秋吉小学校による草炎太鼓は大変上手で、同日午後見学した秋吉台の山焼きを表現した演奏で伝統的に続けているとのこと。市長挨拶、市議会議長挨拶に続き、ACCU 人物交流課の佐々木万里子課長が運営者代表として挨拶し、訪問団からは

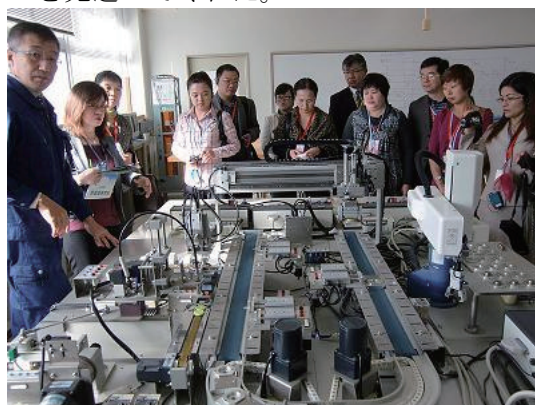
副グループ長である福州市教育局の肖祥艷（XIAO Xiangyan）処長が挨拶した。司会の柴田氏の気配りで訪問団一人一人が自己紹介する場面も作っていただき、最後は永富教育長が師曉星グループ長と肖祥艷副グループ長を誘って三人で「三本締め」を行ない大盛況の中、閉会となった。



交流会で村田市長を囲む訪問団

プログラム第7日の10月18日（火）、一行は青嶺高校へ向かった。藤井勇夫校長がオープンな雰囲気を始められ、学校説明、校内見学、意見交換と始終話しやすく進んだ。訪問団からは長春市緑園区開元小学校の王賀（WANG He）副校長が挨拶、ACCU佐々木も訪問に参加した。普通科と併設している工業科（機械課・電気課）の各教室は電気工事資格取得用実習やソフト作り・操作・原理を学ぶ実習など小学校教員としては初めて目にするものもあった。両科とも学ぶ家庭科室では老人の見え方聞こえ方、妊婦の体の重さなど体験でき良い教育だ、と声があがった。意見交換では校長、教頭、事務局長、生徒部、進路部、特別活動部、普通科、電気科、機械科と9名の教員が参加。「運営権限は全て校長か？」「割り当てられた予算の範囲内で校長判断する」「募集の範囲は？」「普通科は美祿市周辺3市、工業科は全県」「教員は企業から呼ぶのか？」「特別授業の際はある。工業科は高校教員資格以外に電気工事資格所有必要。工学部卒業者が多い」「地域企業との連携授業はあるか？進路相談は？」「2年時に1週間インターンを受ける。企業特定の技術ではなく基本技術を学ぶ。学校の進路指導と企業の人事部が連携として就職活動を支援」「脳科学をカリキュラムに生かすことはしている

か？」「本校ではないが、昼寝をとる、100マス計算を実施している学校もある」「中3時、高校を選ぶのは保護者？」「工業科は特に特色あるので生徒、保護者、中学の3者で決めるが生徒の意思が最も大きい」といった質疑応答があった。試験期間中で生徒との交流はないと思っていたのに最後にバスを見送ってくれた。



青嶺高校 工業科を見学

昼食後、地域の茶道講師、飯田敏子氏ほか4名の着物姿のご婦人方からお茶の飲み方を習い、見よう見まねでゆっくり上手に飲む人、左手に乗せて右手で右回しにうまく出来ない人、初めて口にして苦さに顔をゆがめる人などそれぞれで、最後は「結構なお手前で」の代わりに「おいしい。ありがとう」と日本語で御礼を述べ、一時だが日本の伝統文化に触れる時間となった。



茶道体験 お茶をいただく訪問団

同日午後、宇部興産株式会社伊佐セメント工場を訪問し、石灰質の大地という風土に根ざした産業に触れる機会を得た。渉外部 田中氏、総務部 河村氏から日本での生産量は石灰石5位、セメント4位であること、雨水・廃熱の循環利用、CSRとして学

校などに工場内見学を提供していること、特に市内外の小学3年の総合学習、高校のキャリア教育、インターンなど教育との関わりに触れ概要説明を受けた。防音壁5Mの工場内の採掘現場や大型施設を見た後、美祢と宇部を結ぶ専用産業道路をバスで走る稀有な経験もできた。



宇部興産 伊佐セメント工場 伊佐鉱区で説明を受ける

同日夕方、大嶺中学校へ到着するとちょうど袴姿の上級生や運動着姿の下級生が弓道場へ集まりクラブ活動開始する時間で、弓道場入口では歓迎プレートで生徒が出迎えてくれた。田中円城校長をはじめ、弓道部顧問の菊池教諭、村岡教諭、地域の指導者金子氏、信田氏のもと全国大会出場の3名の生徒による「弓渡し」の儀式がまず披露された。物音一つ立てず矢を命中させる作法に集中した厳粛な様子に中国教職員は慣れないながら携帯着信音を切るなど自分達でその時間を共有しようとしていた。儀式が終わると練習時間となり、中国教職員も動き出し、指導者に弓をひく型を教わり難しさを体験する人もいた。最後に地域の方々の演技も披露いただき礼儀や姿勢を重んじる地域ぐるみの教育に触れることができた。訪問団からは南京市南湖第二小学校の季慧敏(JI Huimin)校長が挨拶をした。教育長はお忙しい中、表敬訪問の様子が掲載された新聞記事を持って訪問団の見学に合わせていらした。



大嶺中学校 弓道場にて弓を引く型の難しさを体験

プログラム第8日の10月19日(水)、一行は厚保中学校を訪問した。杉山康子校長の出迎えを受け訪問団からは福建省福州実験小学校の夏青(XIA Qing)副校長が挨拶した。35名の小規模校で同校が力を入れている道徳の授業(3年生)を1時間全て見学した。テーマとなる文章を行きのバス内で頭に入れ、学校到着後は資料をもとに担当の清水教諭から指導要領の説明を聞き、公開授業であることも相まって(同校の他教員、1,2年生も見学)相当集中した授業見学の時間となった。他教員が見学時に使っていた「授業観察カード」(指導方法、生徒の様子を気付いたことをメモする)をぜひ参考に欲しいという中国教職員もいた。3年生自身も大勢に取り囲まれて討論したことで結構智恵を絞り集中したのではないかなと思われる。中国でも道徳教育「思想品德」があり、授業後の意見交換では以下のような意見があがった。「思いやり、つながりあい、応援しあう大切さを段階踏んで深く考えさせる方法:2人の出会いが心のつながりへ発展したことから最後に「つながりあう社会」に持っていく指導法、プロセスは有効と思った。」「生徒の意見を尊重し生徒が積極的に発言できる環境を作っている方法は感銘を受けた」「板書が丁寧」「先生が生徒の目線にしゃがんで話しかけるのは生徒が気付く・感じるよい方法」「一人では考えをまとめられないが班で話すとまとまる生徒もいる」また質疑応答では「生徒のバランスのとれた成長のための道徳以外のとりくみもあるか?」「少人数を生かしてコの字型で学びあう。福祉体験。」「教材はどうやって選ぶ?」「文部科学省の教科書、資料

集以外に新聞記事、歌詞、テレビ番組の内容も利用」「IT 技術は使えばもっと効果的では？」などの意見交換があった。



厚保中学校 道徳の公開授業で生徒の討論を聞く

同日午後、嘉万小学校を訪問、山田邦夫校長の出迎えを受け、全校生徒が体育館で給食を用意して待っていてくれた。訪問団からは上海市楊浦区復旦科技园小学校の薛為群（XUE Weiqun）校長が挨拶した。児童が前に並んだ中国教職員を各テーブルに手を引いて招き、揃ってまず栄養教諭のマナーとメニューの説明を聞いた。音楽室に移動し学校説明の後 3 年生による秋芳洞・秋吉台の紹介があった。見えやすい聞こえやすいプレゼンテーションの基本を踏まえた上に通訳のタイミングも考慮できた上手な発表で、内容は子供らしく「アンモナイトはどうやって泳いでいたか」「コケムシの大きさは」「フズリナは何種類あるか」など。担当教諭からは「教員が助けることもあるがガイド内容は自分で調べたいことを見つけて本と現地で調べている結果であること」「月に一度秋芳洞でガイドしていること」が説明された。4・6 年生のマーチングバンドを待つ間は大田典子教頭からの質問に「中国では二胡、琵琶など民俗楽器を週 2 時間クラブで教えている」と音楽教員が答えていた。運動場で衣装を付けて 19 年の歴史ある演奏を見学し、小規模でもレベルが高くのびのび元気な様子は児童が自然に自信を身に付けていくからだろうか、と訪問団から声があがった。バスが走り出しても次の角、また次の角へと先回りして手を振ってくれた元気溢れる児童達は美祢の良い印象を更に深く訪問団に残した。



嘉万小 3 年生による秋芳洞・秋吉台の紹介を聞き入る

同日夕方、美祢市を後にし北隣の長門市にある金子みすず記念館へ向かった。長門市教育委員会の江原健二教育長、金子みすず記念館学芸員でもある嶋田靖代教育委員長、長門高校の岩田らい教諭の出迎えを受けた。嶋田氏の説明は詳細で岩田教諭が通訳し、山口県を代表する詩人金子みすずの詩に触れると「自然と心の教育に導けるのではないかと思った」「中国語になっている詩集もありそれを学校で使っている」という中国教職員もいた。説明後は記念館を各自見学し最後に記念撮影をした。



金子みすず記念館前で嶋田学芸員を囲み記念撮影

最後の夜は長門市の温泉で旅館体験となり、夕食を長門市教育委員会 江原教育長、嶋田教育委員長、美祢市教育委員会 永富教育長、月成課長、柴田氏と共にし、浴衣姿の訪問団からお礼が述べられていた。

プログラム第 9 日の 10 月 20 日（木）、一行は長門市から美祢市へ移動、情報共有会の後、新幹線で大阪へ向かった。美祢市出発時も出迎え同様、市役所から大勢の方に見送りいただいた。

2-2. Bグループ: 熊本県荒尾市

内モンゴル自治区教育庁の王 利生 (WANG Lisheng) 処長をグループ長に、主に小学校教職員を中心としたBグループ29名は、10月16日から20日までの5日間、熊本県荒尾市を訪問し、同市教育委員会の協力により、小学校、中学校、特別支援学校の計4校と、文化施設として万田坑と宮崎兄弟生家を訪問した。学校・文化施設訪問の際には、荒尾市教育委員会の方に1名同行いただいた。また、丸山 秀人教育長にも可能な限り同行いただき、学校訪問の際も教育長のご意見をお聞きすることができた。

プログラム第5日の10月16日(日)、一行は東京から空路と陸路で熊本県荒尾市へ赴いた。荒尾市市役所へ到着すると、市役所には日本と中国の国旗が飾られ、「熱烈歓迎大家到荒尾来」と大きく書かれた横断幕が用意されており、会丸山教育長をはじめ、荒尾市教育委員会の職員の方々からの訪問団の出迎えがあった。



ホストファミリー対面式で丸山教育長あいさつ

ホストファミリー対面式が行われる市役所会議室内では、すでに、ホストファミリー15家庭とボランティア通訳が着席されていた。訪問団は緊張の面持ちの中の対面であったが、ホームビジットが終わり、ホテルに戻ってきた全ての中国教職員の表情が活き活きしており、充実した時間を過ごしていたことが伺われた。ホストファミリーの多くは訪問学校関係者であったため、その後、訪問した学校で、中国教職員は積

極的に質問することができ、日本の学校、教育制度についてより理解を深めることができたと思われる。なお、ホームビジットでのボランティア通訳は主に、宮崎兄弟生家で通訳をされている史 青秀氏と前嶋錦妹氏の尽力により集めていただいた。

プログラム第6日の10月17日(月)午前は荒尾市市役所において荒尾市表敬訪問が行われた。荒尾市前畑 淳治市長から歓迎のあいさつがあり、「今回の事業が将来日中両国の友好や相互理解に関し多くの成果を生み出すもの」と期待の旨が報告された。その後、王グループ長からホームビジットでの荒尾市の皆さんへ心温まる歓迎に感謝の念が伝えられ、これからの荒尾市での研修についての期待が述べられた。その後、前畑 淳治市長と、王グループ長による記念品の交換を行い、荒尾市と中国教職員との友好を促進することができた。

表敬訪問に引き続き、荒尾市の概要及び教育事情についてのオリエンテーションが行なわれた。初めに、丸山教育長からあいさつがあり、続いて、山下 慶一郎副市長から日本で、辛亥革命を支えた宮崎 滔天と孫文の交流を中心に、荒尾市の概要についての説明があった。その後は荒尾市の概要を分かりやすく紹介している、中国語字幕付きのDVDを鑑賞した。なお、このDVDは中国教職員に好評で、急遽DVDを10枚用意してもらい、最終日に丸山教育長からグループ長にお渡しいただいた。

最後に、西村 泰治教育部長より荒尾市の学校教育の概要についての説明があった。荒尾市が今年度設定している学校教育のねらいや努力目標についての説明のほか、荒尾市の教育の重点課題についての説明があった。



市長・教育長表敬訪問で集合写真

昼食後、丸山教育長と教育委員会寺尾 俊二指導主事同行のもと、一行は荒尾市万田小学校を訪れた。中国教職員一行は中国ではお祝い時に用いられるという爆竹で熱烈歓迎を受けた。同校は旧荒尾第二小学校、旧荒尾第三小学校を統合し、本年度開設された新設校で、職員数 28 名、児童数 382 名の中規模校である。浦部 真校長は台湾の日本人学校で勤務されていた経験があり、歓迎のあいさつは全て中国語で行われた。中国教職員からは副グループ長である岳陽市岳紙学校の肖建竜(XIAO Jianlong)校長のあいさつがあり、記念品交換を行った。万田小からの記念品は先生方手作りのメッセージつきの飾りやお手玉、荒尾市特産の荒尾梨、暑さ対策のバンダナをご用意いただいた。その後 2 つのグループに別れ、浦部校長、寺岡 伸義教頭の案内の元、地域、保護者ボランティアが協力している、日本の昔から親しまれている遊びに関する授業(1 年生生活)や読み聞かせの授業(2 年生国語)を始めとする様々な授業を見学し、チームティーチング指導教員の役割についても知ることができた。授業見学中も中国教職員からはチームティーチング制度について、同校で行っている「交通教室」の様子について、児童が持っている防犯ブザーについてのなど様々な質問が挙がり、丁寧に答えていただいた。1 時間の授業参観後は、寺岡教頭から学校概要説明があり、その後、一斉下校の様子を見学した。同校では、毎朝 5～6 人の班で登校しており、週に 1 回、下校時間に登校班を集めて指導があり、国道や JR 線路があるが、交通事故が発生していないとのこと。児童代表から中国訪問段に中国語を交えた歓迎のあいさつがあり、わずかであったが児童との交流の時間を持つことができた。児童下校後は、同校の全教職員も参加し、2 グループに分かれて、質疑応答の時間がもたれた。訪問団からは日本教職員の仕事に対するモチベーションについて、特別支援学校と特別支援学級の違い、教員の研修制度、危機管理体制の整備といった質問がなされた。

最後に、集合写真を取り、同校を後にした。



荒尾市立万田小学校にて 同校教職員との意見交換会

同日午後 6 時より、荒尾市教育委員会、ACCU 共催の歓迎交流会が催された。荒尾市教育委員会教育部教育振興課原 明信課長の司会進行の下、荒尾市前畑市長、同市議会 島田 稔議長、丸山教育長より歓迎のあいさつがあった。続いて、B グループを代表し王グループ長からあいさつがあり、その後、中国教職員の紹介があった。乾杯のご発生を教育委員会 堀 民子教育委員長から中国でいただき、和やかな雰囲気の中で歓迎交流会が始まった。

交流会には荒尾市教育委員会関係者や訪問校の教師のほか、ホームビジットでお世話になった方々が出席されており、中国教職員は再会を楽しんでいた。司会の原課長によるサックス演奏や市長やグループ長を始めとする日中共同での「北国の春」のカラオケで盛り上がり、更には会場全員で炭坑節を踊り大盛況となった。中国教職員からも歌の披露があった。最後に、荒尾市校長会会長 緑ヶ丘小学校永尾 則行校長より閉会のあいさつがあり、大盛況の中、閉会となった。



歓迎交流会にて日中合同による炭鉱節

プログラム第7日の10月18日（火）午前、一行は丸山教育長、寺尾指導主事同行の下、荒尾市立第一小学校を訪問した。

同校は在校生 440 名、職員数 36 名(内 2 名育児休暇中)の中規模の学校で、1885 年設立、今年度で 127 周年になる、歴史ある小学校である。文部科学省や熊本県、荒尾市教育委員会からの指定を受け、盛んに研究を行っており、現在はより開かれた学校の実現のために 2013 年度からのコミュニティ・スクールの立ち上げを目指して研究実践に取り組んでいる。

同校に到着するとまず、図書室に案内され、橋本 直校長、猿渡 徳幸教頭、古川 保主幹教諭の紹介を受けた。引き続き、橋本校長から歓迎のあいさつがあり、訪問団を代表して肖副グループ長が受入れへのお礼を述べ、王グループ長より記念品が橋本校長に渡された。橋本校長から学校概要説明があり、訪問団からはコミュニティ・スクールの制度および内容や児童学力調査の内容と方法について等の質問が寄せられた。

その後、2つのグループに分かれて、猿渡教頭、古川主幹教諭の案内の下、2時間目の各学年の授業参観を行った。3時間目は1年生の生活、3年生の音楽の授業に中国教職員が参加し、児童との交流の機会が与えられた。生活の授業では訪問団から中国の「じゃんけん」の仕方を紹介し、児童らと声をそろえてゲームを楽しんだ。3年生の音楽の授業では、フフホト市新城区蘇虎街実験小学の張 莉(ZHANG Li)校長が音源付きのパワーポイントを使い、中国の伝統的な楽器の紹介を行った。児童らは初めて耳にする楽器の音色を楽しそうに、真剣に聞いていた。



第一小3年音楽の授業で中国教員による中国楽器の紹介

その後図書室に集合した中国教職員は熊本の名産、名物にちなんだ給食をいただいた。「熱烈歓迎大家到荒尾一小来」と記載されたランチョンマットは同校の教職員による手作りのものをご用意いただいた。

教職員の方々や生徒に見守られ、一行は同校を後にした。

同日午後、一行は荒尾市立荒尾海陽中学校を訪問した。同校は生徒数 860 名、職員数 69 名の熊本県北区で最も大きな中学校であり、部活動が盛んに行われている。今年度は男子バスケットボール部が九州大会に出場したのを始め、県大会にも女子バレーボール部やバドミントン部などが出場している。吹奏楽部などの文化的な活動も盛んに行われている。



荒尾市立海陽中学校教職員手書きによる歓迎横断幕

同校に到着すると、校舎入り口には、同校の教職員が手書きしたという「歓迎」の横断幕を手にした生徒らが出迎えてくれた。図書室に案内された一行は、茶道部の生徒らによるお茶のおもてなしを受け、伝統的な日本文化を体験した。

同校馬場陽一校長から中国語による歓迎のあいさつを受け、中国教職員からは、肖副グループ長から受入れに対して感謝の意が述べられ、王グループ長より記念品が渡された。

その後、2つのグループに分かれて馬場校長と益崎慎司教頭に案内され、体育、国語、英語を始めとする様々な授業参観を行った。国語の授業で漢詩を学んでいたクラスから矛盾を中国語で読んでほしいという依頼を受け、長春市寛城区南京小学陳慧娟

(CHEN Huijuan)校長が授業を行った。通訳を介しながらの短時間の授業ではあったが、黒板の前に立つ姿勢や生徒を見る目は、教師そのものであった。授業を聞いていた生徒にとっては印象深い思い出になったと思われる。

授業参観後は、図書室に戻り、同校の教職員も加わり、馬場校長による学校概要説明、質疑応答の時間となった。

訪問団からは体育の授業内容とその方針についてや、特別支援学級に通う生徒の卒業後の進路などについての質問が出た。

その後は、部活動に励んでいる生徒の様子を参観した。野球部、バスケットボール部、柔道部、剣道部といった運動系の部活動から吹奏楽部、茶道部、美術部といった文化系の部活動まで見学し、課外活動の様子を知ることができた。

教職員、生徒らから見送られながら、一行は同校を後にした。

プログラム第8日の10月19日（水）の午前中は、西嶋 徹指導主事同行の下、熊本県立荒尾養護学校を訪問した。同校は1979年に開設された知的障がいの児童生徒の教育を行う特別支援学校で、小学部、中学部、高等部、重複障がい学級に現在122名の児童生徒が在籍している。「たくましく・ほがらかに・のびやかに活動できる児童生徒の育成」をめざし、児童生徒の生活年齢や個々の児童生徒の発達や教育的ニーズに応じて文部科学省が定める学習指導要領に則り、教育課程を編成し、79名の教職員が校務にあたっている。



熊本県立荒尾養護学校にて熱心にメモをとる中国教職員

一行が到着すると、中山 龍也教頭司会進行のもと、受け入れ式が始まった。訪問代

を代表して、肖副グループ長から受け入れ感謝の旨、あいさつがあり、続いて和久田恭生校長から中国語で歓迎のあいさつが行われた。

中山教頭から「熊本県立荒尾養護学校の教育」と題して日本における特別支援教育の歴史や熊本県内の特別支援学校のこと、荒尾養護学校での取り組みについて説明を受けた。その後は2つのグループに別れ、中山教頭と加藤 賢治高等部主事の案内の下、校内の見学を行った。年に一回の学校のお祭りである「荒陽まつり」の準備で、構内には地元企業がボランティアで組み立てたという遊具が設置されており、小学部の生徒と近隣小学生と一緒にその遊具で遊んでいた。このような経験をすることで物を共有したり、順番を待ったり、お互いに関わりを持つことを学んでいるという。中学部では陶芸の時間やクッキーを作っている様子を見学した。重複障がい学級では医療的なケアも必要な児童生徒が在籍しているが、1対1で同校の教職員が児童生徒に向き合われていた。一人ひとりの児童生徒のニーズに合わせて開発された教材についても紹介いただいた。そのような教材を用い、教育することで、コミュニケーションや動きが取れるようになることが分かってきたという説明を、訪問団は熱心にメモを取っていた。高等部では工芸の授業で、木工工芸品を作っている様子を見学した。全ての児童生徒が教職員の愛情と責任とで教育を受けていることに関して、中国教職員の多くは感銘を受けていた。また、王グループ長は「特別な支援が必要な児童生徒を通して、道徳やマナーが生まれるのだろう」という感想を述べた。校内見学が終わると質疑応答の時間になり、授業内容をどのように決めるのか、進学試験の内容と方法、卒業後の進路、児童生徒1名にかかる予算、クラス編成、児童・生徒会活動内容についてなど活発な質疑応答の時間となった。

和久田校長から最後にごあいさつをいただき、訪問団へのお土産として同校の生徒が作った積み木をいただき、一行は同校を後にした。

同日午後、一行は万田坑を訪問した。万田坑は三池炭鉱の坑口の一つとして、当時、

三井が総力を挙げて整備した日本での最大規模の炭鉱施設である。1910年代から40年代にかけて、施設の整備により出炭量も増大していったが、1951年、採炭効率の低下により採炭を中止し多くの施設は解体された。一部施設が現存しており、明治・大正期における三池炭鉱の最大級の施設として当時の優れた炭鉱の技術を伝えているため、国の重要文化財に指定されているほか、日本で唯一、国の史跡に指定されている。また、「九州・山口の近代化産業遺産群」の構成資産として、ユネスコ世界文化遺産の暫定リストにも入っている。

当日は、かつて万田坑で働いていた方から万田坑の歴史などの概略の説明を受け、第二堅坑坑口などの施設を見学した。炭坑跡をユネスコ世界文化遺産として残そうとする取組みに関心を持つ中国教職員もいた。

その後、一行は宮崎兄弟の生家を訪問した。宮崎兄弟は孫文たちを支援し、辛亥革命を日本から支えた革命家である。特に末弟の滔天の仲立ちにより辛亥革命の実行部隊である中国同盟会が成立した。孫文は宮崎兄弟の家に辛亥革命前と成功後に2度滞在したことがある。今年は辛亥革命100周年目になる。

当日は、宮崎兄弟の生家施設 安田 信彦 所長から説明を受け、併設してある荒尾市宮崎兄弟資料館にも足を運んだ。なお、同施設での通訳はホームビジットや歓迎交流会でもお世話になった史 青秀氏が行った。

中国教職員の多くは辛亥革命に協力した日本人の存在は知っていたものの、今回の荒尾市訪問を通じて、宮崎兄弟のことを知ることとなった。「孫文と宮崎兄弟のような本物の関係を自分たちも荒尾の方々と築くことができた」と中国教職員は表現しており、宮崎兄弟のおかげでより印象深い、活発な交流になった。



宮崎兄弟生家にて 所長の話に熱心に聞く中国教職員

その後市役所で、第2回情報共有会を行った。これまでの活動の感想を共有し、予定していた終了時間を過ぎても熱心に、大阪での報告会に向けて準備を行った。

終了時間が大幅に過ぎていたにも関わらず、情報共有会場の外には、荒尾市教育振興課の方を始めとする多くの方が待機してくださり、市役所を離れる一行を盛大に見送っていただいた。

プログラム第9日の10月20日(木)午前、一行はホテルをチェックアウトした後、荒尾市教育委員会教育部教育振興課の原課長と寺尾指導主事からごあいさつがあり、バスで福岡空港に向かい、その後飛行機で大阪に渡った。大阪で昼食をとった後、同日午後、一行は宿泊先のリーがロイヤルホテル大阪へ到着した。

2-3. C グループ: 東京都多摩市

瀋陽市盲校の秦世広(QIN Shiguang)校長をグループ長に、主に中学校教職員を中心としたCグループ26名は、10月16日から20日までの5日間、東京多摩市を訪問し、同市教育委員会の協力により、市立小学校および中学校、私立中学校・高等学校、都立の特別支援学校各1校ずつと、文化施設としてパルテノン多摩、企業訪問としてベネッセコーポレーションを訪問した。

プログラム第5日の10月16日(日)、一行は宿泊先ホテルからバスで多摩市へ赴いた。多摩市役所2庁会議室に於いて、ホームビジット対面式が行われた。訪問団は

清水哲也教育長とホストファミリーである14の家族に出迎えられ、その後、各受入れ家庭を訪問し、ボランティア通訳の方々のご協力もあり、各家庭で日本の生活の様子を体験し、充実した時間を過ごすことができた。

プログラム第6日の10月17日（月）午前、多摩市役所において教育長表敬訪問が行われた。まずはじめに、清水哲也教育長から歓迎のあいさつがあり、多摩市の教育を紹介すると共に、友好関係が深まることを願っていると述べた。次に訪問団を代表して、秦分団長は多摩市を訪問することへの感謝と訪問中の学びへの期待を述べた。公務により教育長はここで退席となり、その後、多摩市教育委員会の福田洋一統括指導主事による、多摩市の紹介と教育概要オリエンテーションが行われた。多摩市の四季や歴史を写真で紹介し、教育概要では主に多摩市におけるESD推進について説明が行われた。その後の質疑応答においても、上海市三門中学・高校の劉尚斌（LIU Shangbin）校長より、自分の学校もASPnetスクールであるが、多摩市の学校による緑のカーテンの活動では、地域の協力により、児童生徒と市民がつながりを広げていく様子が興味深いとの感想が述べられ、长春市緑園区正陽小学の王淑榮（WANG Shurong）校長からも、ESDの教材はどのように用意されているのか、といった質問が挙がり、中国教職員によるESDへの関心の高さがうかがわれた。このほか、学校評価についての質問などが挙げられた。



青陵中 給食体験

一行は多摩市立青陵中学校を訪問し、メ

ディアホールにて、まずそこで笹森肇校長からあいさつをいただいた。同校は、緑豊かな丘陵地に位置し、生徒も比較的落ち着いた学校生活を送っている。教育目標として「自ら学ぶ力・共に生きる心・健やかな体・品格ある態度」の4つを掲げている。訪問団を代表して杜穎亮（DU Keliang）副校長が返礼のあいさつを述べ、その後家庭科室に移動して、給食をいただいた。テーブルには花や折鶴などが飾られており、また、教員による独唱の披露など、同校教員による細やかな心遣いのもと、和やかな昼食のひと時となった。食後の休憩の後は、2グループに分かれて5校時の授業見学を行った。体育館では3年生による学年合唱の練習が行われており、小須田秀実副校長から合唱コンクールについての説明を聞きながら、静かに練習の様子を見学した。その後、各教室での合唱練習も見学をすることができた。

一行は再びメディアホールもどり、2グループに分かれて同校の教職員と意見交換会が行われた。



青陵中 意見交換会

同日午後6時より、多摩市教育委員会とACCU共催による歓迎交流会が京王プラザホテル多摩にて開催された。福田統括指導主事の司会進行の下、まず多摩市教育委員会清水哲也教育長より歓迎のあいさつがあり、訪問団からはCグループを代表し、趙景蓮（ZHAO Jinglian）副分団長があいさつを述べた。続いて主催者を代表してACCU事業部の柴尾智子次長があいさつし、秦世広（QIN Shiguang）分団長と教育長との間で記念品の交換が行われた。



多摩市歓迎交流会 記念品交換
(左 清水教育長、右 分団長)

川田賢司教育部長による乾杯の発声の後、和やかな歓談が行われた。会の半ばには多摩太鼓愛好会による迫力ある和太鼓演奏が披露され、中国教職員も実際にバチを握り演奏を体験した。また、前日のホームビジットで参加者を受け入れたホストファミリーが壇上に上がり、多摩市立瓜生小学校の鈴木純一郎校長が当日の様子を報告する場面もあり、参加者全員が前日を振り返りながら楽しむことができた。そして、訪問団から南京市第十二中学・高校中学部の徐樹忠 (XU Shuzhong) 校長と瀋陽市第八十八中学・高校の齊怡 (QI Yi) 教員が壇上に上がり「北国の春」を披露し、川島清美教育部参事による締めあいさつのあと、最後に集合写真を撮影して、歓迎交流会は閉会した。



多摩市歓迎交流会 多摩太鼓体験

プログラム第7日の10月18日(火)午前、一行は特別支援学校である東京都立多摩桜の丘学園を訪問した。同校は昭和60年4月に開校し、平成22年4月に小学部、中学部、高等部を併置する知・肢併置校とし

て新しくスタートした。平成22年度には、東京都教育委員会から①OJT推進校、②ICT活用校、③併置の利点活用校の3つ研究指定を受け、教員全員の研究授業やOJTを実施し、指導力向上や人材育成を推進している。研修会議室にて、杉野学校長よりあいさつがあり、訪問を代表して秦世広分団長からあいさつがあった後、訪問団から学校に記念品が贈呈された。伊藤主幹教諭による学校紹介が行われ、その後2グループに別れて知的障害・肢体不自由の授業や特別教室等の施設を見学した。研修会議室に戻り、2グループに分かれての意見交換が行われた。



多摩桜の丘学園(特別支援学校)訪問

同日午後、一行は多摩市立多摩第一小学校を訪問した。同校は今年度創立100年目を迎える歴史ある学校である。学校の直ぐ北側に多摩川が流れており、植物採集や野鳥観察ができる自然も豊かである。一昨年完成した新校舎には、ビオトープのある前庭があり、豊かな自然を生かした環境教育を実施している。今年度からユネスコスクールとしてESDにも取り組んでおり、気仙沼市立大谷小学校とも交流がある。



多摩市立第一小学校_お昼休みに子供たちと大縄跳び

まずはじめにさくらホールに於いて開会セレモニーとして、棚橋乾校長よりあいさつがあり、訪問団を代表して杭州市景成実験学校の張虹(ZHANG Hong)副校長からあいさつがあった。その後、各学年・クラスの児童らが参加者を迎えに来て自分たちの教室へ案内し、中国教職員たちは児童と共に給食をいただいた。そのまま午後の清掃の時間やお昼休みも子供たちと過ごし、漢字で名前を書きあったり、中庭で大縄跳びをしたりして楽しい交流のひと時を過ごした。その後、さくらホールに戻り 2 グループに分かれて意見交換会を行った。太陽光発電やビオトープといった施設を使いどのような活動を行っているのか、中国では、一日に 1 時間体を動かす時間が必要であると決められているが日本はどうであるか、といった質問が挙げられた。その後、校舎を背景に記念撮影を行い、一行は学校を後にした。



多摩大学付属中高 質疑応答

プログラム第 8 日の 10 月 19 日（水）午前、一行は学校法人田村学園多摩大学付属聖ヶ丘中学高等学校を訪問した。同校は 6 年間一貫の私立共学校であり、各学年 120 名 3 クラスが学則定員で、現在 22 クラス 743 名が在籍している。男女比ではおよそ 6:4 と男子が多い。全員が大学進学希望だが、人間教育にも重点をおき、「本質に迫る」「本物を見せる」授業に力を注いでいる。部活動では、高校ダンスドリル部が今年 3 月米国で開催された世界大会で部門優勝しており、水泳部、サッカー部、吹奏楽部なども活発に活動している。卒業生にはプロ野球選手や（福岡ソフトバンク、横浜ベイ

スターズ)、芸能人などの有名人も輩出している。



多摩大学付属中高_物理の実験道具をみる

まずはじめに、丹伊田敏校長からあいさつとスライドを使つての学校説明があり、公立・私立学校運営の違い、校訓、教育目標、学校生活、体験・実習の充実などについてお話をいただいた。その後、多摩大学を含む施設内を見学した。同校教員との意見交換では、日本国内において一般的に学校の価値を決め基準は何であるか、生徒たちの受験に対するプレッシャーはどうかなど、入試に関連する質問が多くあげられた。

同日午後、パルテノン多摩のレストランで食事をした後、同施設のホールにて行われている、青陵中学校合唱コンクールを一部鑑賞した。17 日の訪問で、生徒らの練習の成果を見ることができた。その後、同施設内のマジックサウンドルームにて、100 年前にアメリカやドイツなどで作られたオルゴールや自動演奏楽器を見学し、同施設を後にし、近隣のサンリオピューロランド前で集合写真を撮影した。



サンリオピューロランド前で記念撮影

その後、一行は徒歩で株式会社ベネッセコーポレーションを訪れ、1階のエントランスで広報部社外広報課担当課長三田村有氏をはじめとする同社職員より歓迎を受けた。13階大会議室にて、三田村課長より、創業者である福武哲彦が小学校の教員であったこと、「建物のない学校をつくりたい」という理念の元、企業を設立したことなどが紹介された。DVDによる事業紹介の後、海外教育事業本部長兼中国事業総代表の松平隆氏より、中国事業の紹介と質疑応答があり、続いてベネッセ次世代育成研究所の後藤憲子部長、Benesse 教育研究開発センターの沓澤糸調査研究課長より、同社による研究調査活動についての説明をいただいた。最後に、21階の展望フロアに案内され、地上 100m の位置から多摩丘陵を全方位で一望することができた。



ベネッセコーポレーションでの質疑応答

その後、パルテノン多摩の会議室において、第2回情報共有会を行い、大阪での報告会に向けて準備を行った。会議終了時には、この日が最後の同行となる福田指導主事より別れのあいさつがあり、訪問団からは感謝の拍手と記念品が送られた。

プログラム第9日の10月20日（木）午前、一行はホテルをチェックアウトし、多摩市を後にして羽田空港に向かい、空路伊丹空港へ向った。伊丹空港から大阪市内へ向う途中昼食を取り、午後、宿泊先のリーガロイヤルホテル大阪に到着した。

2-4. D グループ：岡山県総社市

中学校および高等学校教員を中心とし、袁 樹和（YUAN Shuhe）分団長に率いられたDグループ28名は、10月16日（日）から10月20日（木）までの5日間、小学校1校、中学校2校、特別支援学校1校のほか、総社市の文化施設（きびじつるの里、吉備寺クリーンセンター、国分寺、岡崎嘉平太記念館）を視察した。

10月16日（日）の早朝、訪問団は都内ホテルから、バスで羽田空港へ向かい、岡山空港へ向けて飛び立った。不安定な天候が続いていた週だったが、到着したこの日はすこやかな秋晴れとなった。岡山空港に到着し、バスで昼食会場に向かう道中、同日行われるホームビジットに備えて、訪問団全員で「いただきます。」「おいしい！」「ごちそうさまでした。」「ありがとう。」などの簡単な日本語の練習をし、車中、とてもにぎやかな時間を過ごした。一時間程で昼食場所のホテル日航倉敷へ到着し、訪問団はレストランの洋食セットを食べながら、「おいしい！」と口々に練習の成果を発揮していた。

昼食後、ホテルリソル倉敷にてチェックインを済ませ、訪問団は総社市役所へと向かった。訪問団が宿泊した倉敷市から訪問先の総社市までは、片道約10km、40分程度の移動となった。

ホームビジットの対面式の会場である市役所の会議室に入ると、ボランティア通訳も含め、ファミリー毎に分かれたグループが、中国教職員の名前の書かれた紙をそれぞれ掲げ、訪問団を温かく迎えた。訪問団がグループに入ると、ボランティア通訳を介し、互いにすぐに自己紹介をし合い、会場は一気に和やかなムードとなった。少し時間が経過してから、総社市教育委員会学校教育課 片岡 正喜課長より歓迎のあいさつが述べられ、ACCU随員より本事業の目的とホームビジットの受け入れ、ボランティア通訳へのお礼が述べられた。

3時間ほどのホームビジットを終えると、それぞれのホストファミリーがホテルリソル倉敷まで訪問団を送り届けた。翌日の歓迎交流会での再会の約束をし、中国訪問団

と総社市の家庭との間で友好関係を築くことができた。



歓迎交流会にてホストファミリーを囲んで記念撮影

総社市に到着してから2日目の10月17日(月)、総社市役所にて総社市の教育概要オリエンテーションと総社市長および総社市教育委員会教育長の表敬訪問が行われた。昼食を挟んで午後には総社中央小学校を訪問した。その後、歓迎交流会の会場(サンロード吉備路)内にあるきびじつるの里を見学後、夕刻からは、歓迎交流会が執り行われた。



歓迎交流会

総社市の教育概要オリエンテーションでは、本プログラムにおける総社市の受け入れは、平成19年度、21年度に続き、今回で3回目となり、市にはブラジル、中国、韓国などの方々が住んでおり、どの国の方にとっても住みやすい町、多文化共生の町を作ろうと全市民で取り組んでいると、総社市教育委員会 栗田 交三教育長から説明があった。

続いて、栗田教育長から教育委員会の構

成や2011年度の主要施策を始め総社市の教育概要の説明がされた。算数(数学)などの成績に差がしやすい教科に関しては、小学校から習熟度別少人数指導に取り組んでおり、子どもひとりひとりのニーズに応じた教育支援体制をとっていると説明された。説明後、訪問団からは下記のような質問が出された。

- ①教育委員(6名)の委員は全員が正規職員か。
- ②幼稚園教育にも力を入れており、幼稚園と小学校の連携とあるが、具体的な両者の取り組みはどんなものか。
- ③学校評価システムについて。

その他、学校の年間の予算や通学している生徒の家庭が負担する授業料などを中心に、多くの質問が訪問団から寄せられ、時間内に回答することができなかった質問に関しては、後日、教育委員会より紙面にて回答を頂いた。

オリエンテーションが終わると、同会場で総社市市長・教育長表敬訪問が行われた。

大学時代に第二外国語で中国語を選択していたという片岡 聡一総社市長は、中国語のフレーズを10種、発音された。中国教職員からは、温かい拍手を受け、会場に張り詰めていた緊張感が一気に緩和された。市長は、近年は子どもたちの地域に対する尊敬や、目下、家族への愛、親に対する尊敬の姿勢がなくなっているが、総社市では「礼儀」「礼節」というものを子どもの時からしっかりと教育していると話された。

袁(YUAN)分団長は文化のレベルがとても高く、それは教育の基礎がしっかりしている証拠であり、総社市での視察を通して日中の交流の促進を図り、両国の教育の促進に寄与したいと述べられた。

午後には、総社市での最初の訪問校、総社市立総社中央小学校を訪れた。

最初に、校内地図をもとに自由に校内および授業を見学した。その後、体育館へ移動し全校生徒による音楽集會を見学した。

児童二人による司会で歓迎のあいさつが行われ、5年生が中国民謡の「まつり花」を中国語で披露してくれた。一生懸命に中国語で歌う生徒を見て、訪問団はとても感動した様子だった。音楽集會が終わると、学校概要の説明と教職員との意見交換が行

われ、下記のような質問が出された。

- ①学校要覧に5人の医師（校医、歯科医、眼科医、耳鼻科医、薬剤師）がいるが、彼らの雇用形態について。
- ②算数の少人数制の導入は放課後などの特別な時間帯に行うのか、それとも通常の時間割の中で行うのか。
- ③教員の勤務時間について。（教員は教師の仕事以外の収入源はあるか。）
- ④PTA会費の使用用途について。

訪問を終えて、袁（YUAN）分団長は学校の生徒数に対し、校舎の規模や配置などが合理的に無駄なく設置されていると述べられた。また、中国では学力への指導にばかり力が入り、子どもたちへ圧力が強くかかっているが、日本では楽しく、総体的に生徒の気質や個性をのばす教育が素晴らしい、と感銘を受けていた。

総社中央小学校訪問後、特別天然記念物タンチョウの保護と繁殖を目的とした施設であるきびじつるの里を見学後、総社市教育委員会運営の下、歓迎交流会が執り行われた。

歓迎交流会では、中国訪問団、ホームビジット先のホストファミリーの方々や訪問先の校長や教頭が一堂に介した。栗田教育長は、総社市では、安心して子育てができる「子育て王国」を合い言葉に「礼儀正しい子」に育てるという目標を持って教育に取り組んでおり、訪問団の皆様も、学校訪問を通して、その一端を感じとって欲しいとあいさつされた。訪問団はホストファミリーと一緒に写真を撮ったり、ボランティア通訳を介して日本の教育について質問したりと終始、和やかな2時間となった。ホストファミリーと訪問団の間で連絡先の交換をしたり、両者の更なる友好関係を築き上げることができた。

歓迎交流会の前に訪問した総社中央小学校や翌日から訪問する学校関係者との間にも親善関係を築き上げることができた。

プログラム7日目の10月18日（火）、午前中に吉備路クリーンセンターと国分寺を見学し、午後には総社市立総社東中学校を訪問した。

吉備路クリーンセンターでは、無駄のな

いゴミ処理方法の説明を受け、不燃ごみや可燃ごみの分別や再利用のシステムについて中国のゴミ処理方法と比較しながら、活発に質問が出された。

その後、国分寺を見学し、境内にそびえる五重塔がどの方角から見ても美しいと、訪問団は幾度も記念撮影をしていた。

午後には、総社市立総社東中学校を訪問した。授業見学では2グループに分かれ、数学、理科、英語、道徳の時間を見学した。

訪問団は、教室内に掲示してある生徒の作品や生徒の制服などにもとても関心を寄せていた。上岡 仁校長より、2007年に総社市教育委員会に勤務しているときに初めて中国教職員訪問団を受け入れたこと、翌年2008年には北京、青海省西寧市の学校を訪問し、中国政府日本職員招へいプログラムに参加したこと、2009年には山手小学校の校長として勤務している時に、中国訪問団を受け入れたことが述べられ、その後、東中学校の学校概要の説明があり、意見交換が行われ、訪問団からは下記のような質問が出された。

- ①校舎がとてもきれいでお花や樹木が植えられているが誰が植物の世話をを行うのか。
- ②性教育には専門の先生はいるのか。どの授業で行うのか。
- ③教員の業務による疲労についてはどのように考えているか。教職員の負担軽減について。



総社東中学校で「北国の春」を生徒のブラスバンド演奏に合わせて熱唱

意見交換が終わると、陸上競技、サッカー、野球、ソフトテニス、卓球、剣道、吹奏楽部の部活動を見学した。

最後に吹奏楽部の演奏の下、『北国の春』を訪問団は熱唱し、生徒、教員、訪問団は楽しい時間を過ごした。

プログラム8日目の10月19日(水)の朝、
県立早島支援学校を訪問した。



早島支援（教員意見交換会）

中野 隆重校長より、東日本大震災における中国の協力に最初にお礼が述べられ、学校でもさらに防災教育を推進していきたいと述べられた。早島支援学校には病弱、衰弱、身体不自由の児童がおり、それを実際に目で見ていただき、感じたことすべてを中国へ持って帰っていただきたい、とあいさつされた。

中国では重度の障害を持っている子どもは施設に入ることが多いが、早島支援学校では障害の重度によってクラスが分けられており、一人の国民として教育を受ける権利が尊重されていると訪問団の一人は話し、大変感銘を受けていた。

その後、二つの分科会に別れ、自由に感想や意見を話す時間が 30 分程度設けられた。そこでは、子どもの学費や国の経費補助について、進級のさせ方、子どもたちの卒業後の進路などについて活発な意見交換がされた。大変な任務で教師を辞めたいと思ったことはないか、という訪問団からの質問に対して、ある教員は「毎日仕事を終えて帰宅すると疲労感でいっぱいである。

教員暦 10 年の間に生徒が 6 人亡くなっている。そんな場面に直面するたびに、命の大切さを彼らから教えてもらおう。そして、深く考えずに前を向いて、活発に働こうという気持ちに切り替えるようにしている。」と話された。

早島支援学校の子どもたち、その子どもを教育する教員たちの姿から訪問団は人権の尊重についてとても深く考えさせられた様子だった。



総社西中学校（給食交流）

早島支援学校の訪問を終えてすぐに、総社市立総社西中学校へ移動した。総社西中学校では、生徒たちとの給食交流が行われた。訪問団の名前が書かれている紙を学生が手に持ち、1年生から3年生のそれぞれのクラスへ訪問団は案内され、学生と一緒に給食交流を楽しんだ。生徒たちはとても緊張した表情だった。



総社西中学校（生徒との懇談会）

給食交流後は、藤井 和郎校長から学校概要の説明がされ、自由に授業見学が行われた。その後、合唱部による歓迎合唱が行われ、最後に、生徒会のメンバー約 10 人と訪問団との懇談会が行われた。

懇談会では、生徒から訪問団に対して、中国が経済発展を遂げて、発展前後でどのような違いを感じるか、日本では現在、震災復興が真剣な問題となっているが、中国での現在の課題は何か、という質問がされ、訪問団は生徒の質問に真剣に回答していた。



総社市役所にて集合写真

その後、すべての学校訪問を終えた訪問団は、総社市役所へ向かい、大阪での報告会に向けて有効に情報共有会の時間を使った。予定の時間より、15分の延長を依頼する程、活発に話し合いがされた。

この時間を持って、総社市教育委員会の関係者とはお別れになり、片岡課長より訪問団へ訪問のお礼が述べられた。その後、全員で『北国の春』を大熱唱し、別れを惜しみながら市役所を後にした。

プログラム9日目、地方プログラム最終日の10月20日（木）の朝、岡崎嘉平太記念館を視察した。30分程度の館内見学やVTR視聴後、質疑応答の時間が20～30分程度設けられた。

岡崎氏の日本での評価について、この記念館には政府関係者は訪れたことはあるか、岡崎氏の子孫は現在どのような仕事に就いているか、1年間の見学者数についてなど、熱心に質疑応答がされた。

記念館の見学が終わり、無事にすべての地方プログラムを終えた訪問団は専用バスにて報告会の会場となる大阪へと出発した。



岡崎嘉平太記念館を視察

2-5. E グループ：徳島県

河北師範大学附属実験中学の王昕（WANG Xin）校長をグループ長に、主に高等学校教職員を中心としたEグループ27名は、10月16日（日）から20日（木）までの5日間、徳島県を訪問し、同県教育委員会の協力により、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校各1校ずつと、文化施設として徳島県立防災センターと大鳴門橋遊歩道渦の道を訪問した。

プログラム第5日の10月16日（日）、一行は東京から空路で徳島県へ赴いた。徳島あわおどり空港へ着くと、徳島県教育委員会学校政策課の西浦宏明課長をはじめ、中国の国旗を持った徳島県教育委員会の職員の方々からの訪問団の出迎えがあった。空港では、教育委員会の方々が17日に訪問する徳島県立科学技術高等学校の生徒がデザインした、空港のマスコット「うずびー」を紹介した。

昼食をとった後、一行は徳島県立防災センターを見学した。徳島県の児童・生徒および地域の防災への意識を啓発し、災害が起きた際は防災対策の拠点となるセンターである。はじめに、職員の方より防災センターの概要や徳島県の防災への取り組みについて説明があった。その後、2グループに分かれて煙、暴風、地震、火災の体験をそれぞれ行った。その後、近い将来起きる可能性が高い南海地震への徳島県の備えについての説明や、学校とセンターとの教育連携についても説明を聞くことができた。



徳島県立防災センターにて消火器体験

ホテル到着後、一行はホームビジットに参加した。ホストファミリー15家庭との対面式を終えた後、各受入れ家庭を訪問した。ホストファミリーの殆どは、教育委員会職員や訪問学校関係者であったため、中国教職員は和やかな雰囲気での後の学校訪問に臨むことができた。ホームビジットの翌日以降も、ホストファミリーと交流する参加者も多く見られ、国を超えた人間同士の交流をすることができた。ボランティア通訳の方々のご協力もあり、中国教職員は各家庭で充実した時間を過ごすことができた。

プログラム第6日の10月17日（月）午前、徳島県庁において徳島県表敬訪問が行われた。福家清司教育長は、中国教職員が徳島県の教育や文化について理解し、徳島県との教育交流の促進に繋げてほしいとあいさつされた。ACCUの島津正数事務局長は、念入りの準備と盛大な歓迎をくださった徳島県教育委員会に感謝するとともに、本プログラムが実り多いものになるよう祈る、と述べた。そして、王分団長は徳島県を訪問できることへの感謝と訪問中の学びへの期待を述べた。その後、徳島県教育委員会の福家教育長と、訪問団を代表して郭樹良（GUO Shuliang）総団長による記念品の交換を行い、徳島県と中国教職員との友好を促進することができた。

表敬訪問に引き続き、教育概要オリエンテーションが行われた。初めに、徳島県教育委員会学校政策課の木屋村浩章指導主事から徳島県の概要および徳島県の教育概要について説明があった。徳島県は基本的に3学期制を採用していることや目的に合わせたオーダーメイド型の教育旅行の受け入れを行っていること等の紹介があった。質疑応答では3学期制を採用する理由や学生の進路、徳島県の教育改革への取り組み、教員研修等について多くの質問が挙がった。



表敬訪問にて記念撮影

昼食後、徳島県教育委員会学校政策課の田上幸志統括指導主事、木屋村指導主事の同行のもと、一行は徳島県立科学技術高等学校を訪問した。同校は、徳島工業高等学校、徳島東工業高等学校、水産高等学校が統合し、2009年に新設された、6類11コースを有する新しいタイプの総合型専門学校である。「世界をめざす技術者へ！」のキャッチフレーズのもと、科学技術の高度化・複合化に対応できる人材の育成を目指している。学校へ到着した中国教職員は大会議室に案内され、まず長谷川道雄校長から歓迎のあいさつがあった。王分団長のあいさつの後に記念品贈呈が行われ、長谷川校長は、同校独自のタオルとうちわを贈呈した。その後、寺澤昌子教諭より、学校概要の説明があった。概要説明では、あいさつ・返事・清掃の徹底・服装や頭髮などの身だしなみのような基本を身につけることを学校生活の中で最も重視していることや、難関資格の習得やものづくりコンテストへ積極的に励み、全国的にもトップレベルの結果を残していること等が紹介された。その後の授業参観では、環境科学コースの実験装置の見学や海洋科学コースの操船シミュレータ、LEDを使用した生徒の手作りの「かぎまるガーデン」等を見学し、訪問団は最先端の実験設備を駆使した日本の科学技術教育に触れることができた。再び大会議室で行われた意見交換会では、訪問団から中国の高等学校におけるキャリア教育等について紹介があり、寺澤教諭から徳島県立科学技術高等学校の実例が示された。同校の教職員の方々に見送られ、一行は学校を後にした。



LEDを利用した生徒手作りの「かぎまるガーデン」

同日午後6時より、ACCU、徳島県教育委員会共催の歓迎交流会が催された。田上統括指導主事の司会進行の下、まず徳島県教育委員会福家教育長より歓迎のあいさつがあった。Eグループを代表し、区偉軍(OU Weijun)副分団長のあいさつが終わると、郭総団長より中国教職員の紹介があった。司会より徳島県側の出席者が紹介され、ACCUの島津事務局長より乾杯のあいさつがあると、和やかな祝宴が始まった。各テーブルでは、前日のホストファミリーとの再会を喜ぶ姿や訪問先の学校教員との会話を楽しむ姿が見られた。終盤に入ると、徳島県、そして日本を代表する踊りである「阿波踊り」が披露された。阿波踊りを観賞した後、演者が出席者に阿波踊りの由来や踊り方を教えた。最後は出席者全員で阿波踊りを踊り、会場の一体感が一気に増した。最後に、学校政策課の西浦課長より閉会のあいさつがあると、中国教職員は、他の出席者と再会を誓いながら会場を後にした。

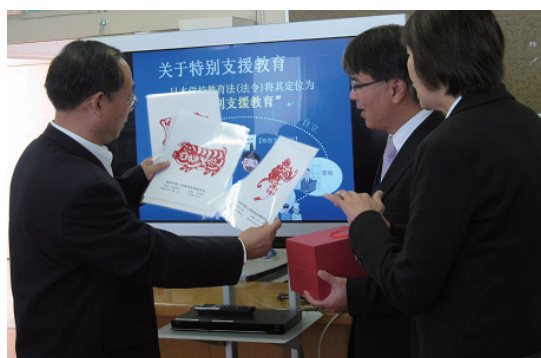


会場の全員で阿波踊り

プログラム第7日の10月18日(火)午前、一行は徳島県立ひのみね支援学校を訪問した。

同校は徳島赤十字ひのみね総合療育センターに隣接する肢体不自由児のための支援学校である。児童生徒数は51名であり、小学生から高校生までが在籍している。まず、川田人包校長から中国語を交えた歓迎のあいさつがあった。次に訪問団を代表して王分団長が、受入れへのお礼を述べた。その後、川村桂子副校長より特別支援教育および徳島県立ひのみね支援学校の概要説明があった。概要説明では、はじめに日本および徳島県の特別支援教育の現状、生徒数の

紹介があった。そして徳島県立ひのみね支援学校の特色として、隣接する療育センターとの連携により、障害の重度・重複化に対応している等の説明があった。質疑応答の時間には、事前に学校側から用意されていた中国の障害のある児童生徒の就学状況に関する質問に、南京市盲人学校の祁耀華(QI Yaohua)校長より説明があった。また、中国教職員からは、クラスの分け方や教育にかかる費用を決める基準、特別支援学校教員の教員免許について等の質問が寄せられた。



徳島県立ひのみね支援学校にて記念品贈呈

その後、中国教職員は隣接する徳島赤十字ひのみね総合療育センターを見学した。次に、初等部、中等部、高等部のグループに分かれ、学校内を見学した。その後、中国教職員は同様のグループで、音楽等の授業に参加し、歌を歌い、楽器の演奏を行った。生徒の一生懸命な姿に、涙を浮かべる中国教職員もいた。歌や楽器の演奏を通して、言葉が通じなくとも生徒と交流を図ることができた。教職員の方々や生徒に見守られ、一行は学校を後にした。

同日午後、一行は徳島県立名西高等学校を訪問した。

同校は創立89年を迎えた、普通科と芸術科(音楽・美術・書道)が設置されている中規模の公立高校である。平成18年に文部科学省よりスーパー・イングリッシュ・ハイスクールの指定を受け、英語教育や国際理解教育に積極的に取り組んでいる。学校へ到着すると、はじめに、吉野勝裕校長のあいさつおよび区副団長の受け入れへのお礼があった。その後、音楽科の生徒による「さくらさくら」の合唱が披露された。

次に学校概要の説明があった。同校が国際理解教育や姉妹校交流に積極的に取り組んでいることや、全国大会に出場経験のある部活動が多くあること、芸術科の紹介や著名な人物が卒業生に多くいること、「朝の読書時間」を設けていること等が紹介された。その後2つのグループに分かれ、書道、時事英語、数学の授業を見学した。その後の意見交換では、プリント教材の利用法や、英語の授業の種類（リーディングやスピーキング等）、芸術科の生徒の進路等についての質問があった。その後、部活動見学を行い、中国教職員は、弓道部、相撲部、オーケストラ部等の部活動を見学した。



徳島県立名西高等学校で書道の授業を見学

日本文化に関係した多くの部活動を見学し、訪問団は日本文化に触れるとともに、日本文化を継承する教育への理解を深めた。終了予定時間を過ぎていたにもかかわらず、吉野校長、岩本昌之国際課課長をはじめとする教職員の方々が快く案内してくださった。教職員の方々の見送りを受け、一行は学校を後にした。



徳島県立名西高等学校で相撲部を見学

プログラム第8日の10月19日（水）、Eグループは2グループに分かれ、12名が徳島市立加茂名中学校を、15名が徳島市立千松小学校を訪問した。

徳島市立加茂名中学校は、創立65年目を迎えた特別支援学級3学級、通級指導教室

1学級を有する中規模校である。『一人ひとりの「笑顔」～輝ける目・感動・温かい心～』を教育目標としている。井上一男教頭の歓迎のあいさつの後、南京市盲人学校の祁校長が受け入れへのお礼を述べた。

その後、2グループに分かれて施設および授業見学を行った。中国教職員は、音楽や美術等の授業を見学した後、給食室で給食をつくっている様子を視察した。教職員との懇談会では、特別支援学級の規模、特別支援学級に通う生徒の進路、専科と5科目（国語・数学・英語・理科・社会）の授業時間の割合等の質問が上がった。学校側からも、日本の国語の教科書で中国の小説家である魯迅の小説が取り上げられていることを紹介し、中国の教育の中で、日本文化に触れられる時間はあるかという質問が挙がった。関心のある中国教職員へ国語の教科書が贈呈される等、双方による活発な交流の機会となった。給食は、訪問団が生徒と同じように配膳から片付けまでを行った。訪問団は給食が教育そのものであることの理解を深めた。その後、体育館で1年生との交流会があった。生徒が10グループに分かれ、中国についての質問をジェスチャーや漢字、絵等を用いて、各グループにいる中国教職員に行い、正解数を競うというゲームを行った。言葉が通じないにもかかわらず、あらゆる手段を使用し、生徒も中国教職員も満面の笑みで交流していた。最後に、教職員の方々に見送られ、一行は学校を後にした。



加茂名中学校生徒と楽しく交流

徳島市立千松小学校は、創立 140 年を迎えた児童数 1,010 名の大規模校である。平成 21 年度に文部科学省の電子黒板事業の指定を受け、全教室に電子黒板が設置されている。はじめに、体育館にて全校児童からの歓迎行事を受けた。歓迎行事では、全校児童と訪問団で「茉莉花」を歌い、その後中国に関するクイズを行う時間があつた。最後に、全員で阿波踊りを踊った。その後の授業見学では、電子黒板を用いた、理科と外国語活動の授業を見学した。次に、中国教職員が 3 人ずつに分かれ 5 年生の 5 クラスに入り、生徒と給食交流を行った。児童からは、先生方の出身地、出身地の気候や東日本大震災についてどう思ったか等多くの質問が挙がった。給食後は、児童が牛乳を飲んだ後のパックのたたみ方等を説明した。中国教職員は、児童が配膳から片付けまで行うことに感銘を受けた様子であつた。その後の意見交換会では、学区制はあるか、PTA の会議をいつ開くのか、PTA 会議を夜開く場合の教師への負担についてどのように考えるか、すべての科目でチームティーチングを行っているか等についての質問が出た。



徳島市立千松小学校児童と給食交流



徳島市立千松小学校全校児童と一緒に阿波踊り

その後ホテルに戻った一行は、第 2 回情報共有会を行った。これまでの活動の感想を共有するとともに、大阪での報告会に向けて準備を行った。

プログラム第 9 日の 10 月 20 日（木）午前、一行はホテルをチェックアウトした後、徳島県教育委員会学校政策課の大西浩正副課長をはじめとする教育委員会の方々の盛大なお見送りを受けて、徳島県からバスで大阪へ向かった。大阪へ向かう途中、鳴門海峡の「大鳴門橋遊歩道渦の道」を訪問した。中国語ガイドの案内のもと、訪問団は鳴門の自然が生み出す渦潮を観察した。昼食をとった後、同日午後、一校は宿泊先のリーガロイヤルホテル大阪へ到着した。

3.全体プログラム（京都・大阪）

3-1. 京都世界遺産見学および伝統工芸体験（第10日）

それぞれの訪問県・市から大阪に移動した各グループは、プログラム第10日の10月21日（金）、引き続き5つのグループにて、午前中は京都にある鹿苑寺金閣を訪問し、午後には友禅染体験、および清水寺への訪問見学を行った。京都の観光ガイドの説明は詳しく自由見学時間がなくなるほど熱心に聞いているグループもあった。

3-2. 報告会（第11日）

プログラム第11日の10月22日、リーガロイヤルホテル2階「ペリドット」にて、報告会が行われた。式には、中国教職員134名の他、文部科学省国際課の丹生 久美子国際協力政策室長補佐（併）人物交流専門官、中華人民共和国駐大阪総領事館の袁自煌領事、張楓氏、ユネスコ・アジア文化センターの高坂節三理事が日本側来賓として出席した。

報告会では、各グループ代表より15分ずつプログラムの感想、成果等についての発表が行われた。各グループの報告は以下の通りである。

ーAグループー

はじめに、山口県美祢市を訪問したAグループの吉林省第二実験学校の楊桂華（YANG Guihua）主任が報告を行った。

まず、プログラム全体を通して日中交流の楽しさを感じ、このようなプログラムの必要性を感じたと述べた。

次に、日本の教育全般について3点をあげた。

- ・東京での文部科学省の講義で、日本の教育の理念、システムは中国のそれと似ていることが理解できた。
- ・それぞれの学校に特色があり、どの学校でも明確な教育目標、効果的な方法で教育を実行していた。
- ・日本の情熱的な向上心あふれる生徒を見ることができた。

引き続き、美祢市の訪問における感想を述べた。

- ・美祢市立厚保中学校では、道德の授業の進め方、教え方は中国とほぼ同じであり、学校側は効果的にカリキュラムを作成し、実行していた。
- ・美祢市立大嶺小学校では、生徒が給食のすべての仕事を分担している姿を見た。これは日本の教育の素晴らしい成果であり、中国は見習わなければいけない。
- ・美祢市立大嶺中学校の弓道部見学では、日本の伝統文化を上手く継承しているのは日本の素晴らしさであると感じた。
- ・博物館は日本が日本の資源、物産、歴史を様々な面から発展させてきたことを学ぶことができた。

その他、以下の4点を述べた。

- ・凸版印刷、宇部興産セメント工業という2つの企業を訪問し、日本の企業は利益の社会への還元および、地域との連携という素晴らしいことをしていると分かった。私たちも学びたい点である。
- ・どこにいても日本は清潔であり、日本人は生活環境を大切にする点を見習いたい。
- ・ホームビジットでは日本で新しい友人を作る事ができた。
- ・美祢市立嘉万小学校では、訪問終了後、子どもたちが走って見送ってくれ、教員全員感動した。

最後に、この経験を中国に持ち帰り、同僚、子どもたちに伝えたい、関係者の皆様に感謝申し上げる、と締めくくった。



報告会 A グループの様子

－B グループ－

熊本県荒尾市を訪問した B グループを代表し、江西省教育庁教学教材研究室の劉春林 (LIU Chunlin) 副主任が報告を行った。

本プログラムで B グループが感じたことのテーマは「体験・学習・感想」であると述べた。また、本プログラムでの最大の収穫は、初期の目標を大いに達成したこと、そして日本人の温かさに触れ、友情を深めることができたことである、と述べた。理由は以下の通りである。

- ・文部科学省による講義で、日本の初等中等教育への理解を得られた。
- ・日本人は温かく中国人を迎えてくれるという歓迎交流会での高坂理事のあいさつの言葉通りだった。博打をならして出迎えてくれたり、ニーハオとあいさつしてくれたり、教職員は並んで迎えてくれた。
- ・荒尾市立荒尾海陽中学校では、校長が何カ月もかけてこの日のために準備し中国語であいさつをしてくださり、身が締まる思いがした。
- ・歓迎交流会で炭鉦節を踊ったことは今でも忘れられない。
- ・ホームビジットでは、美味しいご馳走ばかりでなく、身内に接するような温かさで接していただいた。まるで孫文、宮崎兄弟との友情が今でも続いているような気持ちがあった。
- ・荒尾養護学校では生徒が普通学校と同じかそれ以上の教育および人格の平等を受けていた。

続いて、日本の印象について 6 点を挙げた。

- ・日本の初等中等教育は飛びぬけて発展しており、一貫して人間本位であり、核心を突いている。
- ・日本の初等中等教育は 2 つの連携によって発展している。
- ・国と教育委員会および学校の縦の連携。国が地域のニーズにもとづいて教育目標を立て、教育委員会・学校はそれをもとに規範化を行っている。
- ・社会全体で教育を向上するという横の連携。博物館、文化施設は教育に開かれてお

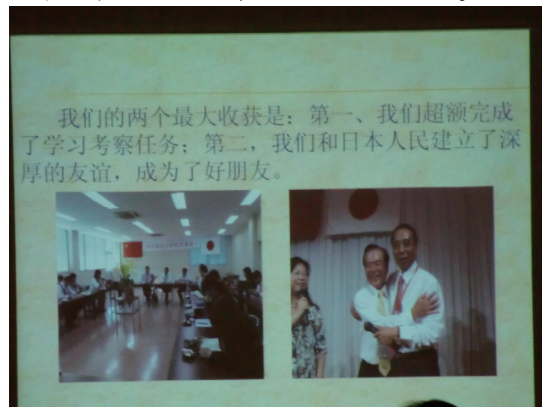
り、地域社会は自発的に利用している。それが教育の発展につながっている。

- ・義務教育は「知・徳・体の向上」という教育目標が確実に具現化している。
- ・学校経営理念は地域に則しており、児童一人一人にあった教育を受けられるようになっている。

そして、日本の学校について次のような印象を持ったと述べた。

- ・文化の蓄積を行っている。成長記録、生徒の作品が学校内に沢山あった。
- ・クラス担任は教務、生徒指導、保護者対応等すべてをこなすオールアラウンダーである。
- ・学校生活の充実を重視している。理科室、実験活動など、どれも特色がある。
- ・こうした教育が日本の発展や交通システム、日本人の規律的な行動を実現させた。

最後に、情報共有会では、プログラムの体験を、同僚、生徒と共有することを全員で確認した、中日両国の友情がずっと続くように祈っている、と締めくくった。



報告会 B グループ発表スライドの一枚

－C グループ－

続いて、C グループを代表し、南京市第十二中学・高校中学部の徐樹忠 (XU Shuzhong) 校長より報告があった。

本プログラムで学んだことは以下の通りである。

- ・新学習指導要領では道徳、体育の充実が充実し、新しい理念の教育が行われている。
- ・大震災により、日本政府は国際理解、国際

平和を愛する子どもたちの育成に力を注ぐことになった。

次に、日本の学校について以下のように述べた。

- ・学校組織がシンプルで効果が高い。
- ・学校評価は自己評価が主であり、その次に地域や保護者からの評価があり、政府からの干渉は少ない。教育委員会は積極的にESDに取り組んでいる。
- ・学校は素晴らしい文化を有している。生徒自身で掃除が行われる。
- ・総合学習では、剣道、空手などの民族色溢れるものから、職場体験や環境保護等もあり、探検型、探求型の授業である。
- ・学校には専門の栄養士がいて、給食をつくる。子供たちは「いただきます」と食べ物に感謝し、残さず食べ、片づけまで行う。子どもたちの健康を民族の健康と捉えていることの象徴である。

そして、日本の教育全般について以下のような印象を持った。

- ・ホームビジットで、家庭は子どもたちの道徳心を育てることを重視していると感じた。
- ・日本の教育は開放的である一方で、国や地域の文化の継承や博物館と教育との連携も重視している。
- ・教職員は忙しく、計画通り、時間通りに進める習慣がある。
- ・日本の教育は資格主義と開放制度が特徴的である。教員の資格は尊敬され、教員の採用には卒業大学なども重視される。教員になってからも教員研修や人事異動が行われる。
- ・地域に関わらず現代的、均一的な教育である。中国では民族格差、地域格差などの問題があり、均一的な教育はまだ難しい段階にある。
- ・日本の整理整頓された環境、礼儀ある態度を見て、資質の高さを感じた。大地震の際に国民が落ち着いて行動したことからも分かる。これは初等中等教育の成果である。
- ・中国政府において、現在カリキュラム改革の途中であり、その目的は生存能力、学習能力などを伸ばすことである。これらについては日本から学びたい。

・国立、私立は抜きん出た生徒の育成を行っている。文部科学省では科学立国のため26の高校をスーパー・サイエンス・スクールに認定している。多摩市の学校でもテレビを利用したノーベル賞受賞者との交流があると聞いた。

最後に、「上を見るものには夢がある」というヘーゲルの言葉を例に出し、日本の教育は上を見て向上しようとしている、と締めくくった。



報告会 C グループ発表

ーD グループー

続いて、D グループを代表し、南寧市第十四中学・高校の袁樹和（YUAN Shuhe）校長より報告があった。

はじめに、全体的な印象として以下の通りに述べた。

- ・日本は高度な発展国である。交通は便利、環境は清潔。国民は友好的であり、節約・規律・秩序を心がけている。聖徳学園では、大地震後、学校では自発的に必要のない照明をとりはずし、節電目標 20%を達成した。
- ・豊かだが無駄遣いがなく、効率的で混乱がないのが日本。これらすべてが日本の教育にしっかりとした基礎を打ち立てているのだと感じた。

次に教育に関する印象として次の4点を述べた。

- ・教育委員会の制度は合理的で科学的。複数政党の日本では、中立性と公正さが重要になる。教育委員会は首長が独立しているため、政府による干渉が少ない。教育委員は6名であり、教育長以外は兼任。各学校は

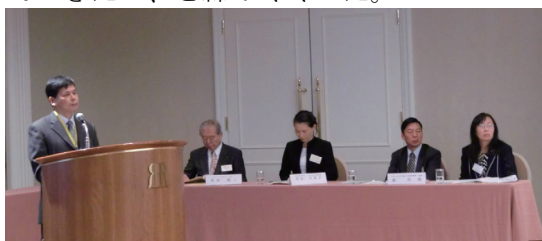
学校経営の自主性をもつ権利があるため、創造性に富んだ形で学校経営や教育目標を打ち立てることができる。理念は着実、教育目標は簡潔で明瞭なものである。

・社会全体が教育を重視している。国や各自治体は基礎教育を非常に重視している。予算も保証しており、総社市では教育予算が総社市総予算の 11.3 パーセントを占める。学校内の施設も整っている。運動場、体育館、図書館、音楽室、実験室など、非常に実用的な施設。全校生徒数 60 名でも、他の学校と同じように体育館、プールがある。

・障害をもつ生徒に行き届いた教育を提供している。すべての訪問した学校には特別支援学級が設置されており、専門の先生もいた。障害をもつ生徒の生きる権利、学ぶ権利を社会全体で責任を負う。施設は子どものニーズを考え、非常に細かいところまで考えられていた。すべての生命を尊重することは成熟した社会の象徴である。

・学校での活動が多彩。総社東中では、クラブ活動（卓球）に参加した。

最後に、両国は国の体制は異なるが、教育は人類共通の行為であり、教育の本質や規律は独立していると述べ、両国が今後もさらに広く、深く交流を深め、互いに吸収し合い、両国の教育、社会の発展に力を入れていきたい、と締めくくった。



報告会 D グループ発表を聞く来賓

－E グループ－

最後に、E グループを代表して、福建省アモイ第一中学・高校の欧陽玲（OUYANG Ling）副校長が報告を行った。

はじめに、17 の省・市から集まった E グループ 27 名は、行く先々で日本人の行きとどいた温かさ、民族文化に触れ、仕事熱心な態度を目にした、と述べた。

次にプログラムを通しての感想を述べた。
・政府、社会、家庭すべてが初等中等教育を重視している。それぞれの学校が特色ある

教育を行っていた。国立科学博物館では展示により、生徒の知識をさらに伸ばせるよう工夫されていた。防災センターでは地震体験を行い、地震発生時に日本人が落ち着いて行動したのは、このような施設と教育が一体となって日常的に訓練していたからだ実感した。開放的で自由な教育で、どうやって厳しい社会で生き抜く力を育てるのが疑問であったが、ホームビジットにおいて常識と秩序を重んじる教育が学校、家庭でなされている、ということ学んだ。学校だけでなく、家庭、地域が三位一体となって人を育てている。

・学校目標が先進的で民族的であり、効果的に結びついている。施設は実用性を重視し、先のことを踏まえて設置されている。筑波大学附属駒場中学校・高等学校や、徳島県立科学技術高等学校では、実験設備に多くの予算が設けられている。特色に応じた予算の導入、有効活用が素晴らしい教育に結びついている。

・学校理念は個人の命や重視し、実際に役立つ能力を伸ばすことを重視している。授業は、参加型、実践型の授業である。徳島県立科学技術高等学校では、生活の中で考え、その考えをもって生活する態度を育む教育を行っていた。

・学校づくりにおいて、生徒の積極性と自立能力を重視している。筑波大学附属駒場中学校・高等学校では、高校 3 年生、大学受験を目の前にした生徒が、学校行事に積極的に取り組んでいる姿を目にした。これは、生涯学習を重視していることの表れであり、中国も見習いたい点である。

最後に、両国の共通点はもちろん、相違点を理解するために、互いに交流していくことが重要であり、今後もさらに教育交流を深めていきたい、と述べた。



報告会 E グループ発表

3-3. 閉会式

報告会に続き同じ会場にて、閉会式が行われた。最初に、ACCUの高坂 節三理事よりあいさつがあり、中国の先生方と日本の先生方との対話も多く持たれ、次世代の人材育成を担う教員同士が、お互いに交流を深め、情報を交換し、啓発しあったことは、今後の両国の教育発展にとって極めて大きな意義があるものであると述べ、さらに報告会での各グループからの報告を受け、中国の先生方から日本の教育現場に対し、大変高い評価をいただいたが、現実には問題や課題も多く、地に足のついた教育が行われるよう、日本の教育もがんばらなくてはならない、と述べた。また、財団法人日本漢字能力検定協会理事の立場から、日中間では特に漢字を中心に交流し、互いに切磋琢磨することが重要であると述べられた。



閉会式 高坂節三理事あいさつ

続いて文部科学省国際課国際協力政策室丹生久美子 室長補佐（併）人物交流専門官より、今回の来日で皆様が感じたことについて、帰国後、教え子や同僚の教職員に伝えていただきたい、また今後も、今回知り合った教職員を始め、日本との交流を続けていただきたい、と述べられた。

次に、中華人民共和国駐大阪総領事館 袁自煌領事よりあいさつがあり領事館を代表して、訪問団が大きな成果をもってプログラムを終えたことを祝すとともに今回の訪問に際し日本各地の教育委員会より行き届いた手配をいただいたことに心から感謝すると述べた。また、今回の訪問を両国の相互理解の促進に貢献するようお願い、無事に帰国されることを記念すると締めくくった。



袁自煌領事

最後に訪問団を代表して郭樹良（GUO Shuliang）総団長があいさつし「日本を訪れた 12 日間は瞬く間に過ぎ去ろうとしている。この間、訪日団の一人ひとりが、各訪問先の学校やホームビジットの家庭で、至れり尽くせりのもてなしを受けた。日本の人々の温かい心、友情の気持ち、飾り気のない善良な人柄を感じた。この 12 日の視察で、山口県美祢市、熊本県荒尾市、東京都多摩市、徳島県の各地を訪れ、30 校近くの様々な学校を訪問し、歩いて、見て、考えて、日本のバランスの取れた教育現場を体験した。各レベルの自治体が、教育を非常に重視していること、国家の根幹と位置付けていることを感じた。我々には学ぶべきことがたくさんある。あつという間で短い期間であったが、団員一人ひとりに深い印象と美しい思い出が刻まれた」と述べ、閉会式最後のあいさつを締めくくった。



郭樹良総団長

閉会のあいさつの後、日本側からグループ団長 6 名に記念品の贈呈が行われ、また、ACCU からは『Animals in Asian Tradition -Intangible Cultural Heritage (ICH) around Us -』、財団法人日本漢字能力検定協会から図書カードが参加者全員に進呈され、閉会式は幕を閉じた。



5人のグループ長

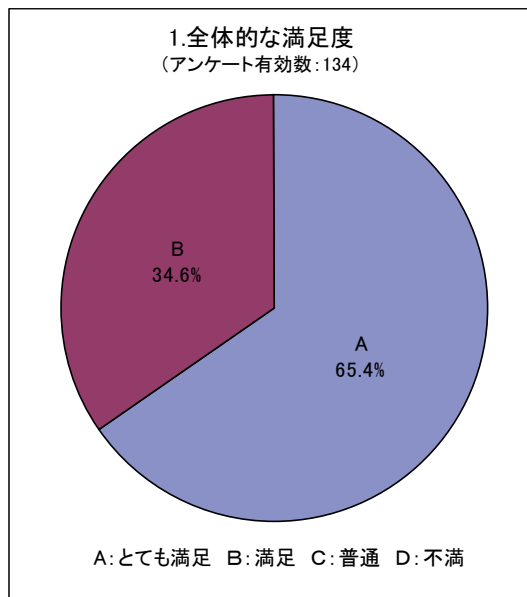
第Ⅱ章

コメントと提案

1. 中国教職員
2. 受入れ教育委員会
3. 主な受入れ学校および機関

◆1. 中国教職員

質問 1. 全体的な満足度



【主な意見】 *原文は中国語 (ACCU 仮訳)

A-13 李 群 (とても満足)

内容は豊富、多彩で、計画や運営も良く、各地の学校も温かいもてなしだった。

A-23 繆登梅 (満足)

スケジュールがよく活動は特色があり、様々な面から日本の教育を感じることができた。

A-21 劉慶勇 (とても満足)

全体的な構成がよい、収穫が大きい。

A-24 肖祥艷 (満足)

全体印象が良かった。活動内容が豊富で、時間管理も良かった。スタッフの温かさと思いやりも感じられた。

B-1 劉春林 (とても満足)

組織の手配、訪問地・学校の選択の全てから主催者の周到的な仕事ぶりが見られ、よりわかりやすく日本の基礎教育の現状を全体的に深く理解することができた。

B-7 姜寧波 (満足)

「とても満足」を選ばない唯一の理由はある学校で訪問時間が短すぎ、教員・児童生徒と深く触れ合うことができなかったから。他は満足。

B-8 吳志剛 (満足)

どこに行ってもあたたかなもてなしを受け、サービスが周到。少し残念なところは時間制限があるため、各学校の教員との間の交流の深みが足りなかった。

C-5 秦世広 (とても満足)

活動スケジュールは大変合理的で内容も充実。スタッフは真面目で責任感があった。

C-10 王淑榮 (とても満足)

学校施設、教員と生徒の素質が印象に残った。日本は潜在力がある国だと思う。

C-15 劉尚斌 (満足)

活動は充実し有意義だった。両国の教育者の交流が深まった。

D-18 楊銳新 (とても満足)

手配が綿密、日本人の素質が高い、学校は模範的で人間性もあり、温かなもてなしで繊細で友好的だった。

D-23 呂 杰 (満足)

都市と地方の両方の学校が見学できたのがとても良かった。生活環境の違いを知り日本の社会を知ることは必要。時間配分を調整した方が良い点あり (国立科学博物館が長い、第一次情報共有会は話す内容が余りなかった)

E-4 王惠玲 (とても満足)

内容は豊かで、接待もよく、スケジュールも良かった。

E-17 黄 寧 (とても満足)

訪問した学校はどれも特徴的で、ホームビジットを通じて日本の教育状況をよく理解することができた。

E-18 陳良根 (とても満足)

内容豊富、日本の教育を全般的、初歩的に理解できた。

E-21 楊艷妮 (とても満足)

日本の基礎教育の現状について理解することができた。

質問2.参加目的は何か

【主な意見】*原文は中国語（ACCU 仮訳）

A-6 師曉星

日本の教育制度、特に教育目標の中国との相違点と類似点、特に生徒が全方向的に健やかに育つよう民族の素養をどうやってあげるのが理解したくて参加した。

A-21 劉慶勇

日本の教育概況、日本の教員、生徒の優れた点を学び自身の教育業務に役立てる。日本の学校と友好関係を結びたい。

A-24 肖祥艷

両国の基礎教育の交流を促進するために参加した。お互いの教育理念を理解しあうため。

B-6 肖建竜

一つは、訪問を通じて友好を深める。もう一つは、日本の先進的な教育システムと管理体制を学ぶこと。

B-7 姜寧波

日本の教育と文化を理解する。特に文化伝承方面での努力。書道教育は私の重点項目。書道の授業（慶應義塾）と各学校の生徒の書道作品をみて、目的を達した。

B-15 李 琳

日本の教育の先進的な経験を学ぶ、日本文化を経験する、両国人民の相互理解を促進する。

C-5 秦世広

訪問を通じて日本の基礎教育の現状を理解すること。交流を通じて日中それぞれの基礎教育を促進し、発展させること。

C-13 李国平

日本の基礎教育の理念と具現方法を学び、実務の参考にすること。

C-30 趙景蓮

小学校での思考や道德教育、及び学校・教員・生徒の管理や文化等を考察するため。

D-18 楊鋭新

日本の基礎教育を理解し、学校経営理念を勉強し、また個人の素質を高め、教育管理の方法を改善する。

D-23 呂 杰

日本の基礎教育の良いところを中国へ持って帰りたいと思う。同時に、中国の教育状況も伝えたい。

D-26 何国民

日本の小中学校を考察し、日本と中国の教育の相違点を比較し、日本の教育から良いところを取り込み、帰国後は学校で実践する。

E-10 祁耀華

両国は一衣帯水の隣国であり、交流の歴史も長い。これから両国の友好関係を強化し、交流を深めたい。また、日本の教育の優れた点を自身の教育業務に役立てる。

E-12 王 薇

日本独特の教育理念を参考にする。

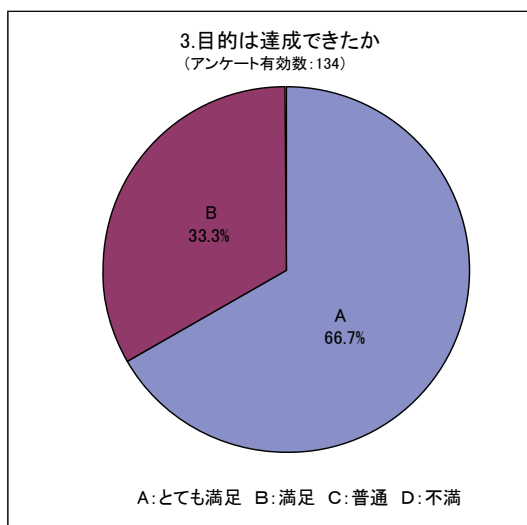
E-18 陳良根

日本の基礎教育の現状を理解し、日本の先進的な教育管理体制を学び自ら貢献できるよう両国の文化交流を促進。

E-29 王禹耕

教育部と ACCU との友好な関係を保つ。中国教師が日本の基礎教育との交流を通して、中日両国の相互理解を深める。

質問3. 目的は達成できたか



【主な意見】*原文は中国語（ACCU 仮訳）

A-19 陳純紅（満足）

ホームビジットを通じて日本の文化について理解し、名跡を訪れ、日本の歴史を理解し、また学校訪問を通じて日本の教育の方法や現状を一層理解することができた。

A-20 藍瑩瑩（とても満足）

日本の国立、公立、私立の小中高校訪問を通じて、日本の教育の現状や教育理念について勉強することができた。

B-1 劉春林（とても満足）

訪問活動の内容から方法、交流から実践まで全てが良い。仕事が丁寧で、サービスが周到。内容豊富、収穫が多い。

B-2 楊 杰（とても満足）

活動計画が大変よく多種多様なレベルの基礎教育に接し、全体像を理解する機会となった。

B-4 劉 斌（とても満足）

内容が豊富。講義もあり、訪問もあり、参加もできホームビジットもあった。

B-21 王利生（とても満足）

運営は大変よく、内容面でも地域間・学校においても、もてなし、準備は特に優れている。

C-5 秦世広（とても満足）

両国の基礎教育の実情がわかる訪問内容、つまり小・中・高、また都市と郊外、さらに特別支援学校を訪問できた。

C-13 李国平（満足）

プログラム期間中その都度こちらの要望を聞いて欲しかった、例えば昼に休憩がないとかなり疲れる。

C-18 徐樹忠（とても満足）

計画通り時間に厳格に実施された。学び、大きな収穫を得た。

C-30 趙景蓮（満足）

今回の活動で日本の教育に対する幾つかの良い管理方法を学んだ。運営側は真面目で、行き届き、親切だった。

D-19 趙 軍（とても満足）

内容は豊富、手配もよい、対象地域は広く大きな範囲から全面的に日本の教育の現状を知ることができた。

E-4 王惠玲（とても満足）

忘れられない日本の生活を過ごせた。教育に対する本質的な思考も得られ、自分自身の責任の重要性も感じた。

E-10 祁耀華（とても満足）

スケジュールがよく、内容が豊富。文化活動の参観や学校との交流は印象深い。

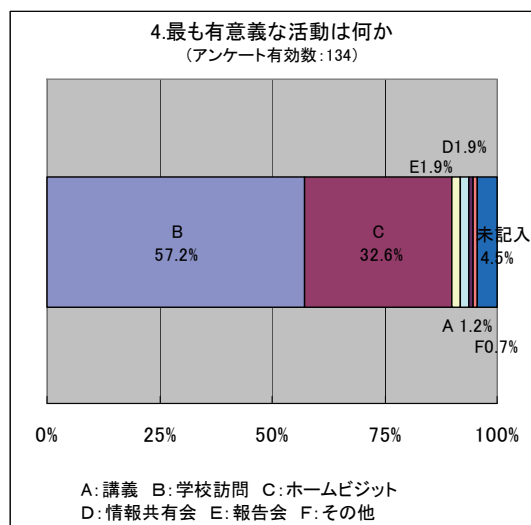
E-12 王 薇（とても満足）

講義、文化活動参観や学校交流があったので、内容は豊富だった。

E-20 区偉軍（とても満足）

日本側の親切さを感じられ、日本の基礎教育の状況をより深く理解できた

質問4. 最も有意義な活動は何か



【主な意見】*原文は中国語 (ACCU 仮訳)

A-5 於 玲 (学校訪問)

百聞は一見に如かず。実際に学校訪問することによってはじめて深く日本の基礎教育を理解できる。

A-9 楊桂華 (学校訪問、ホームビジット)

体験を伴うものは内容も本質的なものだった。一方、講義や情報共有会も欠かせない。

A-19 陳純紅 (ホームビジット)

日本の居住環境、食文化を理解し、山口大学講師である田中先生ご夫婦の温かさと友情を感じた。両国の文化を理解しあういい機会だったと思う。

B-2 楊 杰 (学校訪問)

両国教員が直接に出会って話せる機会となり、相互理解を促進し友好を深めた。

B-7 姜寧波 (学校訪問)

学校訪問は感性で理解する基本であり最も直接的に日本の現代教育を理解する手段。

B-21 王利生 (学校訪問)

百聞は一見に如かず。日本の教育体制・体系・制度を実施する過程を見ることができた。家庭教育と学校教育の相互作用を実現していた。学校訪問は私達にとって素晴らしい「教科書」となった。

C-10 王淑榮 (ホームビジット)

生徒が家庭でどのように過ごしているか状況を理解することができた。日本の親が教育を重視している点が印象深かった。

C-13 李国平 (学校訪問)

基礎教育の理念をどうやって現場で実行しているのかを理解した。生徒と保護者に基礎教育の考え方が確実に伝わっている。

C-30 趙景蓮 (学校訪問)

生徒の自主性、行動力を育てるための学校側の努力を実感した。また、教員の仕事に対する真面目な態度も感じられ、特に特別支援学校での先生方の熱心さには敬服した。

D-18 楊銳新 (学校訪問)

両国の学校を比べお互い学び、日本の学校は合理的で人間性もあり、斬新な考えで生徒は自信をもってポジティブで健康的、幸せで個性的。教員は自分の仕事にまじめに取り組む良い模範となった。

D-19 趙 軍 (ホームビジット)

ホームビジットを通じて家庭から教育の現状を深く理解することができ、また両国の教育者の理解も深まった。

E-17 黄 寧 (ホームビジット)

ホームビジットを通じて、日本人の情熱と友情を感じ、日常文化を理解することができた。

E-20 区偉軍 (学校訪問)

ありのままを多角的に小中高、特別支援学校など訪問でき、日本の教育制度や理念を体験し、良い成果が得られた

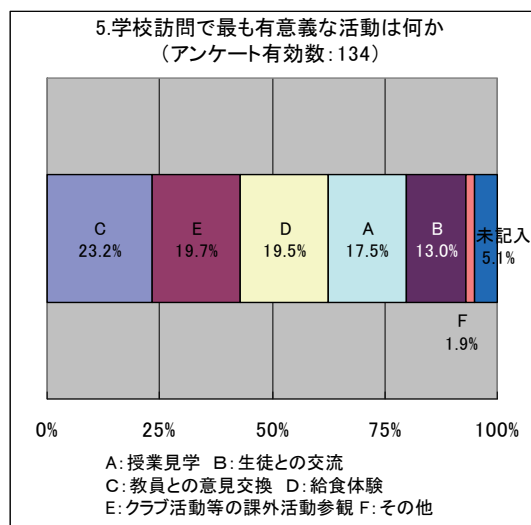
E-23 郭樹良 (学校訪問)

小学校グループ活動の水準はとても高い。歓迎会も特色がありもてなしの心があり、中日両国民の友情が表れていた。これは両国の基礎教育を促進するために非常に大切なことである。

E-24 王 昕 (学校訪問)

日本の教育の実情が観察できたので、中国の学校と比較しやすくなる。

質問5. 学校訪問で最も有意義な活動は何か



【主な意見】*原文は中国語 (ACCU 仮訳)

A-6 師曉星 (給食体験)

自立、平等、エチケット、実践が反映されていた。身を以て覚える大切さがわかった。

A-15 薛為群(クラブ活動等の課外活動参観)
日本の教育は生徒の総合能力の養成を重要視し、生徒自身の状況に合わせる教育の方法はともいえると思う。

B-1 劉春林(クラブ活動等の課外活動参観)
学校の状況を理解するには生徒の学習や課外活動を見ること。生徒の行動欲求や能力は全て趣味からくるものゆえ課外活動は生徒からの重要な要求と受け止める。

B-3 王玉燕 (給食体験)

学校での食事は科学的で栄養も良い。特に食事をしているときに生徒たちの行儀が良いこと、配膳も自分たちで協力し合うことはとてもよい教育である。

B-7 姜寧波 (授業見学)

授業は教員の教育理念を体現し生徒とコミュニケーションを多くとる場所。今回は流動的に各クラスを移動して見学したが、もしひとつの授業を最初から最後まで見学できれば理想的。

B-21 王利生(クラブ活動等の課外活動参観)
クラブ活動は自由参加のようで、生徒の健やかな体と能力を開花させる真実性がある。生徒の自主性・自律性を養う学習過程を体験した。

C-5 秦世広 (教員との意見交換)

教員同士やはり直接コミュニケーションを取り、根本的な問題点や実況を知るのには非常に有意義で価値がある。

C-13 李国平(クラブ活動等の課外活動参観)
学校は全て生徒のためだと体現している。学校教育は生徒の才能と創造力を生かす場所を提供し、体作りも忘れてはいない。

C-30 趙景蓮 (給食体験)

生徒たちは給食で合理的な栄養バランス、偏食しないという良い習慣を身に付けていることを理解した。彼らは生きていく上で大切なセルフケア能力を持っている。

D-23 呂 杰 (教員との意見交換)

教員は、上司の指示を生徒へ反映する教育活動の中核、つまり、教育成果を理解し最も発言権がある人。ゆえに教員同士で意見交換できるのは最高に効果的。

E-10 祁耀華 (生徒との交流)

各生徒の能力や興味に合わせる教育活動で成果を挙げられることを理解できた。

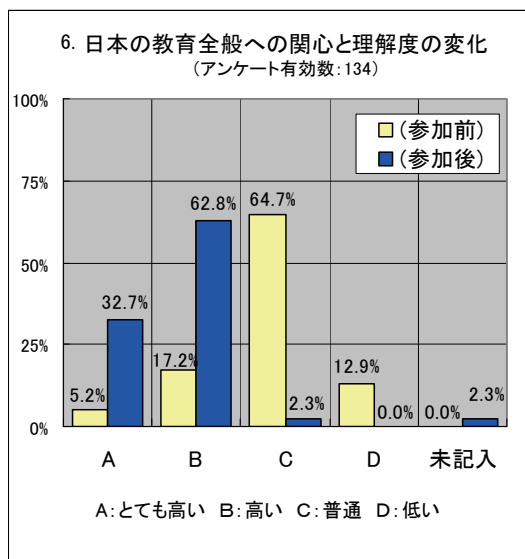
E-18 陳良根(クラブ活動等の課外活動参観)
訪問した学校はクラブ活動で成功した経験がある。中国が学ぶべきところがある。

E-20 区偉軍(クラブ活動等の課外活動参観)
生徒達が休みの時間をどうやって過ごすのか間近で見られ、健康的な心、高い情操、生徒同士の友好など育むことになり社会に出る良い基礎作りとなる。

E-23 郭樹良 (給食体験)

小学校の給食体験では、小学生の給食の栄養バランスとレベルを体験しただけでなく、生徒たちの独立性も観察できた。

質問 6. 日本の教育全般への関心と理解度の変化



【主な意見】*原文は中国語 (ACCU 仮訳)

A-5 於 玲 (低い→高い)

訪問を通して理解が深まり、更に情報を得て日本の教育を知りたいと思うようになった。

A-9 楊桂華 (普通→高い)

参加前は特に友情を感じなかったが、交流を始め日本人に接し、心が動き、だからこそ日本の教育その他に関心を持ち始めることが出来た。

A-20 藍瑩瑩 (普通→とても高い)

日本の基礎教育には優れた点が多い。訪問を通じて、前に書籍から理解したものを実際に確かめることができた。

B-4 劉 斌 (普通→高い)

今回のプログラムに参加するため少し準備はしていたが、訪問後、認識がかなり変わった。今後も日本の教育に注目したい。

B-8 吳志剛 (普通→高い)

以前は限りある資料から大まかな内容しか知らず、実際関心度も低かった。今回の訪問は良い機会を与えてもらい至近距離、全方向から日本の教育を感じとれ、体験し見習うべきものを数多く習得した。また機会があったら日本の教育者ともっと交流を深め討論し合い教育の促進に尽力したい。

C-5 秦世広 (普通→高い)

訪問後、日本の基礎教育への関心が高まり理解が深まった。学ぶ価値があるところが多く、それを参考し、中国の基礎教育を促進する。

C-15 劉尚斌 (普通→高い)

以前はメディア上での情報だけで深い理解ではなかったが、今回実際に日本の学校の教育活動に触れ、日本の義務制教育の現状を少なからず理解しその方向性や長所を知った。

C-30 趙景蓮 (低い→高い)

参加前は学校や生徒のことを分からなかったが参加後、日本政府が教育を重視し日本の教育は持続発展を目指していることが深く感じた。

D-19 趙 軍 (高い→とても高い)

訪問前は日本の教育に対して理解も少なく関心もあまりなかったが、今回の訪問を通じて日本の教育に対して新たに理解し数多くを学んだ。今後日本の教育にもっと関心を持つようにする。

E-4 王惠玲 (高い→とても高い)

以前から本校に日本からの生徒がいるので、日本の教育への関心は元々高かった。今回実際に来日してみても、理解はさらに進んだ。

E-10 郝耀華 (普通→とても高い)

参加前はメディア上での情報であったが、今回の訪問を通じて、日本の教育制度、また日本の教育面での成果などについて理解することができた。

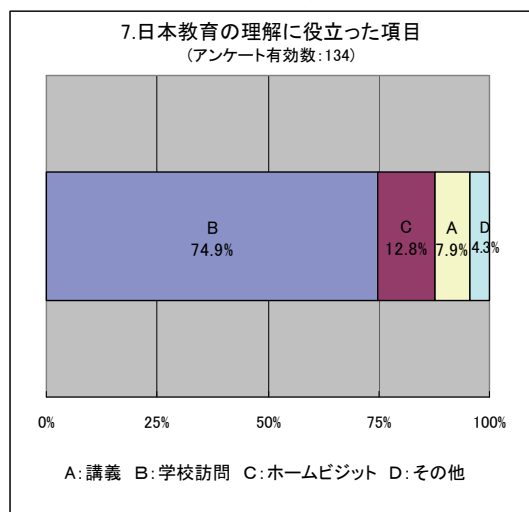
E-18 陳良根 (普通→高い)

両国の教育には共通点や相違点がある。日本の教育の面で挙げた成果は中国が学ぶべきところが多い。日本の成功の経験を学び、自身の教育業務に役立てる。

E-21 楊艶妮 (普通→高い)

両国の教育には相違点がある。お互いに勉強し合い、共に発展していきたい。

質問7. 日本の教育の理解に役立った項目



【主な意見】*原文は中国語（ACCU 仮訳）

A-6 師曉星

（その他－社会から学校への奉仕、連携）
家庭・社会・企業・文化施設どれも主体的に学校と連携している。それらは生徒が社会に出て恩返しする「機会」という立場でもあると同時に、共に社会責任を担う存在である。

A-15 薛為群（学校訪問）

日本の「教育資源の社会化」ということを分かった。日本の教育は学校・家庭・社会が繋がるよう教育と社会の融合を求めていると思う。

A-19 陳純紅（講義）

文部科学省の講義では日本の教育制度、法律規範、政策、教員の教育を学んだ。また、その後の訪問のスケジュールの説明もあって、いいと思った。

B-6 肖建竜（学校訪問）

学校紹介は理解の助けになった。共同で行なう項目は全面的な理解につながった。

B-19 於宏麗（ホームビジット）

いろんな年齢の方がいる家庭を訪問し、話し、観察し、実践体験することは日本の教育を理解することに役立つ。

C-5 秦世広（学校訪問）

学校訪問で両国の教育者の交流で教育の現状や良い点・欠点を討論した。それをきっかけに各自の教育改革、革新を促進できる。

C-6 曹淑君（ホームビジット）

日本の家庭教育、風土、人情を理解できた。両親共に教員で二人の娘の成長に重きをおいていた。子供達は大変礼儀正しく家は清潔で整理整頓されていた。

C-10 王淑榮（講義）

講義を通じて、日本の義務教育の体制、教員育成、教育目標の確立、教育理念の形成、教育成果などを理解した。両国の教育の共通点と相違点も理解し、日本から学ぶべきところがあると思う。

D-1 黄炬輝（学校訪問）

特別支援学校、特別支援クラスへの訪問が印象深い。特別支援学校の「すべては生徒のために」という生徒への愛情に感動した。これは中国が勉強すべき点だと思う。

D-18 楊銳新（その他/国際教育交流を強化）

グローバルな視点を持つ生徒を育成する。

E-12 王 薇（学校訪問）

中学高校の基礎教育、専門学校や特別支援学校を訪問したので、日本教育をより深く理解できた。

E-20 区偉軍（学校訪問）

膝を突き合わせての交流、生徒や教員の中に混じる交流の方が、全面的に実情が理解できる。そういう活動をもっと計画してほしい。

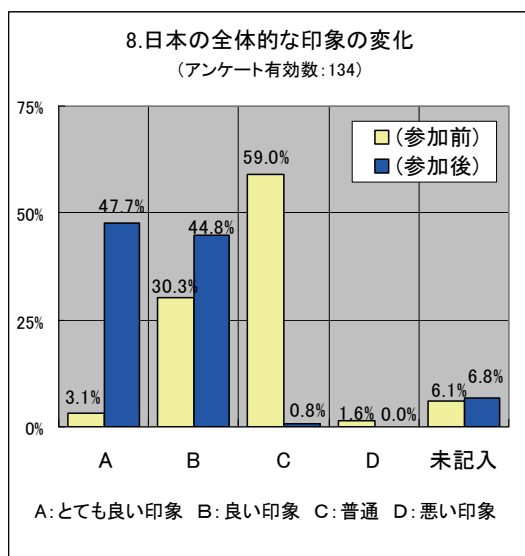
E-21 楊艶妮（学校訪問、ホームビジット）

まず学校を訪問して、またホームビジットをするのは日本の教育の現状についてより詳しく理解することができる。

E-29 王禹耕（講義、学校訪問）

もっと成果を得られるように、講義からの理論指導と学校訪問からの実践的な活動を結びつけるべきである。

質問 8. 日本の全体的な印象の変化



【主な意見】 *原文は中国語 (ACCU 仮訳)

A-5 於 玲 (悪い印象→良い印象)

日本が中国侵略していたせいで悪い印象があったが、今回の活動に参加し、日本人の友好を感じ印象がよくなった。

A-9 楊桂華 (普通→良い印象)

過去の戦争が原因で日本に関心はあまりなかったが今回訪問に参加後、自分の感情が変化した感覚。日本人は友好的で学ぶべきである。

A-19 陳純紅 (普通→とても良い印象)

日本人のもてなし、礼儀正しさ、町の清潔な点が深く印象に残っている。また、日本の食文化、伝統的な祝日文化、家庭文化についても理解した。

B-1 劉春林 (良い印象→とても良い印象)

メディア、映画、出版物や知人の話し等からしか日本の人文や地理を知らなかったが、今回自分が日本の生活を体験して日本人と交流してみたところ大変良い印象だった。

B-2 楊 杰 (普通→良い印象)

日本人の友情、丁寧さ、組織の規律性が特に印象が残った。

B-7 姜寧波 (普通→とても良い印象)

仕事が繊細で真剣。人と接する際あたたかなもてなしの心があり友好的。文化伝承を重視していて民族文化の保持に力を尽くしている。

B-21 王利生 (良い印象→とても良い印象)

礼儀正しい、ルールを守る、標準的。日本人の温かさと誠意を感じた。

C-5 秦世広 (普通→良い印象)

以前は日本の文化にあまり詳しくなかったが訪問後、文化風俗に接し、日本人は謙虚で文化的で社会に対する責任感があると思った。

C-15 劉尚斌 (普通→良い印象)

今回の活動で日本人の温かなもてなし、自尊心が高いこと、真面目に学ぶこと、勤勉さなどを深く感じた。

C-30 趙景蓮 (普通→良い印象)

以前は日本の状況にあまり詳しくなかったが参加後、日本人の真面目な仕事態度や丁寧な行き届いた対応は尊敬すべきだと思った。

D-1 黃炬輝 (普通→良い印象)

以前、日本人は礼儀正しいという一般的な理解だったが、訪問を通じて、日本の文化、都市から農村、政府から個人まで、国と国民全体の秩序を守る認識と丁寧さが印象深い。

D-23 呂 杰 (普通→良い印象)

日本人の文明レベルが高く、博物館の種類も多く、交通や東京で見聞きしたこと全てよい印象が残った。

D-26 何国民 (普通→良い印象)

日本人は仕事に対して真面目。全体的な素養が高い。

E-4 王惠玲 (良い印象→とても良い印象)

文明的、情熱的、先進的、友好的。

E-10 祁耀華 (普通→良い印象)

日本人の勤勉さ、まじめさ、創造力について理解。今後お互いに交流を深めていきたい。

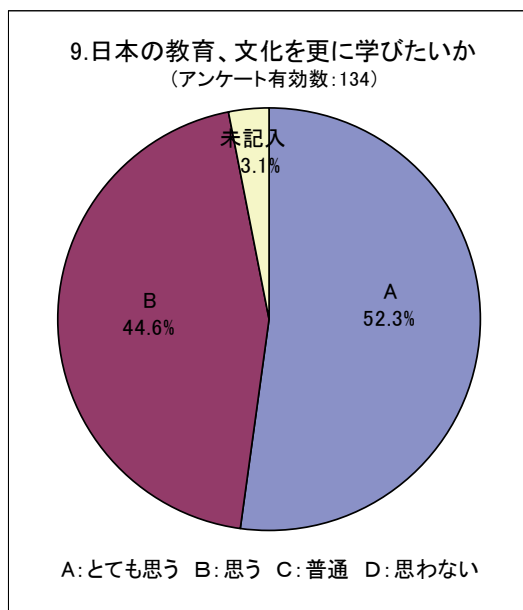
E-17 黃 寧 (普通→良い印象)

日本は秩序だった国で日本人の礼儀正しさ、情熱は印象深い。日本文化の根幹は各家庭にあると感じた。

E-21 楊艷妮 (良い印象→とても良い印象)

兄が日本で留学したことがあって、日本の文化について少し理解していたが、今回の訪問を通じて、日本の文化、日本人の礼儀正しさ、情熱について理解することができた。

質問 9. 日本の教育、文化を更に学びたいか



【主な意見】*原文は中国語 (ACCU 仮訳)

A-15 薛為群 (とても思う)

機会があったら、日本の教育及び文化について一層深く理解したい。また、両国の交流を通じて両国の教育に役立てたい。

A-19 陳純紅 (思う)

相互交流を通じてお互いの優れたところを学びたい。

B-6 肖建竜 (とても思う)

日本の先進技術と一流の基礎教育は切り離せないもの。日本と中国は昔から文化的なルーツや友情を持っているので、日本の教育を通じて我々の教育も発展できると思う。

B-21 王利生 (とても思う)

もっと多くの学校を見学したい。日本の教育について知り得たことを同僚と分かち合いたい。

C-5 秦世広 (思う)

両国とも基礎教育の発展を積極的に探求する必要があるし、私も更に学び続けたいと思う。

C-10 王淑榮 (とても思う)

訪問を通じて、日本の教員の生徒への愛情、責任感、仕事への情熱、使命感が印象に残っている。

C-27 孫静玲 (思う)

教育理念と実践は見習うべきだと思う。

D-1 黄炬輝 (思う)

日本の教育と文化全てを理解するのに 10 日間は短い。今後も様々な道筋から日本の教育に対する理解を深めていきたい。

D-23 呂 杰 (思う)

学びは必要である。そうしないと進歩はない。日本には我々が見習うべきところが本当にたくさんある。

E-10 祁耀華 (思う)

参加前は日本の教育について文献情報からの理解だけ。これから両国の文化交流を深め、お互いに勉強したいと思う。

E-20 区偉軍 (思う)

各民族は独自の特徴があり、お互いに交流・信頼するだけで、人間の未来を共同に創造できる。

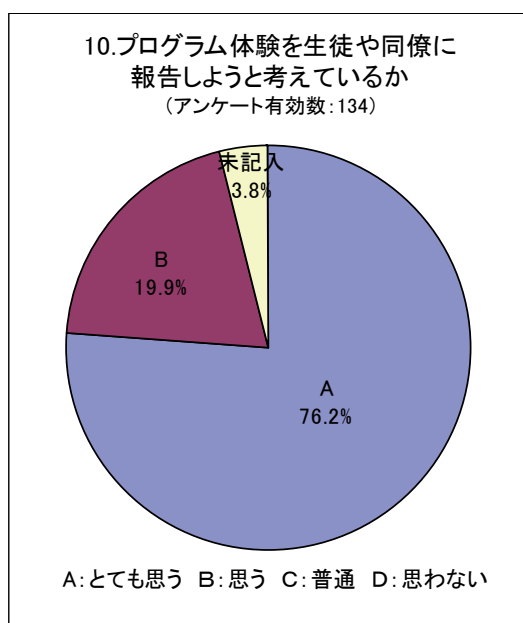
E-21 楊艶妮 (とても思う)

日本の教育の文化、方法などについてより詳しく理解していきたい。

E-23 郭樹良 (とても思う)

長期の交流や会話を続けることは、双方の発展に有利である。

質問 10. プログラム体験を生徒や同僚に報告しようと考えているか



【主な意見】*原文は中国語（ACCU 仮訳）

A-5 於 玲（思う）

交流の使者として今回思ったことを他の人にも伝え日本への理解を助ける。

A-21 劉慶勇（とても思う）

帰国後、生徒や同僚に体験を報告する。日本の教育の良い点を参考にしたい。

B-7 姜寧波（とても思う）

これは違う国であり、参考するべきものが数多くあり、共有する価値がある！

B-19 於宏麗（とても思う）

日本の良い点、見習う点を伝え、謙虚な民族は必ず進歩すること、謙虚な人は進歩が早いことを伝えたい。

C-5 秦世広（思う）

教育に国境はない。教育は人材を育成し、人の資質を向上し、人類と社会の進歩を高める。今回の経験を同僚に伝えたい。教育面の大きな効果の一つになると思う。

C-6 曹淑君（思う）

帰国後、生徒や同僚に体験を報告し良い点を参考にしたい。日本の教育は勤勉さ、高度な文化、礼儀正しさを生徒に養わせることに非

常に重きを置いている。

D-1 黄炬輝（思う）

帰国後、生徒や同僚に体験を報告する。日本の教育の現状を理解させ、良い点を学びたい。

D-18 楊銳新（とても思う）

子供は健康で楽観的に、教員は責任をもって自分の仕事に取り組まなければならない。

D-19 趙 軍（とても思う）

帰国後日本で得た良い経験や良いマナーを生徒と同僚に教え、見習うようにしたい。

E-10 祁耀華（とても思う）

帰国後、同僚に今回の訪問の感想や経験を報告し、より多くの人に日本の教育について理解してもらいたい。

E-18 陳良根（とても思う）

帰国後、生徒や同僚に体験を報告する。日本の教育の優れた点を参考にしたい。

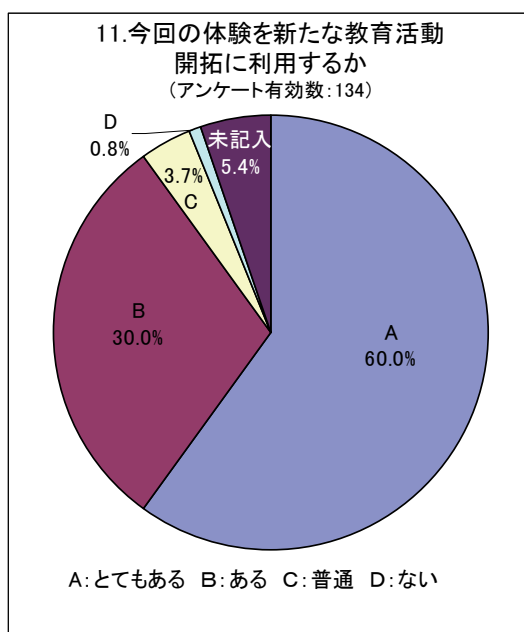
E-20 区偉軍（とても思う）

今回訪問の見聞を友達や生徒に分かち合い両国間の相互理解に役立てたいと思う。

E-23 郭樹良（とても思う）

自身の経験を元に中日基礎教育の発展と進歩を促進する。

質問 11. 今回の体験を新たな教育活動開拓に利用するか



【主な意見】*原文は中国語（ACCU 仮訳）

A-9 楊桂華（とてもある）

私の学校でも新入生歓迎会や卒業生お別れ会、低学年と高学年の共同授業を行なってみたい。また生徒に昼食の運営も任せてみたい。

A-15 薛為群（とてもある）

日本の教育理念は「人を大事にする」で、生徒の興味、心身の健康を重視するのは学ぶべきだと思う。今後の教育では生徒の心身共の健康を重んじていきたい。

A-19 陳純紅（とてもある）

帰国後、生徒と同僚に日本の教育の文化、歴史、社会などを紹介する。我が校の芸術の特色を生かし、クラブ活動など、個性を重視する教育の方法を行ないたい。

A-21 劉慶勇（ある）

生徒の体質を強める活動を行なう。生徒の自主性、社会に接する機会を増やしたい。（例えば、博物館、文化施設の参観など）

B-2 楊 杰（ある）

体育の授業で生徒が全員参加で行なうことをしたい。運動会でも集団で行なう活動を増やしたい。

B-6 肖建竜（とてもある）

生徒に生きる力を養わせ、青少年の独立意識を高める。教育改革：生徒の全面的な素養、特に自ら動く力を育てる。生徒達が教育方式を悟れるように多くの活動を行なう。

B-7 姜寧波（ある）

「自分のことは自分でやる。」これは訪問期間中に日本の生徒が体現してくれた高い「素質」である。我々は生徒の生活から学習まで手を貸しすぎたのではないかと反省している。

B-15 李 琳（とてもある）

初期計画として、日常生活に環境保護に対する意識を高める。身体を鍛え、体質を強める。

C-5 秦世広（ある）

帰国後教員を集めてミーティングを行い、今回の訪問体験について報告する。

C-10 王淑榮（とてもある）

日本の生徒の自主能力、秩序を守る意識の強さが印象深かった。例：食事後の片付け、教室の掃除、残さず食べる習慣などは中国の生徒が勉強すべきところだと思う。

C-15 劉尚斌（とてもある）

今後の授業で、生徒の自主性、社会実践力、イノベーションを高める学習を適用する。教員の日本訪問を計画する。

C-27 孫静玲（とてもある）

日本の教育の重点は生徒の自立、独立、革新、健康管理などだと啓発された。

D-18 楊銳新（とてもある）

見たものと体験したことを資料にまとめ、考えを詳しい計画に落とし込み、同僚と討論する。その後三回発表会を行い（父母会、教員会、生徒集会）また教育者同士情報交換し、良いものはすぐプリントして生徒の保護者と教員に配る。

D-19 趙 軍（とてもある）

今回の経験を生徒と同僚に伝えていくだけではなく、日本の教育現場で体験した優れた点を新たに教育に取り入れたい。具体的には日本人のもてなし、衛生観念、マナー。

E-4 王惠玲（とてもある）

帰国後、詳細に計画してから、実行する。

E-17 黄 寧（ある）

両国の体制により教育制度も異なる。日本の先進的な理念を中国に伝え、学びたい。

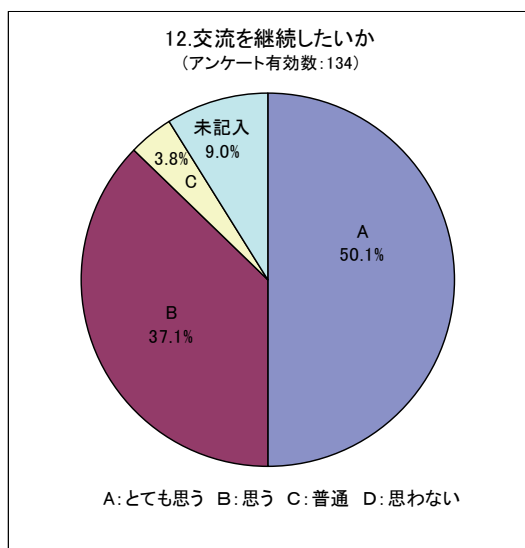
E-18 陳良根（とてもある）

日本の生徒達の実践能力は高い、また生徒のクラブ活動の参加なども中国が学ぶべき点だと思う。

E-20 区偉軍（ある）

特に課外活動のことを帰国後生徒に全面的に展開できるように、もっと工夫したい。

質問 12. 交流を継続したいか



【主な意見】*原文は中国語 (ACCU 仮訳)

A-9 楊桂華 (とても思う)

生徒に日本を紹介し、毎年日本への研修旅行を計画してみたい。

A-20 藍瑩瑩 (思う)

訪問した青山学院初等部は私立学校で、教育の理念は中国の我が校と似ている。今後、青山学院の教員との交流を深めたい。また、青山学院と姉妹校として友好関係を深め、交流を続けていきたい。

B-6 肖建竜 (とても思う)

厚い友情をうちたてた。日本の教育を学ぶ価値がある。今後は E メールや電話などの形式で交流し、お互いに良い経験を紹介しあい共に学ぶ。

B-8 吳志剛 (とても思う)

国家教育部門の組織で、双方意向がある学校は姉妹校提携を結ぶなど、定期的にお互い訪問交流をする。学校間ではインターネットを利用し、もっと検討交流活動をしていきたい。

B-19 於宏麗 (とても思う)

相互訪問校を設け、教員を一学期 (約四ヶ月) 間、派遣し合うこと。理解がもっと深まるのではないだろうか。

B-21 王利生 (とても思う)

内蒙古の教育行政管理官に日本に来て学習してほしい。お互いの教育理解を促進する。

C-5 秦世広 (思う)

インターネットを使って交流を続け、交流プラットフォームを作り情報共有したい。

C-13 李国平 (思う)

日本の学校と姉妹校提携を結び、長期交流・訪問を展開したい。

C-15 劉尚斌 (思う)

友好学校 (提携校) をつくり、相互訪問を行いたい。

C-30 趙景蓮 (思う)

お互いに交流・学習し、共同发展を促進する。日本の教員は中国の教育事情にあまり詳しくない気がする。

D-23 呂 杰 (思う)

できれば、もっと交流したい。両国の教員を交流することが必要であるが、生徒間の交流はもっと重要で、影響力や効果も高くなるともう。交流期間は短か過ぎる、1～2年間にしたほうが相応しい。

E-4 王惠玲 (とても思う)

できれば、友好学校 (姉妹学校) 契約を交わし、定期的に教師と生徒の相互訪問を行う。

E-17 黄 寧 (思う)

姉妹校を作り、相互交流を深めたい。

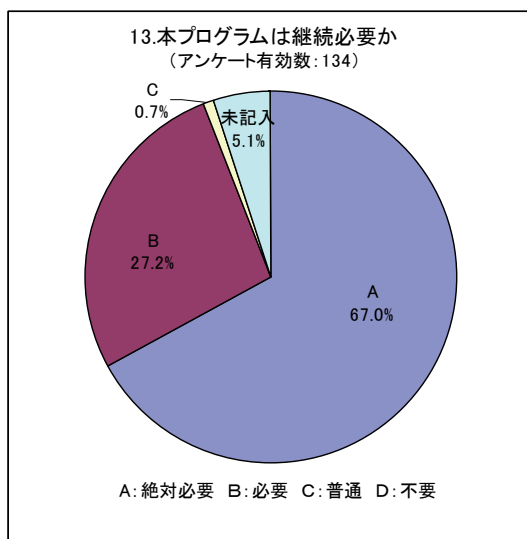
E-18 陳良根 (とても思う)

日本の教員が中国を訪問するのを歓迎する。その時、中国の教育の成果、現状について詳しく説明したい。また、両国の友情、文化交流を深めていきたい。

E-29 王禹耕 (とても思う)

また皆に会いたい。

質問 13. 本プログラムは継続必要か



【主な意見】*原文は中国語（ACCU 仮訳）

A-6 師曉星（絶対必要）

広い視野を持ちいろいろな角度から見て作業することで将来が決まる。ローカルでの活動およびグローバルな視野の両方が必要。

A-19 陳純紅（絶対必要）

日本の教育について直接接することができるのが意義深い。両国の友好関係を続けたい。

B-6 肖建竜（絶対必要）

やはり聞くのと自分で経験するのは全く違う。今までいろんな人に話は聞いていたがちゃんと理解できていなかった。今回の訪問で実感できたのは近距離での触れ合いが最も効果的な交流ということ。

C-5 秦世広（必要）

継続の必要がある。両国の教育者と生徒の人数が多かったので直接交流、触れ合う機会が少なかった。両国の基礎教育発展を推進するために、そういった交流機会を増やす必要がある。

C-13 李国平（絶対必要）

基礎教育の実態を知り、両国がどのように展開できるか、良い点、方法を学び、生徒に還元できるように。

C-27 孫静玲（必要）

もっと多くの人に日本を理解し、教育、文化、民俗も知らせたい。

C-30 趙景蓮（絶対必要）

相手国の教育事情に対する理解が両国教員ともまだ足りないと思う。特に日本側は中国の教育事情をよく理解してないことが今回の訪問で明らかに感じた。

D-13 袁樹和（絶対必要）

両国の友情を促進するために継続する必要がある。中国へも日本教職員を招くプログラムを増やしてはどうか。スケールの大きな団体活動を減らしても良い。

D-25 王貴俊（絶対必要）

双方の交流、コミュニケーションを通して、長所を学んで自分の短所を補う。

E-10 郝耀華（必要）

両国の友好関係は両国の教育者の共同事業だと思う。これからお互いに勉強し合い、友好関係を続けていきたい。

E-18 陳良根（絶対必要）

理解した上でお互い尊重し勉強し合う。両国の教育者の責任感を持つべきだ。

E-21 楊艶妮（絶対必要）

このプログラムに参加するのは両国の基礎教育の教育者の関係を深め、日本の基礎教育、教学の方法などを深く理解することができるいい方法だと思う。

E-29 王禹耕（絶対必要）

中国の人口（学校と教師も含め）が多いので、実際に日本基礎教育を経験できる教師がわずかにしかない。そのため、できれば交流教員の数を増やし、適宜日程を短縮し予算どりをするのはどうか。

質問 14. その他気付いた点

【主な意見】*原文は中国語（ACCU 仮訳）

A-9 楊桂華

日本は環境保護意識が高く、大変清潔である。日本人は文明的で、勤勉で礼儀正しい。日本は歴史の保存を非常に重要視する（博物館が多いことより）

A-13 李 群

日本は博物館や美術館など文化施設が多く、生徒が体験学習できる項目も多いので、非常に良い。

A-15 薛為群

知的障害の生徒に対する教員の愛情が印象深い。

B-6 肖建竜

日本人は交通ルールなどルールをちゃんと守っているからこそ、教育面でも秩序がある。

B-8 吳志剛

東京では学校や病院などの跡地の記念碑をよく見かけ、生徒に学校の歴代校長や学校の歴史などを教える姿を見て、日本は文化伝承に心がけていることが印象的だった。印刷博物館や国立科学博物館の説明から、学校との連携、実践方面での協力で尽力していることがわかった。社会の各分野と学校が連携する教育理念は見習うべきだ。

B-15 李 琳

今回の活動で日本人は中国（北京や上海に限り）に対する理解は深くないことを気づいた。日本の教師や生徒も中国へ訪問する機会があったらいいと思う

B-21 王利生

伝統的な民族文化と現代文明のつながりが非常に良い。家庭や他人に対する手厚い配慮に深い印象が残った。熊本県立荒尾養護学校の教頭の言葉「我々が重度障害児を教育するのは、彼らの存在が周りの人への教育にもなるからだ」は感動的だった。

C-13 李国平

もっと一般的な、又は立ち遅れている学校も訪問し、中国の教員が日本よりもスキルアップをよくやっていることを日本の教員に伝えたい。お互い勉強し合い中国の実情に基づい

て子供たちに適した健康的な発展のための教育を作り出していきたい。

C-15 劉尚斌

日本人の温かなもてなしと運営に感謝。日本人の秩序正しい仕事ぶりや文化的な行動に気付かされ、友好の気持ちも十分感じた。

C-27 孫静玲

日本人のもてなしは友好的だった。どこに行っても礼儀正しく、町も清潔で、工事現場でも整っている。

D-23 呂 杰

1 人の力はとても小さいが同時に 1 人の力はとても大きい、岡崎嘉平太先生と同様、一生努力し続けることが一世一代の功績を成し遂げる。一步一步堅実に歩めば世界は少しずつ良くなる。日本人は震災後も黙々と一步一步頑張っている。

D-26 何国民

日本の教育は環境教育を重視している。日本人はやることに對して真剣。日本人が大切に思うことは他人に迷惑をかけること。これは見習うべきところだと強く思った。

E-4 王惠玲

支援学校教員の生徒に対するケアは感動的だった。

E-10 郝耀華

日本の教育は様々な面で優れている。また、都市の建設、交通管理、国民の素養も学ぶべきことが多い。

E-18 陳良根

日本の教育は様々な面で優れている。特に、国際的な教育、グローバル化にあわせた教育がいいと思う。

E-29 王禹耕

AB は小学校、CD は中校、E は高校、どのグループにも特別支援学校の教員というグループ分けだが、A は特別支援学校を訪問しなかったし E は高校以外に小中学校も訪問した。全体理解の助けにはなるかもしれないが教員同士の意見交換では質問を上げられない場合もあった。「小・中・高・特」に分けたグループでの意見交換の方が効果的だと思う。又、通訳が足りなかった場合もあった。

◆2. 各県・市教育委員会

Aグループ

美祢市教育委員会

学校教育課 課長補佐 柴田 眞弓

プログラムの全体的な印象

- 大きなプロジェクトであるため、市全体が心づくしのおもてなしが出来るよう、配慮していった。各訪問学校においては、直接、国際交流の一端を肌で感じる事が出来たし、訪問をしなかった学校においても、お土産づくり等に関わる事が出来た。協力していただいた関係諸機関からも、貴重な体験だったと感謝の言葉も頂いた。改めて美祢市の地域力を感じる機会を与えて頂いた事に感謝する。

プログラム成果

- 山口県は中国山東省と、そして美祢市では橐莊市と友好都市を結んでいる。また、美祢市は、「交流拠点都市」として美祢市の良さをより多くの方々に知って頂きたい時に、国際連合大学主催・ACCU 運営の本事業を受ける事は、とても時宜を得たものであった。
- 企画運営段階で、改めて美祢市の良さに気づくことが出来、本市を知った上で、中国についても知っていく事は、今後の国際教育交流を深めるにあたり、必ず価値のある事と考えている。

苦勞した点

- 美祢市の場合、市が引き受けて、各関係機関にお願いする形であったため、ホームビジット・通訳・訪問機関の選定に、時間と困難を極めた。位置的に、県中央部で交通機関も不便であるため、ボランティア通訳への交通費が大幅に不足した。補正予

算を組み、一つひとつのプログラムが円滑にいくよう配慮した。

加えるとよいと思われる活動

- 今回、厚保中学校の授業参観後のディスカッションは、両国の教育の観点からの意見交換が出来、お互いの教育の深まりになった。直接、話し合える時間が大切だと考える。また、お抹茶体験や弓道体験等、「日本文化」の体験活動も貴重であった。
- ホームビジット体験では、もちつきや日本料理づくり等、趣向をこらした一時も大切な体験と思われる。

プログラム改善に向けた助言

- 選定業者・交通会社からの連絡・挨拶・打ち合わせがありませんでした。引き受けの市と業者との役割分担が不明確でした。

Bグループ

荒尾市教育委員会

教育振興課 指導主事 寺尾 俊二

プログラムの全体的な印象

- 中国訪問ではできなかった日本の教職員と中国の教職員との意見交換ができたのはよかった。もう少し中国の教育事情を聞く時間があればもっとよかったと思う。
- 辛亥革命に日本人が関わっていたことはご存じだったが、荒尾の宮崎滔天をはじめ宮崎兄弟が関わっていたことを理解していただいたことは、今回のプログラムの所期の目的だったので、それが達成されてよかった。
- もう1日あれば、「グリーンランド」や「ウルトラマンランド」にも案内できたと思う。

- 最終日の朝に「おはよう」「さよなら」「どうも」という日本語が聞けたのが印象的だった。

プログラム成果

- 中国教職員に対して我が国の一般的な公教育の状況の理解を進めることができた。
- 本市、特に宮崎兄弟と中国との関係の深さを中国教職員に対して示すことができた。
- ホームビジットを通して、個人レベルの相互理解と友好親善を深めることができた。
- 学校の受け入れ体制が協力的で、爆竹でのお出迎え、歓迎の垂れ幕や横断幕、記念品等、荒尾市の学校の一丸となった姿を見ることができた。

苦労した点

- 辛亥革命 100 周年記念行事の関係で、他の課の応援がなく、教育振興課だけで企画・運営を行ったのが大変だった。
- 時間的な余裕がもう少しあれば、社会的施設見学だけでなく、“よかところ荒尾”を PR できるような活動を組み込むことができたのではないかな。
- ホームビジット受入家庭やボランティア通訳の確保がスムーズにいったので、苦労しなかったが、通訳を交えるので時間配分が難しかった。

加えるとよいと思われる活動

- 一小のように児童生徒との交流がもっとできればいいと思った。
- 小グループでの教職員間の意見交換があればもっと交流が深まると思った。
- 給食は都市部ではあるようなので興味がないようだった(地域で差がある)。

プログラム改善に向けた助言

- ホームビジットに際し、受入家庭に中国の一般的な教育事情の情報提供があれば、話題をもっと広げられたと思う。
- 事前準備のために、受け入れる教育委員会、ホームビジット、学校へのマニュアル(会場図や席順、横断幕の文字、基本的なプログラムの例等)があれば助かります(初めての受け入れの場合)。
- ホームステイは負担に感じるが、泊まりたかったという声があり考えてもいいのではないかな。

C グループ

多摩市教育委員会

統括指導主事

福田 洋一

プログラムの全体的な印象

- 中国教職員の皆さんが特に関心をもたれたことは、人事評価制度、学校評価、施設・設備、ESD、研修制度、教育内容、入試制度、生活指導、教科指導等であった。
- 教育・文化交流に前向きで、熱心な様子が見られた。
- 多摩市の伝統文化や家庭の温かさに触れ、多摩市への理解を深めることができた。

プログラム成果

- 教職員との交流を通して、他国の教育や文化、生活を知るとともに、自国の良さや特色を改めて理解することができた。
- 多摩市における ESD を柱とする特色ある教育活動や施設・設備等の工夫を積極的に発信することで、中国における今後の教育施策の充実に少しでも役に立つことができた。
- 訪問団受入れにあたり、教育委員会と学校、家庭、地域企業等が連携を深めることができた。

苦勞した点

- ホームヴィジットの受入れ家庭を依頼、調整するのは困難であった。
- 通訳の関係で、事前に原稿を求められることへの対応が最も負担が大きかった。

Dグループ

岡山県総社市教育委員会

学校教育課長

片岡 正喜

プログラムの全体的な印象

- 今回の受け入れは、平成 19 年、21 年に続いて 3 回目であったため、継続した交流により、より一層友好が深まることが実感できました。今後、定期的に交流を続けることで、文化面、教育面で様々な相互理解が促進され、さらに両国の絆を深めることができると思います。
- 歓迎交流会では、中国教職員の方々と非常に親しくなり、様々な会話を楽しみました。温羅太鼓など、説明抜きで日本の文化を体感できるアトラクションも好評でした。また、「北国の春」の CD と楽譜を用意したため、全員でしっかり歌うことができ、一体感がさらに高まったと思います。
- 総社市での最終日の情報共有会で、もう一度「北国の春」を全員で歌いました。4 日間の研修を振り返り、別れを惜しむ気持ちでいっぱいになりました。今回のように、一人ひとりの方々との出会いを大切にするという視点を忘れず、今後も国際理解教育に取り組んでいきたいと思っています。
- オリエンテーションや交流会での中国教職員の方々の積極的で熱心な姿勢には、同じ教育者として深く感銘を受けました。教育の向上という共通の視点をもつからこそ、交流の質を深めることができたと思い

ます。

プログラム成果

- 小学校 5、6 年において、外国語活動が必修化されるなど、英語を通した国際交流学習に重点を置きがちですが、子どもたちの目をアジアに向け、隣人である中国の方々と交流できたことは、多様な文化や価値観を受け入れる素地を養うことにつながり、大きな成果であったと思います。
- 学校訪問では、各校がそれぞれの校種の特徴を生かした交流を工夫してくださり、大変充実した時間を共有できました。中国の方々への発信という活動を通して、改めて自国の文化や教育を見直す貴重な機会を得たと思います。
- 今回の受け入れをきっかけに、石家庄市第四十中学と総社東中との交流が始まる予定です。ひとつの大きな成果として、他校にも広げていきたい事例です。

苦勞した点

- ボランティア通訳の人員確保に苦慮しました。

加えるとよいと思われる活動

- 総社中央小学校において、中国の先生方に児童が直接インタビューする場面があり、子どもたちが生き生きと活躍していました。また、総社西中学校では生徒との情報交換の時間があり、日本の学校生活について具体的に率直なやりとりがあり、とても微笑ましく感じました。今後も、中国の先生方と子どもたちが直接関わる企画を盛り込んでいきたいです。

プログラム改善に向けた助言

- オリエンテーション等で答えきれ

なかった質問は、後でまとめて文書で回答し、バスの中で紹介してもらいました。総社市から質問をする時間はありませんでしたが、こちらからも何点か質問を用意し、文書で回答をもらう等の工夫をすればよかったと思います。

- 総社西中の訪問の際、給食後、自由な時間があり、中国の先生方がのびのびと過ごされていました。他のプログラムにも、もう少し自由時間があってもよかったかもしれません。

E グループ

徳島県教育委員会

学校政策課 指導主事 木屋村 浩章

プログラムの全体的な印象

- 日本の教職員にとって、仕事や経費などの都合で実際に行き来するのが難しいなか、私たちの徳島県が、他国、特に近隣の中国の教職員と直接交流できる機会を持つことができたのは素晴らしいことだと感じました。さらに、ホームビジット、県教委訪問、学校訪問、歓迎交流会とプログラム内容が充実しており、両国の教職員がいろいろな場面とおして、相互理解を深めることができました。特に、児童生徒との交流行事において、子どもたちと中国教職員の方々が、言葉の壁を乗り越えて楽しそうに交流している姿を見て、本県での計画及び運営を担当した者として、この上ない喜びとなりました。グループ・プログラム全体をとおして、関係した教職員だけでなく、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校の子どもたちにとっても、有意義な異文化体験になったように思いました

プログラム成果

- 外国の人との交流においては、直接言葉を交わしたり、一緒に過ごしたりすることで、記憶に残る異文化体験になると考えております。その意味で、ホームビジットや学校訪問における児童生徒との交流は、有意義なプログラム内容であったように思います。中国と徳島県の教職員、児童生徒が、お互いの生活について情報交換したり、言葉を学んだりできたことが大きな成果であったように思います。

苦勞した点

- ホームビジットのための打合せ会の開催やボランティア通訳を探すのに苦勞しました。ホスト家庭や通訳の皆さんは、平日には仕事をされており、連絡事項を伝えたり、出席などの確認をとるのに時間がかかりました。

加えるとよいと思われる活動

- 中国の教職員の方に、各自治体のことをもっと知っていただくため、名所などの観光を1回（1箇所）でも組み入れてははいかがでしょうか。また、受入校の教職員または児童生徒が、逆に中国を訪問できる機会を持てる制度になれば、交流がより深まるように思います。

プログラム改善に向けた助言

- グループ・プログラムの各メニューにおいて、必ずあいさつや説明がありますが、通訳を介するため時間がかかり、実際に交流する時間を十分確保できなかったように感じました。また、訪問団の方のスケジュールが過密で、少しゆとりがあった方がいいように思います。

3.主な受入れ学校および機関

Aグループ（東京近郊）

●青山学院初等部

教頭

中村 貞雄

プログラムの全体的な印象

- 訪問 1 校目で比較もできなかったためか、QA など質疑応答などあまり積極性は見られなかった。
- またぜひいらしていただきたい。

Aグループ（山口県美祢市）

●美祢市立大嶺小学校

教頭

宇田川 明恵

プログラムの全体的な印象

- 全学級の授業を参観していただきました。本校にとっては、通常の一般的な授業でしたが、皆さんが大変熱心に参観してくださり、たくさんの質問をその場で積極的にされました。その時に、お互いの国の教育システムの違いや指導方法のちがいなどが具体的にわかり、参考になりました。
- 特別支援学級や通級指導教室の教育課程や指導システム、学級設置基準についてたくさん質問を受けました。中国では、公立の学校に特別支援教育の制度があまり普及していないとのことで、こちらも興味深かったです。
- 小学校外国語活動の時間が、年間 35 時間の実施ということを紹介すると、「1 学期に 35 時間のまちがいではないか」と問い返されたので、中国では英語教育が進んでいるのだと、感じました。

プログラム成果

- 中国の方をたくさんお迎えするということで、児童に生の国際交流体験ができたことが、大きな成果です。
- 言葉は通じなくても、身振りや手振りで、意志を伝えようとしたことで、コミュニケーションの素地を培うことができました。
- 同じアジアの近い国ですが、文化や教育がちがうことを、改めて感じることができました。

苦勞した点

- 交流会の企画運営は、児童（運営委員会）に任せたのですが、通訳の説明がはいるので、一つひとつのプログラムをこなすのに、時間が 2 倍以上かかったので、予定時間を過ぎてしまい、計画していたプログラムを省略しなければならなかったのが、残念です。
- 学校も秋は、たくさんの学校行事を計画しており、授業時数が不足しがちです。交流会の準備にたくさんの時間はさけないので、最低限の時間で準備をしました。

プログラム改善に向けた助言

- 1 校の受け入れ人数を 20 人以内にしたいほうが、もっと密な交流がはかれると感じました。

●山口県立青嶺高等学校

校長

藤井 勇夫

プログラムの全体的な印象

- 来校教員団の多くが小学校の所属ということで、日本の高校についてどの程度紹介すればよいか、試行錯誤であったが、ほぼ満足して頂けたのではないかと思います。
- 定期考査中であり、生徒の活動状況を直接お見せできなかったが、DVDでの紹介や校内見学等をとおして、本校の教育活動に対するお褒めの言葉も頂いた。

プログラム成果

- 中国の教員に日本の教育システムの一端を紹介することができた。
- 外部への学校紹介技術を改めて学ぶことができた。
- 多少なりとも日中友好に寄与できた。

苦勞した点

- 約2時間という限られた時間では、本校を十分に紹介できなかった。
- 女性教員が多かったからか、工業科への関心はあまり高くなかった。
- 多くの質問があり、意見交換の時間が足らなかった。

加えるとよいと思われる活動

- 生徒の活動を見て頂くこと
- 実際の授業を参観して頂くこと
- 工業科における体験実習等

プログラム改善に向けた助言

- 当日の司会・進行等の打ち合わせを事前しておく方がよかった。
- 長期間の日程で疲れておられる方もおられたので、休憩時間を設ける等、ゆったりとした時間設定が欲しかった。

●美祢市立大嶺中学校

教務主任

藍原 邦子

プログラムの全体的な印象

- 本校は、日頃の部活動（弓道部）の紹介を通じて、日本の武道の紹介・地域の指導者の協力の在り方・部員の活躍の紹介が出来て、良かったと感じている。

プログラム成果

- 国際交流の機会を与えて頂き、生徒にとっても貴重な体験になったと思われる。中国の教職員に、日本の部活動の状況を伝える事ができたのではないかと考えている。国際交流の双方向としてのつながりの第1歩になったことから、大きな収穫と言える。

苦勞した点

- 限られた時間の中で、地域の方々の紹介と日頃の部活動の流れとの兼ね合いが難しかったため、顧問と地域の指導者との調整・相談に手間取った。夕方の時間帯であったことと時期が秋であるため、下校時刻を変更出来ない状況の中での紹介となり、十分な紹介が出来たかが心配である。

加えるとよいと思われる活動

- 弓道に興味を持たれた中国教職員が多かったため、「体験活動」の部分が多く入れられると良いと感じた。

プログラム改善に向けた助言

- 生徒にお土産を頂き、申し訳なく思っている。生徒にとっては、一生の思い出になるが、美祢市の少人数であるため、一人ひとりに行き渡ったのではないと思われる。

●美祢市立厚保中学校

校長

杉山 康子

プログラムの全体的な印象

- ご訪問くださった中国教職員団の皆様への授業参観される際の積極的な姿勢や意見交換会での賞賛を含めていただきながら的確なご示唆の数々に、感銘を受けました。
- 教職員・子どもたち共々、国際的な視野を持つことの大切さをあらためて考える良い機会を与えていただきました。

プログラム成果

- 日本以外の国の皆様から道徳授業を参観していただき、多くの賞賛をいただいたことは、教職員だけでなく、子どもたちにも、大きな自信となりました。今回のプログラムに本校を加えていただいたことで、教職員全員で知恵を出し合い、まとまることの心地よさと達成感を味わうことができました。ありがとうございました。

苦勞した点

- 日本語と中国語と通訳の方を通しての運営のため、進行を考える上で、時間配分が非常に立てにくかった点です。
- さらに、道徳授業の中での生徒の学び合い活動の様子を十分お伝えできたかどうか不安を感じていました。

加えるとよいと思われる活動

- 教育実践にすばらしい実績を積んでおられる皆様ばかりでしたので、もっとじっくりと日本と中国のお互いの教育実践について語り合う機会を十分確保していくことが大切だと感じています。

プログラム改善に向けた助言

- 教職員も子どもたちも貴重な体験のできるこのプログラムを、是非末永く続けていただきたいと思います。

●美祢市立嘉万小学校

教頭

大田 典子

プログラムの全体的な印象

- 子どもたちの中には、日常会話を中国語の片言で話したり、身振り手振りで意思疎通をしたりしてコミュニケーションを図ることができた。「みかん」「牛乳」という中国語も教えていただいた子どももいた。マーチングバンドの演奏・演技を披露した際、最後に「ワー」という歓声を上げて喜ばれたのが子どもたちにとっては強く印象に残ったシーンだったようだ。

プログラム成果

- 「言葉が通じなくても伝えようという気持ちと相手が分かってくたさろうという気持ちがあれば、何とか意思疎通を図ることができる」ということを子どもたちが学んだことは大きな収穫である。

苦勞した点

- 中国の方々が全校給食の時、思い思いにお土産をくださりありがたかった反面、もらっていない子どももいたので、後の対応に苦慮した。

加えるとよいと思われる活動

- 中国の先生方と子どもたちが楽しく交流できるような活動(例えばかんたんゲーム)等を仕組むとよいと感じた。

Bグループ（熊本県荒尾市）

●荒尾市立万田小学校

教頭

寺岡 伸義

プログラムの全体的な印象

- 爆竹や垂れ幕での出迎え、中国語での校長あいさつ、記念品贈呈、教師間意見交換会等で、中国教職員団の皆さんの様々な表情を目にすることができ、本校のプログラムにある程度満足いただいたものと喜んでいきます。
- 意見交換会では、本校の危機管理体制の整備や人事評価、児童の事故に対する責任の所在、学力向上の手立て、複数での指導体制、教師の倦怠感等の想定外の質問からは、中国の教育事情を垣間見ることができましたし、真剣な表情がとても印象的でした。

プログラム成果

- 中国教職員団をお迎えするにあたり、校内の環境美化整備を行ったことや、職員の気持ちが一つになっていたことは、学校経営の上でもプラスになったと考えています。また、わずかな時間でしたが、児童にとっても教師にとっても国際交流のよい機会になったと思っています。

苦勞した点

- ホームビジットにおいても、学校訪問においても、時間的なゆとりがもっとほしいという声が聞かれました。受入式や意見交換会等では、通訳のために時間がかかると分かっているながらも予想できないために、どうしても時間が延びてしまうように思いました。また、言葉の壁を全職員が感じていたようです。英語であれば、何となくわかるものの、中国語になるとまったく分からないという状況でした。中国の方々もあまり英語を使われなかったよう

に感じました。

加えるとよいと思われる活動

- 中国の方々による教育事情の説明や、共通の教育課題に柱を絞った話し合いを行ってもよいように思えました。国籍は異なっても、同じ職業観をもっておられたように思えたので、意見交換の内容にもっと深まりがあってもよいように感じました。

プログラム改善に向けた助言

- 教師間の意見交換は、互いに貴重な時間でした。それだけに、通訳の方を増やしてグループを少人数化した方が、話し合いの内容も深まるように思いました。互いに、もっと聞きたいことがあったのに終了時間が来てしまったように感じました。

●荒尾市立荒尾第一小学校

校長

橋本 直

プログラムの全体的な印象

- 本校には、午前中に来ていただいた関係もあり、子どもたちの授業中の様子を観て頂き、交流の時間も取ることができました。交流の際に事前にこちらからお願いしておりました中国の楽器の紹介については、たいへん詳しく準備して頂くとともに、子どもたちにお土産まで頂き、大変有り難く思っております。
- また、交流の時間には満面の笑顔で子どもたちに接して頂き、給食の準備や、昼休みの様子などにも興味を持って関わっていただくなど、国は違っても同じ教育に携わる者として子どもたちに関わる感覚は同じであることを感じさせてもらいました。

プログラム成果

- 言葉は通じなくとも、交流することで、お互いを身近に感じることができるといっても大切なことを再確認させていただいたように思います。子どもたちにとっても、中国の方々を身近に感じることができたことにより、違う国の人たちとも心を通わせることができるという、コミュニケーションの素地を培うことになったのではないかと思います。

苦勞した点

- 特に苦勞ということはありませんでした。ただ、中国語だからかどうかは分かりませんが、通訳を介して意思の疎通を図ることが、思ったよりも時間がかかるということを実感しました。

加えるとよいと思われる活動

- 今回は中国から来られたので、日本の教育について尋ねられることは当然と思いますが、日本の教職員としては、中国の教育との違いについて、率直に意見交換をしたいと思いました。日本の教育現場を視察されてどのように思われたのか、感じられたのかを伺いたいとも思いました。

●荒尾市立荒尾海陽中学校

校長

馬場 陽一

プログラムの全体的な印象

- 学級数が多いので、授業参観が十分できなかったことが残念であった。授業に参加していただいたりすると子どもたちにもいい刺激になったのではないかと感じた。一部の授業では、漢詩を中国語で読んでいただいたりでできてよかった。

プログラム成果

- 生徒会等で歓迎準備等を行うことで、日本以外の異なる文化の国の人を歓迎する心構え等が、子どもたちにもよい影響を与えた。また、真心で接することの大切さを知ることでもできよかった。全校生徒にとっても、来ていただいたことで自信も生まれ、学校に誇りを持つよい機会となった。

苦勞した点

- 習慣の違いがあり、席順等も気を遣った。不満に思われている可能性もあり、事前に習慣についてマニュアル等があるとありがたいと感じた。

加えるとよいと思われる活動

- 本校の職員数が多く、時間をとることができなかったか。全職員参加の教職員同士の交流会を持てる時間があると互いに刺激にもなりよかったと思った。
- 中国の指導法等について、研修する機会があるとよかった。

プログラム改善に向けた助言

- 事前準備に何をしてよいか戸惑ったことが多かった。基本的なプログラムの流れや、レイアウトなどがあるとよいと感じた。

●熊本県立荒尾養護学校
教頭

中山 龍也

プログラムの全体的な印象

- 中国では義務教育でも重度の障害者は学校に行かなくてもよいという特例措置がある。
- 中国と日本の教育制度は似ているが、実態にはかなりの開きがある。
- 本当の意味の特殊教育を見ることができた。参加した教職員に新しいものをもたらすことができた。
- 日本の教育は、人間が人間に対する幸福を願い、愛の心がある。弱者に対する配慮が全国民に対する配慮に繋がっている。

プログラム成果

- <児童生徒にとって>
- 中国の歴史や風土、言語等について学習をする機会となった。
- 言葉の壁を感じることなく笑顔で相互の交流ができた。
- <教職員にとって>
- 中国における特殊教育の現状について知る機会となった。
- 他国における特殊教育の現状について直接情報交換をすることで、日本における特別支援教育と対比して考察する機会となった。
- 中国教職員の人間性やおおらかさなど、従来持っていた中国国民に対する意識の変容が見られた。

苦勞した点

- 訪問団の研修ニーズが事前に把握できておれば、そのニーズに応じてプレゼンテーションを準備することができるが、プレゼンの視点をどのように設定するか、苦勞した。
- 自校の行事であるまつりの準備や研修等の受け入れ期間であり、行事の輻輳があった。
- 初めて取り組む行事であり、見通しが持ちにくく、管理職が中心となっ

て対応した。

- 中国語への馴染みがなく、準備物作成に苦勞した。

加えるとよいと思われる活動

- 児童生徒や教職員との直接交流。
- 学校種に応じた交流。

プログラム改善に向けた助言

- 今回の訪問者の本校訪問に関する意見や感想を知りたい。
- 県立学校訪問に関しては事前に県教育委員会との調整等が必要。

●宮崎兄弟の生家

社会教育課文化係長 岩本 崇

プログラムの全体的な印象

- オリエンテーションにおいて宮崎兄弟顕彰 DVD（中国語版）の上映を行ったところ、孫文が中心となった中国辛亥革命の成功に、日本人（特に宮崎滔天）の支えがあったことを中国の先生方に知ってもらえたことは、大きな成果がありました。
- その結果、多数の先生から当市で作成している宮崎兄弟顕彰 DVD が欲しいとの要望があったため、できる限りの枚数を配付しました。

プログラム成果

- 孫文を支えた当市の宮崎滔天をはじめとする宮崎兄弟を、中国の先生方にも知ってもらえたことは大きな成果でした。

プログラム改善に向けた助言

- 多少スケジュールに余裕を持たせた方がいいと思います。

Dグループ（岡山県総社市）

●総社市立総社中央小学校

校長

池上 元一郎

プログラムの全体的な印象

- 本校での公開内容は、5校時目の授業公開と6校時目の音楽集会の参観、その後の学校概要の説明と質疑応答だった。
- 5校時目の授業公開では、特に外国語活動には興味がある先生方が多かった。また、算数も世界共通であることもあり、熱心に参観していただいたようだ。その他では、社会をコンピュータ室で学習しているのを覗かれ、コンピュータをどう活用するのかと質問する先生もいた。保健学習の「けがの防止」にも興味を示していた先生もいた。おおむね、どの教科でも熱心に子ども達がんばる様子を興味をもって見ていただいたようだ。
- 5校時目の授業公開では、特に外国語活動には興味がある先生方が多かった。また、算数も世界共通であることもあり、熱心に参観していただいたようだ。その他では、社会をコンピュータ室で学習しているのを覗かれ、コンピュータをどう活用するのかと質問する先生もいた。保健学習の「けがの防止」にも興味を示していた先生もいた。おおむね、どの教科でも熱心に子ども達がんばる様子を興味をもって見ていただいたようだ。
- 学校説明や質疑では、特別支援教育、PTA 活動、少人数学習、職員の勤務条件、施設のことなど幅広い質問がでて、先生方の熱心さがよく伝わってきた。

プログラム成果

- 日頃は経験できない国際交流の場をいただき、その中で、子ども達が一生懸命勉強したり、音楽集会で発表したりできた。それを褒めていた

だいたことで自信をもち、自分たちも国際貢献できたという思いをもつことができた。特に5年生は、現在両クラスとも担任の先生が病気休暇中という不安定な中で、一生懸命練習し、中国語で「まつり花」を歌い、それを中国の先生方からしっかり褒めていただいたことで、心を合わせてがんばると自分たちもできるという達成感や満足感をもつよい経験になった。

苦勞した点

- 中国教職員団の先生方をしっかり歓迎する会にできればよかったが、平素の教育課程をあまり変えず、こちらの負担にならないようにさせていただいた。どれだけ気持ちよくお迎えできるかを悩み、歓迎幕なども考えたが、国旗をできるだけ飾ることで済ませた。こちらの歓迎の思いが十分伝わったか気になった。

加えるとよいと思われる活動

- 授業の中に一緒に参加していただいたり、音楽集会の中で一緒に歌っていただいたりすることも考えられる。その点、やや時間的に窮屈だったか。特に、質疑が時間切れのようになって、申し訳なかった。間に通訳の方に入っていただくこともあり、どうしても時間が倍かかってしまうので仕方ないかと思う。

プログラム改善に向けた助言

- 保護者の中に中国籍の方がおり、事前に中国語での歓迎の言葉など、教えてもらったが、簡単な中国語のパンフレットなどを事前にいただいと、職員も子ども達も少しは学習し、また、違った迎え方したり親近感を深めたりすることができるとかと思う。
- ただ、通訳の方がしっかり間に入って下さったので、大変助かった。

●総社市立総社東中学校

校長

上岡 仁

プログラムの全体的な印象

- 中国教職員の皆様がやや緊張と疲労の表情で来校されましたが、お帰りになる際には笑顔になられていたので、本当に安心しました。
- 授業参観では、二つのグループに分かれていただき、指定授業を参観していただく予定でしたが、実際には指定授業に関係なくいろいろな授業を自由に参観してくださいました。当初から自由参観にすべきだったと思います。
- 意見交換では、中国教職員の皆様から教職員の多忙感の解消、修学旅行、学校評価、教員評価、施設・設備の予算、性教育など、多岐にわたる質問をいただきました。日本の教育、本校の教育に対する関心の高さがうかがえました。
- また、部活動見学では、積極的に生徒の活動に参加していただき、生徒と一緒に卓球やバレーボールを行うなど、短い時間ではありましたが生徒との交流を行うことができました。
- 最後に、吹奏楽部の演奏により、皆様に「北国の春」を歌っていただきました。1番は陳先生がソロで、2番からは全員で熱唱し、楽しい一時を過ごしていただけたと思います。

プログラム成果

- 第一に、日中友好の架け橋がまた一つ増えたことです。本校の生徒や教職員が真心を込めて中国教職員の皆様をお迎えしました。また、実際に中国教職員の皆様との交流を通して、生徒や教職員の中国に対する関心が今まで以上に高まったように思います。よい経験になりました。
- 第二に、石家庄市第四十中学の呂校長先生から、相互交流について提案をいただきました。ぜひ実現したい

と考えています。

苦勞した点

- 特に、ありません。事前に、プレゼンを中国語に翻訳していただき、ありがとうございました。

●岡山県立早島支援学校

校長

中野 隆重

プログラムの全体的な印象

- 熱心にご見学いただき、本校の教育を知っていただく良い機会となりました。
- 本校の重度の子どもたちの教育の様子から、人権を大切にされていると言われ、日本の障害のある子どもたちの教育について関心をもって視察されたことがわかりました。
- 中国の特別支援学校の先生から、今回の学校訪問にける熱い思いをお伺いし、感激いたしました。また、子どもたちの作品や珍しい中国伝統の人形などをいただき感謝しております。校内に飾って、本校の子どもたちにも中国の文化を伝えることができるようにしたいと思います。
- 学校の施設設備費、教職員の給与など、具体的な数値を上げての回答を求められましたが、充分お答えすることができませんでした。申し訳ありません。

プログラム成果

- 中国の特別支援教育について少しですが、知ることができました。
- 日中の先生方との交流する機会が得られたことは、良かったと思います。

苦勞した点

- 限られた時間の中で、学校の説明や見学、意見交換会などを計画したた

め、大変忙しい日程となっていました。それぞれに、十分な時間をとることができませんでした。

- 学校概要や教育の様子について、理解しやすいように資料を整えることに苦勞しました。実際に見学していただく授業の他、訪問教育や派遣学級の授業の様子についても、できるだけ映像で分かりやすくお伝えしたいと思ったのですが、当日操作に不手際があり、十分お伝えすることができなかったことが残念です。

加えるとよいと思われる活動

- 言葉の壁はありますが、もっと少人数で話し合ったり、授業に入っただけ活動があっても良いのかなと思いました。

プログラム改善に向けた助言

- 教職員同士がゆっくり交流できる時間がとれると良いと思いました。

●総社市立総社西中学校

校長

藤井 和郎

プログラムの全体的な印象

- 広大な中国であるからこそ教育の機会均等、教育水準の維持向上などの大きな課題があることが、先生方のお話からよく伝わってきた。その中で、子どもたちのためにより良い教育を提供するため、日々苦勞しながら真摯に取り組んでいる様子も伺え、たいへん共感できた。中国の先生方との心理的距離が近くなったように感じた。

プログラム成果

- 本校の生徒たちにとって、中国の先生方と直接触れ合える機会に恵まれたことは大きな意義がある。給食、授業、掃除、帰りの会、合唱練習な

どの時間に、多くの生徒たちが挨拶をはじめとして何らかのコミュニケーションを取ろうとしていた。また、生徒会役員との懇談では、中国の先生方からの質問に答えたり、中国の先生方に質問したりして、生徒たちが積極的に取り組み、直接交流をすることができた。これらの経験は、生徒たちのこれからの人生に何らかのよい影響を与えてくれるものと思う。

- 中国の先生方に自由に見学していただく時間を設定していたので、生徒との交流が深まるとともに、教職員間でも活発な意見交換が行われた。

苦勞した点

- できるだけ生徒の活動を取り入れたいと考えたため、授業時間の関係で、中国教職員の到着時刻の調整やプログラムの組み方などに苦勞した。
- 英語と異なり中国語は理解が困難で、個別の交流では苦勞した。通訳を介しても時間が長くかかったように感じた。

加えるとよいと思われる活動

- 事前に準備・調整が必要であるが、中国の先生方の何人かに、ゲストティーチャーのような形で授業に入っただき、生徒たちに直接語りかけてもらうことができないだろうか。

E グループ（徳島県）

●徳島科学技術高等学校

教諭

寺澤 昌子

プログラムの全体的な印象

- 専門教育の担い手としての本校の存在意義・重要性をについて、客観的に見つめ直すよい機会となった。中国の専門教育は、一部の例を除き専門学校のような別の組織で行われていて、中等教育の主流ではないという話だったが、専門教育が重要な位置を占める日本の実情を紹介することで、ものづくり大国日本のしっかりした土台を見せられたのではないかなと思う。（校長談）
- ホームビジットについて
 - 本校では、5組の受け入れを行った。保護者・全教職員に呼びかけた結果、積極的な協力が得られ、書道・茶道の実演、熱烈歓迎の書を各家庭に掲示しての歓迎、レセプションで本校女性教員が着物姿で参加し、より日本文化を理解してもらうことを自主的に考えて手間暇かけて中国からの先生方への歓迎の気持ちを表してくれ、本校教員の国際理解に向けた意識の高さに感謝している。
 - スタートの時間が夕方からとなり、いろんな場所にご案内ができなかったが、いろいろ工夫して心からの対応をしてくれたと感じている。中国では、パソコン等の普及により書道のような字を書く文化がだんだんと少なくなっている現状もあるようで、大変喜ばれた。
 - また、丈六寺等中国とつながりが深い文化財への案内等も行った。食事においても、家主より先に食べないとか、ご飯は残さない、お酒も家主が飲まなければ飲まない等礼儀的な面もしっかりと残っていた。
 - 一人っ子政策について話を聞いたが、特に政策としては進めてはいないが、経済的な厳しさも一方ではあり、子どもを一人しか産まないという自主的な判断が若者の中に生ま

れている等の話もしてくれた。

- 特に、興味深かったのは、「1戸建て住宅について、すべて個人持ちなのか」「車の所有」の件等、中国ではなかなか厳しい現実があるとの話もあり、マスコミでの情報とは異なる面も聞くことができた。

プログラム成果

- 背景知識がほとんどない方々にも、本校が取り組んできた高度な専門教育・ものづくり教育について理解していただこうと、プレゼンテーションや授業見学の内容もいつも以上に工夫したことで、専門高校としての本校の特色やユニークな取組を改めて整理・理解できた。
- 所属校や組織に誇りと自信を持った中国の教職員の方々と接することで、長期的なビジョンを持って前向きに取り組む姿勢のすばらしさを再認識した。
- 本校は「世界をめざす技術者へ」というスローガンを掲げているが、教職員・生徒とも、異なった文化に直接触れることで、これからの科学技術の進歩が世界的な視野を持たなければならない時代に突入しているという自覚を持つ必要性を再認識することができた。

苦労した点

- 席次や座席名の表示の方法。県の教育委員会の方からアドバイスをもらえたので当日はスムーズに行えたと思うが、立案の時点で時間と手間がかかった。中国と本校の教職員だけでなく、ACCU・県の教育委員会・通訳・添乗員などいろいろな方が絡むので、会場の大きさの制約等があるだろうが、先行例などいくつか示していただければ参考になるかなと思う。
- 意見交換会の進め方。情報シートで、「中国側に聞いてみたいこと」を提案したが、それにどれほどの重みが

あるのかよくわからなかった。双方共準備の上でそれに従って進むべきなのか、学校訪問の感想から始めてざっくばらんに進めてもいいのか、もう少し事前に情報があると助かったと思う。

加えるとよいと思われる活動

- 中国側からも、話だけでなく映像や画像を交えたプレゼンテーション等があるとよりわかりやすいかと思う。

●徳島県ひのみね支援学校

副校長

川村 桂子

プログラムの全体的な印象

- 本校は医療施設隣接の特別支援学校で、プログラムに医療施設の訓練室を見学に入れたことにより、障害のある児童生徒を医教連携して支援している取り組みを伝えることができた。
- 概要説明の頃は表情の硬かった先生方が、児童生徒の授業見学・交流の時間から笑顔になり積極的に活動する場面がみられた。児童生徒との交流は、有意義であると感じた。

プログラム成果

- 児童生徒は、中華人民共和国の先生方とふれ合うことにより、意識がグローバル化された。教職員は、国際理解教育を推進することの大切さを感じることでできるよい機会であった。

苦勞した点

- 滞在時間に制限があり、授業見学や両国教員の情報交換に十分時間がとれなかった。

●徳島県立名西高等学校

教頭

横井 祥人

プログラムの全体的な印象

- 出来るだけ日本文化を体験してもらえるように配慮した。書道の授業・部活動の弓道や相撲見学を見る中国の教職員の熱心な眼差しが印象的であった。日本のお茶と地元の和菓子をお出ししたところ、おいしそうに食べて頂きとてもうれしかった。別れ際に、団長さんと強く握手を交わし、バスの中から全員、手を振って別れを惜しんでくれ、本当にいい交流ができたと考えている。

プログラム成果

- 短期間での準備のため十分なことができなかったが、帰り際に「他校では体験できない日本文化を体験することができた。」という話を ACCU の職員の方からお聞きした。今回の訪問受け入れを通して、国際交流による異文化理解や日本文化をより理解し、地域に発信していくことなどの本校の特色や今後の方向性を改めて考える機会になったように思う。

苦勞した点

- 意見交換の時間を約1時間とっていたが、通訳を介してになるので、時間不足になり、もっと意見交換したいという思いが残った。

●徳島市加茂名中学校
教頭

井上 一男

プログラムの全体的な印象

- 中国の教育制度・子どもたちのようすや課題等学ぶことができ、貴重な体験となった。また、お互いの文化にも触れることができ、交流と友好を深めることができた。何よりも、本校第1学年の生徒と行った交流会での、訪問団の方々と生徒たちの楽しそうな、うれしそうな笑顔が印象に残っている。生徒たちにすてきな出会いの機会を与えてくれたことに感謝している。

プログラム成果

- 短時間ではあったが、訪問団の方々と意見交換や食事を共にし、中国が大変身近な国と感じられた。また、ことばは通じなくとも真心を持って接することが、相互理解の第一歩になることを教員・生徒とも学ぶことができた。特に第1学年の生徒たちは、交流会でそのことを身をもって体験し、自分たちの力でも外国の人ともわかりあえることに自信を持ったようである。

苦勞した点

- 本校での滞在時間が限られていたので、交流計画を立てるのに苦勞した。特に交流プログラムが学校の日課にあわせての計画だったため、1つのプログラムが45分前後となり、訪問団の方々にとっては時間に追われ慌ただしく感じられたかもしれない。

加えるとよいと思われる活動

- 学校訪問時の滞在時間をもう少し長くし、見学も含め日本の教員や保護者と交流したり、子供達とふれあう時間を長く確保できればと思う。

●徳島市千松小学校
教頭

堀川 富美

プログラムの全体的な印象

- 体育館での歓迎行事は、楽しんでいただけたのではないかと。本校の児童も楽しんで参加できた。
- 阿波踊りは、輪が広がり大変良かったと思う。
- 歓迎会で中国語の歌を歌ったのは、喜んでいただけて良かった。

プログラム成果

- 児童の中国に対する理解が深まり、親近感をもつことができた。
- 6年生は、阿波踊りを中国の先生方に見ていただく機会ができたことで、達成感を得ることができた。
- 中国と日本の教育事情について、情報交換することができた。

苦勞した点

- 運動会等の学校行事と重なり、公開授業・歓迎会の準備等、担当者は多忙であった。
- 会話が中国語だけであったので、通訳の方がいないと話を進めることができなかった。(通訳していただく時間が必要であった)

加えるとよいと思われる活動

- 今回の訪問を通じて、児童が中国について関心をもつことができたので、中国について理解を深める場面を設定する。
- 児童と教職員が交流する場(ゲストティーチャーとして、授業に参加してもらう)の設定。

プログラム改善に向けた助言

- 給食を食べながら、通訳をとおして会話をするのは、難しかった。

付録

1. 実施要項
2. プログラム日程
3. 参加者リスト
4. 関係機関リスト
5. 文部科学省講義資料

◆付録 1. 実施要項

国際連合大学 2011-2012 年国際教育交流事業 中国教職員招へいプログラム

(2011 年 10 月 12 日－23 日：東京、大阪、京都、岡山、山口、熊本、徳島)

実 施 要 項

1. 背 景

(財)ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) では、我が国と中国の教職員間の交流を深め、両国民の相互理解と友好の促進に資するため、国際連合大学の委託を受け、ACCU 国際教育交流事業として 2002 年より中国から初等中等教育教職員を招へいするプログラムを実施しております。

また、2003 年からは同プログラムと対をなすものとして、日本の初等中等教育教職員が中国を訪問するプログラムを実施しております。

第 10 回となる今回の招へいプログラムも、文部科学省、中国教育部、および各県・市教育委員会の協力のもと、2011 年 10 月 12 日 (水) から 10 月 23 日 (日) までの 12 日間にわたり、中国から初等中等教育教職員約 150 名を本邦に招へいします。

2. 目 的

- (1) 日本の教育制度および地域の学校教育の現状を紹介すること
- (2) 学校等での意見交換を通じて、日中教職員間における交流に寄与すること
- (3) 日本の文化全般に対する理解を深めること
- (4) 日中両国の相互理解と友好を促進すること

3. 日 程

本プログラムは東京、日本各地の受入れ自治体および大阪に於いて、下記の日程で実施される予定です。

日付	日程	訪問先	活動
10 月 12 日 (水)	第 1 日	東京	日本到着 オリエンテーション
10 月 13 日 (木)－ 15 日 (土)	第 2－4 日 (3 日間)	東京	開会式、文部科学省講義、全体歓迎交流会 学校訪問 (授業見学、教員、児童生徒との交流) 教育文化施設視察、グループ別情報共有会
10 月 16 日 (日)－ 19 日 (水)	第 5－8 日 (4 日間)	5 グループにわかれ、各グループが指定の自治体を訪問	訪問先へ移動、ホームビジット 教育長表敬・概要説明、グループ歓迎交流会 学校訪問 (授業見学、教員、児童生徒との交流) 教育文化施設視察 グループ別情報共有会
10 月 20 日 (木)－ 22 日 (土)	第 9－11 日 (3 日間)	大阪、京都・奈良等	大阪へ移動 世界遺産見学 報告会・閉会式 (大阪)
10 月 23 日 (日)	第 12 日		日本出発

* 第 5～8 日の間、参加者は 5 グループに分かれ、指定された自治体を訪問する。

* 5 グループは各 30 名程度とし、以下のグループ分けとする。

- A グループ (おもに小学校教職員) 山口県美祢市
- B グループ (おもに小学校教職員) 熊本県荒尾市
- C グループ (おもに中学校教職員) 東京都多摩市
- D グループ (おもに中学校教職員) 岡山県総社市
- E グループ (おもに高等学校教職員) 徳島県

* 各グループの代表者は、各県・市での活動について、第 11 日に大阪での報告会で報告する。

4. 参加者数

約 150 名

5. 渡航費等

ACCU は下記の経費を負担する。

- (1) 往復航空運賃
北京と、日本国内の指定された国際空港との間のエコノミークラス航空券。
- (2) 滞在費
到着日から帰国日前夜までの計 11 日間、1 日 1 人あたり規定額。
- (3) 食事と宿泊
プログラム期間中のシングルルーム（朝食含）、および昼食。夕食は原則として、滞在費から各自が支払うこととする。
- (4) 日本国内の移動旅費
プログラム期間中の、自由行動日以外の国内移動旅費。
- (5) 海外旅行傷害保険
最低限度の海外旅行損害保険を ACCU が契約するが、参加者自身でも加入してることが望ましい。

※上記以外の経費については参加者が負担することとする。

6. 申請・推薦手続

中国教育部は、参加者を選定し、プログラム開始約 2 ヶ月前（8 月 20 日）までに参加者データシートを揃えて、ACCU へ推薦することとする。

7. 参加資格

- (1) 国籍： 中国の国民であること。
- (2) 職業： 所属する学校等からの推薦を受けた、初等中等教育の教職員であること。（教育行政官及び教育専門家を含む）
- (3) 言語： 中国語（普通話）での会話が可能であること。（プログラム期間中は日本語と中国語（普通話）間の逐次通訳が行われる予定）
- (4) 健康： プログラムの全日程に参加が可能であること。

8. 評価と報告

- (1) 日本出発前（第 11 日）
 - (a) 各参加者は ACCU の用意するアンケートに記入する。
 - (b) 各グループの代表 1 名は、報告会において発表を行う。
- (2) プログラム終了後 1 ヶ月以内
参加者代表（団長及び各グループの代表）は報告書を作成し、中国教育部へ提出する。中国教育部は、その報告書を取りまとめ ACCU に提出する。

9. このプログラムに関する照会先

財団法人ユネスコ・アジア文化センター 人物交流課 担当：霜中（課長：佐々木）

〒162-8484 東京都新宿区袋町 6 番地 日本出版会館

Tel: 03-3269-4498, 4435 Fax: 03-3269-4510

E-mail: michelle.shimonaka@accu.or.jp, sasaki@accu.or.jp

*団体名はプログラム開催時のものです。2011 年 11 月 1 日に財団法人から公益財団法人に移行されました。

◆付録 2. プログラム日程

(1)全体プログラム(東京)

第 1 日(日本到着日)		10 月 12 日(水)
北京	09:25	北京空港発(CA925 便)
東京	13:55	成田国際空港第 1 ターミナル着
	16:30	ホテルメトロポリタンエドモント着
	17:00-18:00	オリエンテーション(ホテル 2 階「悠久」)
	18:00-20:00	夕食(ホテル 2 階「波光・薫風」)
		宿泊先:ホテルメトロポリタンエドモント、明日の服装:ビジネス
第 2 日		10 月 13 日(木)
東京	07:00-08:30	朝食(ホテル 1 階「クリスタルホール」)
	09:30-10:15	開会式(ホテル 2 階「万里」)
	10:30-12:00	講義 I (ホテル 2 階「万里」) 「日本の初等中等教育制度について (Primary and Secondary Education in Japan)」 文部科学省 初等中等教育局初等中等教育企画課 課長補佐 南野圭史
	12:00-13:00	昼食(ホテル 2 階「波光・薫風」)
	14:00-15:30	講義 II (ホテル 2 階「万里」) 「教員養成について(Teacher Training)」 文部科学省 初等中等教育局教職員課 教員免許企画室長 新田正樹
	18:00-20:00	歓迎交流会(ホテル 2 階「悠久」)
		宿泊先:ホテルメトロポリタンエドモント、明日の服装:ビジネスカジュアル
第 3 日		10 月 14 日(金)
東京	07:00-08:30	朝食(ホテル 1 階「クリスタルホール」)
A グループ	09:40	ホテル発
	10:00-12:00	凸版印刷株式会社 VR Theater 印刷博物館
	12:00-13:00	昼食(於:ラ・ステラ)
	13:30-16:00	青山学院初等部
	16:30	ホテル着 夕食(各自)
B グループ	09:20	ホテル発
	10:00-13:00	慶應義塾幼稚舎(含:給食交流)
	14:00-16:00	凸版印刷株式会社 VR Theater 印刷博物館
	16:30	ホテル着 夕食(各自)
C グループ	08:15	ホテル発
	09:00-12:00	市川学園 市川中学校・市川高等学校
	12:20-13:20	昼食
	15:00-17:00	凸版印刷株式会社 VR Theater 印刷博物館
	17:30	ホテル着 夕食(各自)
D グループ	09:30	ホテル発
	10:30-16:40	聖徳学園中学・高等学校(含:昼食)
	17:40	ホテル着 夕食(各自)
E グループ	10:00	ホテル発
	10:30-16:15	筑波大学附属駒場中・高等学校(含:昼食)
	16:45	ホテル着 夕食(各自)
		宿泊先:ホテルメトロポリタンエドモント、明日の服装:ビジネスカジュアル
第 4 日		10 月 15 日(土)
東京	07:00-08:30	朝食(ホテル 1 階「クリスタルホール」)
	08:30-10:00	グループ別情報共有会(ホテル 2 階「万里」AB、「波光」C、「薫風」D、3 階「春琴」E)
	10:15	ホテル発、浅草など都内視察、昼食(於:雷 5656 会館)
		国立科学博物館(CDE:13:00-15:30)(AB:13:30-16:00)、都内視察
	17:15	ホテル着 夕食(各自)
		宿泊先:ホテルメトロポリタンエドモント、明日の服装:カジュアル

◆付録 2. プログラム日程

(2)グループプログラム

【A グループ: 山口県美祢市 (おもに小学校教員)】

第 5 日 10 月 16 日(日)		
東京	06:30-07:00	朝食(ホテル 1 階「クリスタルホール」)
	07:10	ホテル発(チェックアウト)
	08:55	羽田空港発(JL371)
美祢	10:40	北九州空港着
	12:00-13:00	昼食(於: 北九州ホテルプラザ レストラン燦燦)
	14:20	ホテル着(チェックイン)
	15:00-15:15	教育委員会日程説明、ホームビジット対面式(於: 美祢市民会館大会議室)
	15:15-20:00	ホームビジット(夕食含む)
		各自ホテル着
		宿泊先: 美祢グランドホテル、明日の服装: ビジネス(但し歩きやすい靴で)
第 6 日 10 月 17 日(月)		
美祢	08:30	ホテル発
	08:40-09:40	市長・教育長表敬訪問(副市長、教育委員、総務部長、総合政策部長同席)、 美祢市の教育概要オリエンテーション(於: 美祢市民会館大会議室)
	10:00-14:30	美祢市立大嶺小学校訪問(含: 給食交流)
	15:00-17:00	秋芳洞、秋吉台科学博物館見学(歩きやすい靴で)
	18:00-20:30	歓迎交流会(於: 美祢グランドホテル)
		宿泊先: 美祢グランドホテル、明日の服装: ビジネスカジュアル
第 7 日 10 月 18 日(火)		
美祢	08:30	ホテル発
	09:00-11:00	山口県立青嶺高等学校訪問
	11:30-13:45	昼食、日本文化(茶道)紹介(於: 秋芳ロイヤル)
	14:15-16:00	宇部興産株式会社伊佐セメント工場訪問
	16:30-18:00	美祢市立大嶺中学校弓道部見学(於: 市営弓道場)
	18:15	ホテル着 夕食(各自)
		宿泊先: 美祢グランドホテル、明日の服装: ビジネスカジュアル
第 8 日 10 月 19 日(水)		
美祢	08:00	ホテル発(チェックアウト)
	08:30-11:00	美祢市立厚保中学校訪問
	12:00-14:30	美祢市立嘉万小学校訪問(含: 給食交流)
長門	15:30-17:00	金子みすず記念館見学
	17:30	旅館着(チェックイン)、温泉体験(夕食含む)
		宿泊先: 山村別館、明日の服装: カジュアル
第 9 日 10 月 20 日(木)		
長門	09:30	ホテル発(チェックアウト)(荷物別送)
美祢	10:30-11:30	情報共有会(於: 美祢市民会館大会議室)
	12:20-13:20	昼食(於: 山口グランドホテル)
	14:06	新山口駅発(のぞみ 36)
大阪	15:58	新大阪駅着
	16:50	ホテル着(チェックイン) 夕食(各自)
		宿泊先: リーガロイヤルホテル大阪、明日の服装: カジュアル

◆付録 2. プログラム日程

(2)グループプログラム

【B グループ:熊本県荒尾市 (おもに小学校教員)】

第 5 日 10 月 16 日(日)		
東京	06:30-07:00	朝食(ホテル 1 階「クリスタルホール」)
	07:30	ホテル発(チェックアウト)
	09:25	羽田空港発(JL309)
荒尾	11:15	福岡空港着
	12:00-13:00	昼食(於:博多都ホテル モルトヴォーノ)
	15:00-15:30	ホームビジット対面式(於:荒尾市役所 1 階 11 号会議室)
	15:30-20:00	ホームビジット
	～21:00	ホテル着(チェックイン)
		宿泊先:ホテルヴェルデ、明日の服装:ビジネス
第 6 日 10 月 17 日(月)		
荒尾	09:10	ホテル発
	09:30-10:00	市長、教育長表敬訪問(於:11 号会議室)
	10:00-11:30	オリエンテーション、市の概要、教育事情概要 質疑応答(於:43 号会議室)
	11:45-13:15	昼食(於:すたみな太郎)
	13:30-16:30	荒尾市立万田小学校訪問
	17:00	ホテル着
	18:00-20:00	歓迎交流会(於:ホテルヴェルデ)
		宿泊先:ホテルヴェルデ、明日の服装:ビジネス
第 7 日 10 月 18 日(火)		
荒尾	08:40	ホテル発(チェックアウト)
	09:00-13:30	荒尾市立荒尾第一小学校訪問(含:給食交流)
	14:00-17:00	荒尾市立荒尾海陽中学校訪問
	17:30	ホテル着(チェックイン)
		夕食(各自)
		宿泊先:オームタガーデンホテル、明日の服装:ビジネス(但し歩きやすい靴で)
第 8 日 10 月 19 日(水)		
荒尾	09:00	ホテル発
	09:30-12:00	熊本県立荒尾養護学校訪問
	12:15-13:15	昼食(於:レストランアンティーク)
	13:30-14:30	万田坑見学
	15:00-16:00	宮崎兄弟の生家見学
	16:30-17:30	情報共有会(於:荒尾市役所 1 階 11 号会議室)
	18:00	ホテル着
		夕食(各自)
		宿泊先:オームタガーデンホテル、明日の服装:カジュアル
第 9 日 10 月 20 日(木)		
荒尾	08:15	ホテル発(チェックアウト)
	10:00	福岡空港着
	11:00	福岡空港発(ANA1676)
大阪	12:15	伊丹空港着
	13:00-14:00	昼食(於:伊丹シティホテル)
	14:40	ホテル着(チェックイン) 夕食(各自)
		宿泊先:リーガロイヤルホテル大阪、明日の服装:カジュアル

◆付録 2. プログラム日程

(2)グループプログラム

【C グループ:東京都多摩市（おもに中学校教員）】

第 5 日			10 月 16 日(日)
東京	06:30-08:30		朝食(ホテル 1 階「クリスタルホール」) 各自ホテル(チェックアウト) * 各自荷物をベルデスクに預ける 自由研修
	11:50-12:50		昼食
多摩	13:15		ホテル出発 専用バス
	14:20		ホームビジット対面式(於:多摩市役所2庁会議室)
	14:30-20:00 ~21:00		ホームビジット 各自ホテル着(チェックイン) 宿泊先:京王プラザホテル多摩、明日の服装:ビジネス
第 6 日			10 月 17 日(月)
多摩	09:10		ホテル発
	09:30-10:00		教育長表敬訪問
	10:00-11:30		オリエンテーション
	12:00-16:30		多摩市立青陵中学校訪問(含:給食交流)
	16:45		ホテル着
	18:00-20:00		歓迎交流会(於:4 階たまつばき) 宿泊先:京王プラザホテル多摩、明日の服装:ビジネス
第 7 日			10 月 18 日(火)
多摩	08:50		ホテル発
	09:15-11:15		東京都立多摩桜の丘学園訪問(特別支援学校)
	11:30-16:30		多摩市立多摩第一小学校訪問(含:給食交流)
	17:00		ホテル着 夕食(各自) 宿泊先:京王プラザホテル多摩、明日の服装:ビジネス(但し歩きやすい靴で)
第 8 日			10 月 19 日(水)
多摩	08:40		ホテル発
	09:15-11:45		私立多摩大学付属聖ヶ丘中学校高等学校訪問
	12:15-12:45		昼食(於:トレノ・ノッテ)
	12:50-13:30		文化施設パルテノン多摩 青陵中学校合唱コンクール鑑賞
	13:30-14:00		パルテノン多摩館内市民ギャラリー見学
	14:00-14:30		パルテノン多摩マジックサウンドルーム
	14:30-15:00		パルテノン周辺施設見学及び移動(徒歩)
	15:00-16:45		ベネッセコーポレーション見学
	17:00-18:00		情報共有会(於:パルテノン多摩 第2・3会議室(4階))
	18:10		ホテル着 夕食(各自) 宿泊先:京王プラザホテル多摩、明日の服装:カジュアル
第 9 日			10 月 20 日(木)
多摩	08:30		ホテル発(チェックアウト)
	10:00		羽田空港着
大阪	11:00		羽田空港発(ANA21)
	12:05		伊丹空港着
	12:50-13:50		昼食(於:伊丹シティホテル)
	14:30		ホテル着(チェックイン) 夕食(各自) 宿泊先:リーガロイヤルホテル大阪、明日の服装:カジュアル

◆付録 2. プログラム日程

(2)グループプログラム

【D グループ:岡山県総社市（おもに中学校教員）】

第 5 日			10 月 16 日(日)
東京	06:30-07:00	朝食(ホテル 1 階「クリスタルホール」)	
	07:10	ホテル発(チェックアウト)	
	08:50	羽田空港発(JL1681)	
	10:10	岡山空港着	
倉敷	11:50-12:50	昼食(於:ホテル日航倉敷)	
	13:30	ホテル着、チェックイン	
総社	15:00	ホームビジット対面式(於:総社市役所西庁舎 301 会議室)	
	15:30-20:00	ホームビジット	
倉敷	～21:00	各自ホテル着(チェックイン)	
		宿泊先:ホテルリソル倉敷、明日の服装:ビジネス	
第 6 日			10 月 17 日(月)
総社	08:30	ホテル発	
	09:30-10:30	オリエンテーション	
	10:30-11:30	情報共有会	
	11:30-12:00	市長・教育長表敬訪問	
	12:15-13:15	昼食(於:サンロード吉備路)	
	13:30-16:30	総社中央小学校訪問	
	17:00-17:30	きびじつるの里見学	
	18:00-20:00	歓迎交流会(於:サンロード吉備路)	
倉敷	21:00	ホテル着	
		宿泊先:ホテルリソル倉敷、明日の服装:ビジネスカジュアル	
第 7 日			10 月 18 日(火)
総社	08:20	ホテル発	
	09:00-10:15	吉備路クリーンセンター見学	
	10:45-11:45	国分寺見学	
	12:15-13:10	昼食(於:サントピア岡山総社)	
	13:30-17:00	総社東中学校訪問	
倉敷	17:40	ホテル着	
		夕食(各自)	
		宿泊先:ホテルリソル倉敷、明日の服装:ビジネスカジュアル	
第 8 日			10 月 19 日(水)
総社	08:20	ホテル発	
	09:00-11:30	県立早島支援学校訪問	
	12:30-17:00	総社西中学校訪問(含:給食交流)	
倉敷	17:30	情報共有会(於:総社市役所西庁舎 301 会議室)	
	18:30	市役所発	
	19:10	ホテル着	
		夕食(各自)	
		宿泊先:ホテルリソル倉敷、明日の服装:カジュアル	
第 9 日			10 月 20 日(木)
倉敷	08:00	ホテル発(チェックアウト)	
	09:30-11:00	岡崎嘉平太記念館	
	11:00	大阪へ移動 専用バス	
	12:30-13:30	昼食(於:巴屋本舗/兵庫県)	
大阪	15:45	ホテル着(チェックイン) 夕食(各自)	
		宿泊先:リーガロイヤルホテル大阪、明日の服装:カジュアル	

◆付録 2. プログラム日程

(2) グループプログラム

【E グループ: 徳島県 (おもに高等学校教員)】

第 5 日		10 月 16 日(日)
東京	06:30-07:30	朝食(ホテル 1 階「クリスタルホール」)
	08:00	ホテル発(チェックアウト)
	09:40	羽田空港発(JL1433)
	10:55	徳島空港着
徳島	11:40-12:30	昼食(於: すたみな太郎)
	13:00-14:30	徳島県防災センター
	15:30	ホームビジット対面式(於: サンシャイン徳島アネックス 3 階「羽衣」)
	16:00-20:00	ホームビジット
	～21:00	各自ホテル着(チェックイン)
		宿泊先: サンシャイン徳島アネックス、明日の服装: ビジネス
第 6 日		10 月 17 日(月)
徳島	09:20	ホテル発
	10:00-10:30	教育長表敬訪問
	10:30-11:30	オリエンテーション
	11:45-12:45	昼食(於: ぎんせん)
	13:30-16:30	徳島科学技術高等学校訪問
	17:00	ホテル着
	18:00-20:00	歓迎交流会(於: サンシャイン徳島アネックス)
		宿泊先: サンシャイン徳島アネックス、明日の服装: ビジネスカジュアル
第 7 日		10 月 18 日(火)
徳島	08:50	ホテル発
	09:30-11:30	ひのみね支援学校訪問
	12:10-12:50	昼食(於: 濱伊)
	13:30-16:30	名西高等学校訪問
	17:20	ホテル着
		夕食(各自)
		宿泊先: サンシャイン徳島アネックス、明日の服装: ビジネスカジュアル
第 8 日		10 月 19 日(水)
徳島	09:30	ホテル発(チェックアウト)
	10:00	A グループ: 加茂名中学校訪問 B グループ: 千松小学校訪問(含: 給食交流)
	15:00	ホテル着
	15:10-16:00	情報共有会(於: サンシャイン徳島アネックス 3 階「羽衣」)
		ホテル着(チェックイン)
		夕食(各自)
		宿泊先: ホテルサンシャイン徳島、明日の服装: カジュアル
第 9 日		10 月 20 日(木)
徳島	09:00	ホテル発(チェックアウト)
		大阪へ移動 専用バス
	12:00-13:00	昼食(於: 東天紅 OMM 店)
大阪	13:30	ホテル着(チェックイン) 夕食(各自)
		宿泊先: リーガロイヤルホテル大阪、明日の服装: カジュアル

◆付録 2. プログラム日程

(3)全体プログラム(大阪)

第 10 日		10 月 21 日(金)
大阪	06:30-09:00	朝食(1 階「リモネ」)
	09:30	ホテル発
京都	11:30-12:30	金閣寺視察
	13:00-15:00	昼食、友禅染体験
	15:30-17:00	清水寺視察
大阪	19:00	ホテル着 夕食(各自)
		宿泊先:リーガロイヤルホテル大阪、明日の服装:ビジネス
第 11 日		10 月 22 日(土)
大阪	06:30-08:30	朝食(1 階「リモネ」)
	09:00-11:00	報告会(リーガロイヤルホテル 2 階「ペリドット」)
	11:15-12:00	閉会式(リーガロイヤルホテル 2 階「ペリドット」)
		宿泊先:リーガロイヤルホテル大阪、明日の服装:カジュアル
第 12 日		10 月 23 日(日)
大阪	06:00-06:20	朝食(1 階「リモネ」)
110 名	06:30	ホテル発(チェックアウト) 関西国際空港へ移動
	09:30	関西国際空港発(CA162 便)
	11:50	北京空港着
40 名	06:00-10:00	朝食(1 階「リモネ」)
	10:30	ホテル発(チェックアウト) 関西国際空港へ移動
	13:50	関西国際空港発(CA928 便)
	16:05	北京空港着

◆付録 3. 参加者リスト

A グループ: 山口県美祢市(おもに小学校教員) 24 名

A-5	於 玲	YU Ling	女	遼寧省教育庁	副処長
A-6★	師曉星	SHI Xiaoxing	男	瀋陽市和平区教育局	副局長
A-7	劉春鳳	LIU Chunfeng	女	瀋陽市皇姑区岐山路第一小学	校長
A-8	李学軍	LI Xuejun	女	瀋陽市皇姑区向工街第二小学	校長
A-9	楊桂華	YANG Guihua	女	吉林省第二実験学校	主任
A-10	高春香	GAO Chunxiang	女	東北師範大学附属小学	教員
A-11	韓 穎	HAN Ying	女	吉林市豊満区特殊教育学校	校長
A-12	王 賀	WANG He	女	長春市緑園区開元小学	副校長
A-13	李 群	LI Qun	男	上海市閔行区教育学院	小学教研訓室室長
A-14	唐 怡	TANG Yi	女	閔行区平南小学	品質管理処主任
A-15	薛為群	XUE Weiqun	女	上海市楊浦区復旦科技园小学	校長
A-16	沈 沁	SHEN Qin	女	上海理工大学附属小学	教員
A-17	季慧敏	JI Huimin	女	南京市南湖第二小学	校長
A-19	陳純紅	CHEN Chunhong	女	丹陽市經濟開發区中心小学	副校長
A-20	藍瑩瑩	LAN Yingying	女	杭州市緑城育華小学	教員
A-21	劉慶勇	LIU Qingyong	男	杭州市建新小学	校長
A-22	黄富春	HUANG Fuchun	男	杭州市保俶塔実験学校	教員
A-23	繆登梅	MIAO Dengmei	女	杭州豊人学校	学科組長
A-24☆	肖祥艷	XIAO Xiangyan	男	福州市教育局	処長
A-25	夏 青	XIA Qing	女	福建省福州実験小学	副校長
A-27	陳紹瑄	CHEN Shaoxuan	女	アモイ市第一幼稚園	園長
A-28	李成子	LI Chengzi	女	瀋陽市大東区杏壇小学	校長
A-29	艾冬梅	AI Dongmei	女	撫順市教師研修学院附属小学校	校長
A-30	朱宏誼	ZHU Hongyi	男	吉林省長春市東北師大附属中学・ 高校明珠学校	主任

★分団長

☆副分団長

通訳: 松井 美穂、宮首 弘子

ACCU 随員: 霜中 路世

◆付録 3. 参加者リスト

B グループ: 熊本県荒尾市(おもに小学校教員) 29 名

B-1	劉春林	LIU Chunlin	男	江西省教育厅教学教材研究室	副主任
B-2	楊 杰	YANG Jie	男	南昌市教育局教育科学研究所	幹部
B-3	王玉燕	WANG Yuyan	女	南昌市豫章小学	校長
B-4	劉 斌	LIU Bin	女	南昌市育智学校	校長
B-5	吉寒英	JI Hanying	女	長沙市雨花区長塘里小学	教員
B-6☆	肖建竜	XIAO Jianlong	男	岳陽市岳紙学校	校長
B-7	姜寧波	JIANG Ningbo	男	岳陽市岳化第二小学校	校長
B-8	吳志剛	WU Zhigang	男	岳陽市特殊教育学校	校長
B-9	楊麗萍	YANG Liping	女	南寧市天桃実験学校	教員
B-10	李 雯	LI Wen	女	南寧市盲聾啞学校	教員
B-12	宋艷玲	SONG Yanling	女	桂林市復興小学	教員
B-13	張亞克	ZHANG Yake	男	陝西省西安小学	教育教学督導
B-14	万珊燕	WAN Shanyan	女	西安市啓智学校	学年組長
B-15	李 琳	LI Lin	女	西安市実験小学	教員
B-16	王 群	WANG Qun	男	陝西省西安師範付属小学	教員
B-17	馬秀清	MA Xiuqing	女	石家莊市裕東小学	副校長
B-18	孫喜鳳	SUN Xifeng	女	石家莊市市莊路小学	校長
B-19	於宏麗	YU Hongli	女	石家莊市莊園小学	校長
B-20	田静敏	TIAN Jingmin	女	河北師範大学付属小学	副校長
B-21★	王利生	WANG Lisheng	男	内モンゴル自治区教育厅	処長
B-22	程金鎖	CHENG Jinsuo	男	フフホト市新城区教育局	局長
B-23	張 莉	ZHANG Li	女	フフホト市新城区蘇虎街実験小学	校長
B-24	姚 飛	YAO Fei	男	フフホト市玉泉区啓智学校	校長
B-25	王益權	WANG Yiquan	男	上海民弁(私立)奉浦学校	教員
B-26	陳慧娟	CHEN Huijuan	女	長春市寛城区南京小学	校長
B-27	徐 彤	XU Tong	男	長春市南関区西五小学	教員
B-28	朴仲夏	PU Zhongxia	男	長春市第一実験小学	校長
B-29	邱紅菊	QIU Hongju	女	長春市第一実験小学	主任
B-30	肖利敏	XIAO Limin	女	長春市第一実験小学	校長

★分団長

☆副分団長

通訳: 石川 友子、鹿野 裕実子

ACCU 随員: 松尾 奈緒子

◆付録 3. 参加者リスト

C グループ: 東京都多摩市(おもに中学校教員)26 名

C-5★	秦世広	QIN Shiguang	男	瀋陽市盲校	校長
C-6	曹淑君	CAO Shujun	女	瀋陽市第七中学・高校	校長
C-7	郭鳳敏	GUO Fengmin	女	遼寧省実験学校	校長
C-8	齊 怡	QI Yi	女	瀋陽市第八十八中学・高校	教員
C-9	杜穎亮	DU Kelian	男	吉林省第二実験学校	副校長
C-10	王淑榮	WANG Shurong	女	長春市緑園区正陽小学	校長
C-11	李 林	LI Lin	男	吉林大学付属中学・高校	主任
C-12	蔣維奇	JIANG Weiqi	女	長春市第四十五中学・高校	教員
C-13	李国平	LI Guoping	男	上海市閔行区鶴北初級中学	校長
C-14	張 憶	ZHANG Yi	女	上海市師資培訓中心実験基地付属中学・高校	校長
C-15	劉尚斌	LIU Shangbin	男	上海市三門中学・高校	校長
C-16	錢 璟	QIAN Jing	女	上海市鉄嶺中学・高校	校長
C-17	李 榮	LI Rong	女	南京曉莊学院付属中学・高校	教員
C-18	徐樹忠	XU Shuzhong	男	南京市第十二中学・高校中学部	校長
C-19	張富忠	ZHANG Fuzhong	男	南京市六合区竜池初級中学	校長
C-20	陳国忠	CHEN Guozhong	男	鎮江市実験初級中学	副校長
C-21	朱文斌	ZHU Wenbin	男	鎮江市江浜中学・高校	副校長
C-22	張 虹	ZHANG Hong	女	杭州市景成実験学校	副校長
C-23	吳秋玲	WU Qiuling	女	仙居県実験中学・高校	教員
C-24	章軍民	ZHANG Junmin	男	紹興県柯岩中学・高校	教員
C-25	朱偉紅	ZHU Weihong	女	杭州市錢江新城実験学校	教研組長
C-26	張 健	ZHANG Jian	男	北京師範大学付属実験中学・高校	職員
C-27	孫静玲	SUN Jingling	女	北京師範大学付属実験中学・高校	職員
C-28	金 鳴	JIN Ming	男	瀋陽市第 100 中学・高校	校長
C-29	玄忠文	XUAN Zhongwen	男	撫順市教員研修学院付属中学・高校	校長
C-30☆	趙景蓮	ZHAO Jinglian	女	長春市第一外国語中学・高校	校長

★分団長

☆副分団長

通訳: 伊藤 経子、渋谷 千春

ACCU 随員: 杉原 由美子

◆付録 3. 参加者リスト

Dグループ:岡山県総社市(おもに中学校教員)28名

D-1	黄炬輝	HUANG Juhui	男	福州市教育局	主任
D-2	陳光斌	CHEN Guangbin	男	福州江南水都中学・高校	校長
D-3	楊和順	YANG Heshun	男	福建省アモイ双十中学・高校	高級教員
D-4	陳大力	CHEN Dali	男	アモイ市特殊教育学校	校長
D-5	李 軍	LI Jun	男	江西師範大学附属中学・高校	教員
D-6	周曉紅	ZHOU Xiaohong	女	南昌外国語学校	副校長
D-7	費從軍	FEI Congjun	男	江西省永修県	副県長
D-8	黄 昊	HUANG Hao	女	南昌市第二十八中学・高校	校長
D-9	陳綱要	CHEN Gangyao	男	長沙市芙蓉区教育局	副局長
D-10	林海燕	LIN Haiyan	女	長沙市特殊教育学校	副校長
D-11	伍光華	WU Guanghua	男	岳陽市巴陵中学・高校	校長
D-12	夏忠育	XIA Zhongyu	男	岳陽市君山区許市鎮許市中学・高校	校長
D-13★	袁樹和	YUAN Shuhe	男	南寧市第十四中学・高校	校長
D-14	王湘壯	WANG Xiangzhuang	男	桂林市清風実験学校	校長
D-15	葉 丹	YE Dan	女	柳州市第三十九中学・高校	校長
D-16	施 明	SHI Ming	男	南寧市第三十七中学・高校	校長
D-17	趙 露	ZHAO Lu	女	西北工業大学附属中学・高校	教務主任
D-18	楊銳新	YANG Ruixin	男	甘泉県初級中学	副校長
D-19	趙 軍	ZHAO Jun	男	西北大学附属中学・高校	教員
D-22	李樹潤	LI Shurun	男	滄州市第十三中学・高校	主任
D-23☆	呂 杰	LV Jie	男	石家荘市第四十中学・高校	校長
D-24	代煥萍	DAI Huanping	女	石家荘市第二十八中学・高校	副校長
D-25	王貴俊	WANG Guijun	男	内モンゴル師範大学附属中学・高校	副校長
D-26	何国民	HE Guomin	男	フフホト市第八中学・高校	校長
D-27	高 峰	GAO Feng	男	フフホト市第十八中学・高校	校長
D-28	林 宝	LIN Bao	男	内モンゴル農業大学附属中学・高校	校長
D-29	張 霖	ZHANG Lin	男	畢節学院	
D-30	羅 璇	LUO Xuan	女	畢節学院	

★分団長

☆副分団長

通訳:八木 環、田中 美佐子

ACCU 随員:中田 晃子

◆付録 3. 参加者リスト

Eグループ:徳島県(おもに高等学校教員)27名

E-3	鄭太成	ZHENG Taicheng	男	瀋陽市朝鮮族第一中学・高校	校長補助
E-4	王惠玲	WANG Huiling	女	瀋陽市外国語学校	副校長
E-5	李衛東	LI Weidong	男	長春外国語学校	主任
E-6	馬玉春	MA Yuchun	男	吉林省实验中学	教員
E-7	陸 峰	LU Feng	男	上海市聾啞青年技術学校	教員
E-8	潘海峰	PAN Haifeng	男	上海市盲童学校	教員
E-9	莊志紅	ZHUANG Zhihong	女	鎮江市教育局教学教研室	主任補助
E-10	祁耀華	QI Yaohua	男	南京市盲人学校	校長
E-11	章益安	ZHANG Yian	男	浙江省富陽中学・高校	副校長
E-12	王 薇	WANG Wei	女	浙江省杭州第十四中学・高校	教員
E-13	陳淑容	CHEN Shurong	女	福建省福州第一中学・高校	学年長
E-14	欧陽玲	OUYANG Ling	女	福建省アモイ第一中学・高校	副校長
E-16	胡增琪	HU Zengqi	男	南昌市第十中学・高校	校長
E-17	黄 寧	HUANG Ning	女	長沙市長郡中学・高校	教育処副主任
E-18	陳良根	CHEN Lianggen	男	長沙市南雅中学・高校	教員
E-19	彭俊姣	PENG Junjiao	女	南寧市第二中学・高校	教員
E-20☆	区偉軍	OU Weijun	男	柳州市第三中学・高校	副校長
E-21	楊艷妮	YANG Yanni	女	陝西省西安中学・高校	幹事
E-22	劉緒民	LIU Xumin	男	陝西省洛南中学・高校	副校長
E-23◎	郭樹良	GUO Shuliang	男	河北省教育庁	副庁長
E-24★	王 昕	WANG Xin	男	河北師範大学付属实验中学	校長
E-25	王 艷	WANG Yan	女	フフホト市第一中学・高校	校長
E-26	王文梅	WANG Wenmei	女	フフホト市第二中学・高校	校長
E-27	鐘喜魁	ZHONG Xikui	男	通化市第一中学・高校	校長
E-28	李艷芳	LI Yanfang	女	長春市十一高校	教学管理処主任
E-29○	王禹耕	WANG Yugeng	男	教育部	
E-30	陳淑杰	CHEN Shujie	女	長春市第二中学・高校	教員

◎総団長

★分団長

☆副分団長

○秘書長

通訳:越後谷 美恵、加藤 洋子、名田 裕美子

ACCU 随行員:米島 百合子

◆付録 4. 関係機関リスト

(1) 全体プログラム

公益財団法人 ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)

〒162-8484 東京都新宿区袋町 6 日本出版会館

TEL: +81-3-3269-4498 FAX: +81-3-3269-4510 Email: exchange@accu.or.jp

URL: <http://www.accu.or.jp>

中華人民共和国教育部

国際協力交流局アジア・アフリカ課

100816 中国北京市西单大木仓胡同 35 号、TEL: +86-10-6609-6650

文部科学省(MEXT)

〒100-8959 東京都千代田区霞ヶ関 3-2-2

TEL: +81-3-5253-4111 URL: <http://www.mext.go.jp>

中華人民共和国駐日本大使館

〒106-0046 東京都港区元麻布 3-4-33

TEL: +81-3-3403-3388 URL: <http://www.china-embassy.or.jp>

中華人民共和国駐日本大使館教育局

〒135-0023 東京都江東区平野 2-2-9

TEL: +81-3-3643-0305 FAX: +81-3-3643-0296

(2) グループ・プログラム

A. 山口県美祢市教育委員会 教育長 永富 康文、学校教育課 課長補佐 柴田 眞弓

〒759-2292 山口県美祢市大嶺町東分 326-1

TEL: +81-837-52-1118、FAX: +81-837-52-2562、URL: <http://www.city.mine.lg.jp/>

B. 熊本県荒尾市教育委員会 教育長 丸山 秀人、教育振興課 指導主事 寺尾 俊二

〒864-8686 熊本県荒尾市宮内出目 390

TEL: +81-968-63-1659、FAX: +81-968-62-1218、URL: <http://www.city.arao.lg.jp/>

C. 東京都多摩市教育委員会 教育長 清水 哲也、統括指導主事 福田 洋一

〒206-8666 東京都多摩市関戸 6-12-1

TEL: +81-42-375-8111、FAX: +81-42-337-7620、URL: <http://www.city.tama.lg.jp/>

D. 岡山県総社市教育委員会 教育長 栗田 交三、学校教育課 主幹 池上 真由美

〒719-1192 岡山県総社市中央 1-1-1

TEL: +81-866-92-8358、FAX: +81-866-92-8397、URL: <http://www.city.soja.okayama.jp/>

E. 徳島県教育委員会 教育長 福家 清司、学校政策課 学力向上推進室 指導主事 木屋村 浩章

〒770-8570 徳島市万代町 1-1

TEL: +81-88-621-3117、FAX: +81-88-621-2882、URL: <http://www.pref.tokushima.jp/>

◆付録 5. 文部科学省講義資料

熱烈歓迎大家！ 国連大学国際教育交流事業 中国教職員招聘プログラム

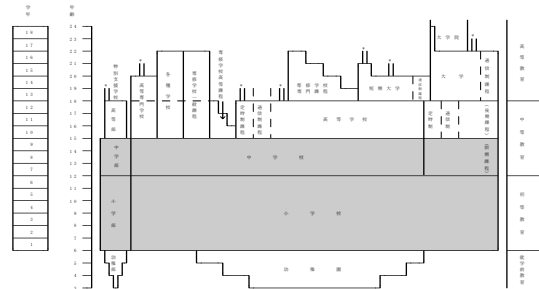


日本の初等中等教育制度について

平成23年10月
文部科学省初等中等教育局
南野圭史

学校教育制度

日本の学校系統図



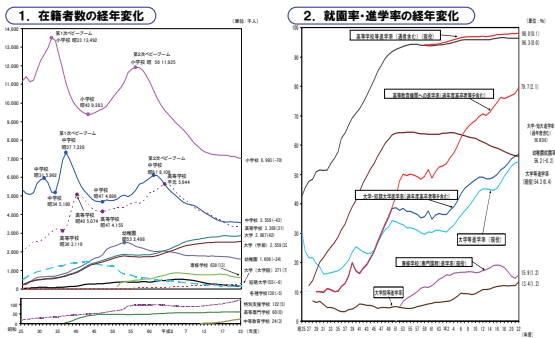
【注】（１）〇は、私立学校を示す。
（２）高等学校、中等教育学校、高等専門学校、大学、短大、専門学校、特別支援学校等は、それぞれに設置する学校に属することとなる。

初等中等教育段階の学校数、在籍者数、本務教員数

学校種	学校数（校数）	在籍者数（人数）	本務教員数（人数）
幼稚園	13,392	1,605,912	110,580
小学校	22,000	6,993,376	419,776
中学校	10,815	3,558,166	250,899
高等学校	5,116	3,368,693	238,929
中等教育学校	48	23,759	1,893
特別支援学校	1,039	121,815	72,803
合 計	52,410	16,671,721	1,094,880

（出典：文部科学省「平成22年度学校基本調査」より）

在籍者数、就園率・就学率の経年変化



義務教育制度の概要

憲法

第26条 すべて国民は、法律の定めるところにより、その能力に応じて、ひとしく教育を受ける権利を有する。

すべて国民は、法律の定めるところにより、その保護する子女に普通教育を受けさせる義務を負ふ。義務教育は、これを無償とする。

教育基本法

第5条 国民は、その保護する子に、別に法律で定めるところにより、普通教育を受けさせる義務を負う。

2 義務教育として行われる普通教育は、各個人の有する能力を伸ばしつつ社会において自立の基礎を培い、また、国家及び社会の形成者として必要とされる基本的な資質を養うことを目的として行われるものとする。

3 国及び地方公共団体は、義務教育の機会を保障し、その水準を確保するため、適切な役割分担及び相互の協力の下、その実施に責任を負う。

4 国又は地方公共団体の設置する学校における義務教育については、授業料を徴収しない。

学校教育法

【就学義務】

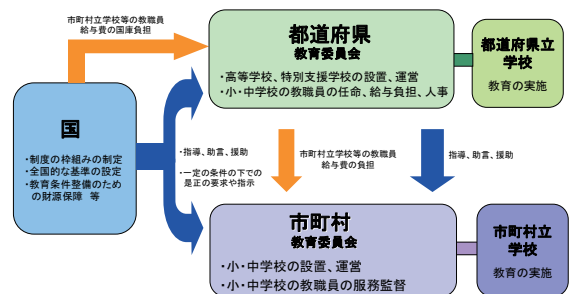
第17条（就学） 保護者は、子の満六歳に達した日の翌日以後における最初の学年の初めから、満十二歳に達した日の属する学年の終わりまで、これを小学校又は特別支援学校の小学校部に就学させる義務を負う。

【設置義務】

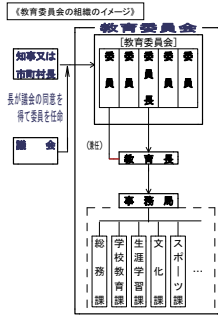
第38条 市町村は、その区域内にある学齢児童を就学させるに必要な小学校を設置しなければならない。

※中学校についても同様の規定あり。

教育行政制度の概要（国・都道府県・市町村の役割）



教育委員会制度の概要



1. 教育委員会制度の仕組み

- 教育委員会、市長から独立した行政委員会として全ての都道府県及び市町村等に設置。
- 教育委員会は、教育行政における重要事項や基本方針を決定し、それに基づいて教育長が具体の事務を執行。
- 教育委員は、非常勤で、原則5人。任期は4年で、再任可
- 教育長は、常勤で、教育委員のうちから教育委員会が任命。

2 教育委員会制度の意義

- ① 政治的中立性の確保
教育は、その内容が中立公正であることが極めて重要。個人的な偏見判断や特定の党派的影響力から中立性を確保することが必要。
- ② 継続性・安定性の確保
特に義務教育について、学習期間を通じて一貫した方針の下、安定的に行われることが必要。
- ③ 地域住民の意向の反映
教育は、地域住民にとって関心の高い行政分野であり、専門家のみが担うのではなく、広く地域住民の参加を踏まえて行われることが必要。

新しい教育基本法の概要 (平成18年12月成立)

第1章 教育の目的・理念

- ① 教育の目的・理念を明示
- ② 教育の目的を達成するために今日重要と考えられる事項を「教育の目標」として規定

<教育の目標の例>

- ・幅広い知識と教養、豊かな情操と道徳心、健やかな身体
- ・能力の伸長、自主・自覚の精神、態度との関連を重視
- ・正義と責任、自他の敬愛と協力、男女の平等、公共の精神
- ・生命と自然の尊重、環境の保全
- ・伝統と文化の尊重、我が国と郷土を愛し、他国を尊重、国際社会の平和と発展に寄与

- ② 「生涯学習の理念」教育の機会均等を規定

第2章 教育の実施に関する基本

教育を実施する前に基本となる事項として、これまでの教育基本法にも定められていた、「義務教育」、「学校教育」、「教員」、「社会教育」、「政治教育」、「宗教教育」に関する規定を見直すとともに、新たに「大学」、「私立学校」、「家庭教育」、「幼児期の教育」、「学校、家庭及び地域住民等の相互の連携協力」について規定

第3章 教育行政

教育行政における国と地方公共団体の役割分担、教育委員会基本計画の策定等について規定

第4章 法令の制定

この法律の諸未項を実施するための必要な法令の制定について規定
(下線太字は新たに規定したもの及び新設条文)

教育の目標

○ 教育基本法(平成18年法律第120号)

(教育の目標)

第2条 教育は、その目的を実現するため、学問の自由を尊重しつつ、次に掲げる目標を達成するよう行われるものとする。

- 一 幅広い知識と教養を身に付け、真理を求める態度を養い、豊かな情操と道徳心を培うとともに、健やかな身体を養うこと。
- 二 個人の価値を尊重して、その能力を伸ばし、創造性を培い、自主及び自律の精神を養うとともに、職業及び生活との関連を重視し、勤労を重んずる態度を養うこと。
- 三 正義と責任、男女の平等、自他の敬愛と協力を重んずるとともに、公共の精神に基づき、主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うこと。
- 四 生命を尊び、自然を大切にし、環境の保全に寄与する態度を養うこと。
- 五 伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。

○ 学校教育法(昭和22年法律第26号)

第30条 (略)

- ② 前項の場合においては、生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない。

新しい学習指導要領

教育基本法の改正等を踏まえ、幼稚園教育要領、小・中・高等学校学習指導要領、特別支援学校学習指導要領を改訂

学習指導要領の改訂のポイント

1. 学習指導要領改訂の基本的な考え方

- ① 教育基本法改正等で明確になった教育の理念を踏まえ、「生きる力」を育成
- ② 知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成のバランスを重視
- ③ 道徳教育や体育などの充実により、豊かな心や健やかな身体を育成

2. 授業時数の増加(小・中学校)

○国語、社会、算数・数学、理科、体育・保健体育の授業時数を約10%増加

○通算1日のコマ数を小学校低学年で週2コマ、小学校中・高学年、中学校各学年で週1コマ増加

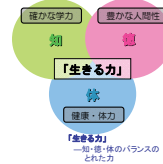
3. 必修科目、教育課程編成時の配慮事項等(高等学校)

○学習の基盤となる国語、数学、外国語に共通必修科目を設定するとともに、理科の科目必修の柔軟性を向上

○義務教育段階の学習内容の精実な定着を図るための学習機会を設けることを促進

4. 教育内容の主な改訂事項

- ① 道徳活動の充実
- ② 理科教育の充実
- ③ 伝統や文化に関する教育の充実
- ④ 道徳教育の充実
- ⑤ 体験活動の充実
- ⑥ 外国語教育の充実



※特別支援学校については、小・中・高の各段階にわたる学習の基盤を育成するほか、障害のある子ども一人一人の教育的ニーズに応じた適切な教育が必要となる支援を充実

思考力・判断力・表現力等をはぐくむ学習活動の例

① 体験から感じ取ったことを表現する

(例) ・ 日常生活や体験的な学習活動の中で感じ取ったことを言葉や歌、絵、身体などを用いて表現する

② 事実を正確に理解し伝達する

(例) ・ 身近な動植物の観察や地域の公共施設等の見学の結果を記述・報告する

③ 概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする

(例) ・ 需要、供給などの概念で価格の変動をとらえて生産活動や消費活動に生かす

・ 衣食住や健康・安全に関する知識を活用して自分の生活を管理する

④ 情報を分析・評価し、論述する

(例) ・ 学習や生活上の課題について、事柄を比較する、分類する、関連付けるなど考えるための技法を活用し、課題を整理する

・ 文章や資料を讀んだ上で、自分の知識や経験に照らし合わせて、自分なりの考えをまとめて、A4・1枚(1000字程度)といった所与の条件の中で表現する

・ 自然現象や社会的現象に関する様々な情報や意見をグラフや図表などから読み取り、これらを用いて分かりやすく表現したりする

・ 自然や環境の調査・文化・社会などについて調べ、分析したことを論述する

⑤ 課題について、構想を立て実践し、評価・改善する

(例) ・ 理科の調査研究において、仮説を立てて、観察・実験を行い、その結果を整理し、考察し、まとめ、表現したり改訂したりする

・ 芸術表現やものづくり等において、構想を練り、創作活動を行い、その結果を評価し、工夫・改善する

⑥ 互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる

(例) ・ 予想や仮説の検証方法を考察する場面で、予想や仮説の検証方法を計画しながら考えを交流の場

・ 将来の予測に関する問題などにおいて、問答やディベートの形式を用いて議論を深め、より高度の解決策に至る経験させる

小学校の標準授業時数

改訂前								現行（2011～）							
学年	1	2	3	4	5	6	計	学年	1	2	3	4	5	6	計
国語	272	280	235	235	180	175	1377	国語	306	315	245	245	175	175	1461
社会	—	—	70	85	90	100	345	社会	—	—	70	85	90	100	345
算数	114	155	150	150	150	150	869	算数	136	175	175	175	175	175	1011
理科	—	—	70	95	95	95	355	理科	—	—	90	105	105	105	405
生活	102	105	—	—	—	—	207	生活	102	105	—	—	—	—	207
音楽	68	70	60	60	50	50	358	音楽	68	70	60	60	50	50	358
図画	68	70	60	60	50	50	358	図画	68	70	60	60	50	50	358
工作	—	—	—	—	—	—	—	工作	—	—	—	—	—	—	—
家庭	—	—	—	—	60	55	115	家庭	—	—	—	—	60	55	115
体育	90	90	90	90	90	90	540	体育	102	105	105	105	90	90	597
道徳	34	35	35	35	35	35	208	道徳	34	35	35	35	35	35	208
特別活動	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	特別活動	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)
総合学習	—	—	105	105	110	110	430	総合学習	—	—	70	70	70	70	280
外国語	—	—	—	—	—	—	—	外国語	—	—	—	—	—	—	—
合計	782	840	910	945	945	945	5367	合計	850	910	945	980	980	980	5965
(23)	24	26	27	27	27	27		合計	850	910	945	980	980	980	5965

○調子よくのマダネ。

注：()内は過当りのコマ数。

中学校の標準授業時数

現 行					改訂後（2012～）				
学年	1	2	3	計	学年	1	2	3	計
国語	140 (4)	105 (3)	105 (3)	350	国語	140 (4)	140 (4)	105 (3)	385
社会	105 (3)	105 (3)	85 (2.4)	295	社会	105 (3)	105 (3)	140 (4)	350
数学	105 (3)	105 (3)	105 (3)	315	数学	140 (4)	105 (3)	140 (4)	385
理科	105 (3)	105 (3)	80 (2.3)	290	理科	105 (3)	140 (4)	140 (4)	385
音楽	45 (1.3)	35 (1)	35 (1)	115	音楽	45 (1.3)	35 (1)	35 (1)	115
美術	45 (1.3)	35 (1)	35 (1)	115	美術	45 (1.3)	35 (1)	35 (1)	115
保健体育	90 (2.6)	90 (2.6)	90 (2.6)	270	保健体育	105 (3)	105 (3)	105 (3)	315
技術・家庭	70 (2)	70 (2)	35 (1)	175	技術・家庭	70 (2)	70 (2)	35 (1)	175
外国語	105 (3)	105 (3)	105 (3)	315	外国語	140 (4)	140 (4)	140 (4)	420
道徳	35 (1)	35 (1)	35 (1)	105	道徳	35 (1)	35 (1)	35 (1)	105
特別活動	35 (1)	35 (1)	35 (1)	105	特別活動	35 (1)	35 (1)	35 (1)	105
選択教科等	0～30 (0～6)	50～65 (4.4～4.6)	50～65 (4～4.7)	150～280	総合的な 学習の時間	50 (1.4)	70 (2)	70 (2)	190
総合的な 学習の時間	0～30 (0～6)	50～65 (4.4～4.6)	50～65 (4～4.7)	150～280	計	1015 (29)	1015 (29)	1015 (29)	3045
合 計	980 (28)	980 (28)	980 (28)	2940					

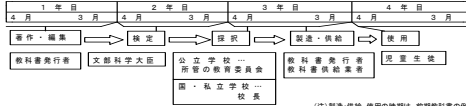
注：（ ）内は過当りのコマ数。

高等学校の各学科に共通する教科・科目等及び標準単位数

〔改訂〕				〔現行〕				〔改訂〕				〔現行〕			
教科	科目	標準 単位数	必修 科目	教科	科目	標準 単位数	必修 科目	教科	科目	標準 単位数	必修 科目	教科	科目	標準 単位数	必修 科目
国語	国語総合 国語基礎 現代文A 現代文B 古典 外国語	4 3 2 2 2 2	○	国語	国語総合 国語基礎 現代文A 現代文B 古典 外国語	2 2 2 2 2 2	○	国語	国語総合 国語基礎 現代文A 現代文B 古典 外国語	2 2 2 2 2 2	○	国語	国語総合 国語基礎 現代文A 現代文B 古典 外国語	2 2 2 2 2 2	○
数学	数学Ⅰ 数学Ⅱ 数学Ⅲ 数学Ⅳ 数学Ⅴ 数学Ⅵ	2 2 2 2 2 2	○	数学	数学Ⅰ 数学Ⅱ 数学Ⅲ 数学Ⅳ 数学Ⅴ 数学Ⅵ	2 2 2 2 2 2	○	数学	数学Ⅰ 数学Ⅱ 数学Ⅲ 数学Ⅳ 数学Ⅴ 数学Ⅵ	2 2 2 2 2 2	○	数学	数学Ⅰ 数学Ⅱ 数学Ⅲ 数学Ⅳ 数学Ⅴ 数学Ⅵ	2 2 2 2 2 2	○
理科	物理 化学 生物 地学 総合科学	2 2 2 2 2	○	理科	物理 化学 生物 地学 総合科学	2 2 2 2 2	○	理科	物理 化学 生物 地学 総合科学	2 2 2 2 2	○	理科	物理 化学 生物 地学 総合科学	2 2 2 2 2	○
社会	社会Ⅰ 社会Ⅱ 社会Ⅲ 社会Ⅳ 社会Ⅴ 社会Ⅵ	2 2 2 2 2 2	○	社会	社会Ⅰ 社会Ⅱ 社会Ⅲ 社会Ⅳ 社会Ⅴ 社会Ⅵ	2 2 2 2 2 2	○	社会	社会Ⅰ 社会Ⅱ 社会Ⅲ 社会Ⅳ 社会Ⅴ 社会Ⅵ	2 2 2 2 2 2	○	社会	社会Ⅰ 社会Ⅱ 社会Ⅲ 社会Ⅳ 社会Ⅴ 社会Ⅵ	2 2 2 2 2 2	○
芸術	音楽Ⅰ 音楽Ⅱ 音楽Ⅲ 音楽Ⅳ 音楽Ⅴ 音楽Ⅵ	2 2 2 2 2 2	○	芸術	音楽Ⅰ 音楽Ⅱ 音楽Ⅲ 音楽Ⅳ 音楽Ⅴ 音楽Ⅵ	2 2 2 2 2 2	○	芸術	音楽Ⅰ 音楽Ⅱ 音楽Ⅲ 音楽Ⅳ 音楽Ⅴ 音楽Ⅵ	2 2 2 2 2 2	○	芸術	音楽Ⅰ 音楽Ⅱ 音楽Ⅲ 音楽Ⅳ 音楽Ⅴ 音楽Ⅵ	2 2 2 2 2 2	○
体育	体育Ⅰ 体育Ⅱ 体育Ⅲ 体育Ⅳ 体育Ⅴ 体育Ⅵ	2 2 2 2 2 2	○	体育	体育Ⅰ 体育Ⅱ 体育Ⅲ 体育Ⅳ 体育Ⅴ 体育Ⅵ	2 2 2 2 2 2	○	体育	体育Ⅰ 体育Ⅱ 体育Ⅲ 体育Ⅳ 体育Ⅴ 体育Ⅵ	2 2 2 2 2 2	○	体育	体育Ⅰ 体育Ⅱ 体育Ⅲ 体育Ⅳ 体育Ⅴ 体育Ⅵ	2 2 2 2 2 2	○
外国語	外国語Ⅰ 外国語Ⅱ 外国語Ⅲ 外国語Ⅳ 外国語Ⅴ 外国語Ⅵ	2 2 2 2 2 2	○	外国語	外国語Ⅰ 外国語Ⅱ 外国語Ⅲ 外国語Ⅳ 外国語Ⅴ 外国語Ⅵ	2 2 2 2 2 2	○	外国語	外国語Ⅰ 外国語Ⅱ 外国語Ⅲ 外国語Ⅳ 外国語Ⅴ 外国語Ⅵ	2 2 2 2 2 2	○	外国語	外国語Ⅰ 外国語Ⅱ 外国語Ⅲ 外国語Ⅳ 外国語Ⅴ 外国語Ⅵ	2 2 2 2 2 2	○
総合的な学習の時間	総合的な学習の時間Ⅰ 総合的な学習の時間Ⅱ 総合的な学習の時間Ⅲ 総合的な学習の時間Ⅳ 総合的な学習の時間Ⅴ 総合的な学習の時間Ⅵ	2 2 2 2 2 2	○	総合的な学習の時間	総合的な学習の時間Ⅰ 総合的な学習の時間Ⅱ 総合的な学習の時間Ⅲ 総合的な学習の時間Ⅳ 総合的な学習の時間Ⅴ 総合的な学習の時間Ⅵ	2 2 2 2 2 2	○	総合的な学習の時間	総合的な学習の時間Ⅰ 総合的な学習の時間Ⅱ 総合的な学習の時間Ⅲ 総合的な学習の時間Ⅳ 総合的な学習の時間Ⅴ 総合的な学習の時間Ⅵ	2 2 2 2 2 2	○	総合的な学習の時間	総合的な学習の時間Ⅰ 総合的な学習の時間Ⅱ 総合的な学習の時間Ⅲ 総合的な学習の時間Ⅳ 総合的な学習の時間Ⅴ 総合的な学習の時間Ⅵ	2 2 2 2 2 2	○
合計		30		合計		30		合計		30		合計		30	

教科書制度の概要

○教科書が使用されるまでの基本的な流れ



〔注〕採定・採択・使用の時期は、前期教科書の例をとった。

○採定・採択

現在の教科書制度は、民間の教科書発行者による教科書の採定・採択が基本となる。各発行者は、学習指導要領、教科用図書採定基準等をもち、創意工夫を加えた図書を作成し採定・採択を行う。

○採定

図書は、文部科学大臣の採定を経てはじめて、学校で教科書として使用される資格を与えられる。その図書が教科用図書として適切であるかどうかを学習指導要領で構成される教科用図書採定調査審議会が審議され、文部科学大臣は、この審議結果に基づき採定を行う。

○採択

採定済教科書は、通常、1種目について数種類存在するため、この中から学校で使用する1種類の教科書が決定（採択）される。採択の権限は、公立学校については、所管の教育委員会に、国・私立学校については、校長にあり、採択された教科書の必要数は、文部科学大臣に報告される。

○発行（採定・採択）及び使用

文部科学大臣は、報告の集計結果に基づき、各発行者に発行すべき教科書の種別及び部数を指示。この指示を承認した発行者は、教科書を製造し、供給業者に依頼して各学校に供給し、供給された教科書は、児童生徒の手に渡り、使用される。

○教科書の整備と給付

国・公立の義務教育諸学校（小・中学校、中等教育学校の前期課程及び特別支援学校の小・中学校）で使用される教科書については、全児童生徒に対し、国の負担によって無償で給与されている。

教員養成・免許制度の概要

免許主義と開放制の原則

免許主義
教員は、教育職員免許法により採与される各相場の免許状を有する者でなければならない。

開放制の原則
わが国の教員養成は、一般大学と教員養成系大学とがそれぞれの特色を発揮しつつ行っている。

教員養成・採用・研修等の各段階を通じた教員の質向上

養成

●大学における養成が原則
●教職課程の認定を受けた学科等において、教員に関する科目、教職に関する科目などを修得することにより、採用当初から学級や教科を担当し、教科指導、生徒指導等を果たすために必要な最小限の教員能力を養成

採用

●都道府県・指定都市教育委員会等において採用選考試験を実施
●多面的な人物評価の一環の推進
・面接試験・実技試験の重視
・様々な社会体験等の評価

研修

●都道府県教育委員会等における研修
・初任者研修・10年経験者研修
・教職経験者研修 等
●国（教育研修センター）における研修
・各地域において中心となる役割を担う教員に対する学校管理研修
・学校の業務課題研修 等

適切な人事管理

●指導が不適切な教員に対する人事管理システムの適切な運用
●教員評価システム ●優秀教員表彰

特別支援教育

特別支援教育の対象者

- ①特別支援学校 0.60(約6万4千人)
- ②小・中学校の特別支援学級 1.37(約14万5千人)
- ③通級による指導 0.57(約6万1千人)
- ④通常学級にLD(学習障害)、ADHD(注意欠陥多動性障害)、高機能自閉症等の児童生徒が約6.3%在籍の可能性(H14文部科学省調査)

<学校教育法の一部改正(平成19年4月施行)>

- ・盲学校、聾学校を障害種別を超えて特別支援学校に一本化。
- ・小・中学校等においては、発達障害を含む障害のある児童生徒等に対して適切な教育を行うことを規定。
- ・特別支援学校においては、在籍児童生徒等の教育を行うほか、小・中学校等に在籍する障害のある児童生徒等の教育について助言援助に努める旨を規定。

<課題> 特別支援教育の対象児童生徒等の増大

・平成13年度から平成22年度にかけて、特別支援学校在籍者は、約32%増、小・中学校の特別支援学級在籍者は約88%増、通級指導対象者は約105%増。

障害者基本法の一部改正(平成23年8月)

- ・可能な限り障害者である児童生徒が障害者でない児童生徒と共に教育を受けられるよう配慮
- ・その際、障害者である児童生徒及びその保護者に対し十分な情報提供を行うとともに、可能な限りその意向を尊重。

公立高等学校の授業料無償化制度の概要

○公立高校の授業料無償化

○私立高等学校等に通う生徒に対する就学支援金制度

(平成22年4月施行)

趣 旨

家庭の状況にかかわらず、全ての意志ある高校生等が安心して勉学に打ち込める社会をつくるため、公立高校の授業料を無償化するとともに私立高等学校に通う生徒に対して高等学校等就学支援金を支給し、家庭の教育費負担を軽減する。

制度概要

- 公立の高等学校については授業料を不徴収とし、地方公共団体に対して授業料収入相当額を国費により負担。
 - 私立の高等学校生徒については、高等学校等就学支援金として授業料について一定額(年額118,800円)を助成することにより、教育費負担の軽減を図る。
 - 私立の高等学校に通う低所得世帯の生徒については、所得に応じて、助成金額を1.5～2倍した額を上限として助成する。
- | | |
|-----------------|----------------|
| 年収250万円未満程度 | 237,600円(2倍) |
| 年収250～350万円未満程度 | 178,200円(1.5倍) |

日本の教員養成・免許制度について

2011年10月13日

文部科学省初等中等教育局教職員課
教員免許企画室長 新田正樹

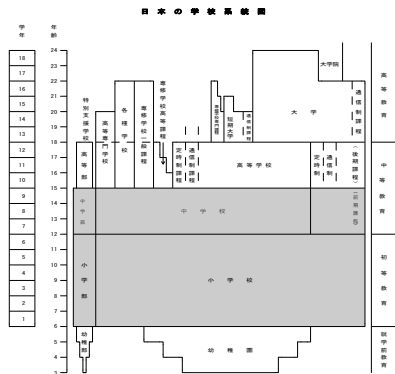
初等中等教育段階の学校数、在学者数、本務教員数

(平成22年3月12日現在)

学校種別	学校数		在学者数		本務教員数	
	数	%	数	%	数	%
幼稚園	13,392	0.4%	1,695,948	0.4%	8,236	61.5%
小学校	110,550	0.3%	22,000	0.3%	213	1.0%
中学校	4,192	0.1%	10,814	0.1%	257	2.0%
高等学校	3,388	0.1%	238,941	0.1%	58,919	24.7%
中等教育学校	48	0.0%	23,750	0.0%	16	0.1%
特別支援学校	1,254	0.0%	10,399	0.0%	559	4.3%
合計	129,409	0.3%	15,071,875	0.3%	10,557	20.1%

(注)平成22年度学校基本調査(速報値)による

1



(注) (1) 図は概略図を示す。
(2) 図は概略図、中等教育学校(併設課程)、大学、短期大学、特別支援学校(併設課程)は併設課程1年以上の修習を要することがある。

2

教員養成・免許制度について

1. 免許主義と開放制の原則

免許主義

教員は、教育職員免許法により授与される各相当の免許状を有する者でなければならない(免許法第3条第1項)。

開放制の原則

我が国の教員養成は、一般大学と教員養成系大学とがそれぞれの特色を発揮しつつ行っている。

2. 免許状の種類

それぞれ学校種別(中学校・高等学校については教科別)

① 普通免許状

(有効期間10年)

② 特別免許状

(有効期間10年)

③ 臨時免許状

(有効期限3年)

専修免許状(修士課程修了程度)

一種免許状(大学卒業程度)

二種免許状(短大卒業程度)

- 授与種者
都道府県教育委員会
- 免許状の有効範囲
 - 普通免許状: 全ての都道府県
 - 特別免許状: 授与を受けた都道府県内
 - 臨時免許状: 授与を受けた都道府県内

3

普通免許状の種類

※ それぞれ専修免許状(修士課程修了程度)、一種免許状(大学卒業程度)、二種免許状(短大卒業程度)に分かれる

幼稚園教諭免許状	
小学校教諭免許状	
中学校教諭免許状	国語、社会、数学、理科、音楽、美術、保健体育、保健、技術、家庭、職業、職業指導、職業実習、水産、水産実習、福祉、福祉実習、商船、商船実習、職業指導、外国語(英語、ドイツ語、フランス語その他の外国語に分ける。)、宗教
高等学校教諭免許状	国語、地理歴史、公民、数学、理科、音楽、美術、工芸、書道、保健体育、保健、看護、看護実習、家庭、家庭実習、情報、情報実習、農業、農業実習、工業、工業実習、商業、商業実習、水産、水産実習、福祉、福祉実習、商船、商船実習、職業指導、外国語(英語、ドイツ語、フランス語その他の外国語に分ける。)、宗教、茶道、剣道、情報技術、建築、インテリア、デザイン、情報処理、計算実務
特別支援学校教諭免許状	視覚、聴覚、知的障害、肢体不自由、病弱者
特別支援学校自立教科教諭免許状	理療、理学療法、音楽、理容、特殊技能(美術、工芸、被服)
特別支援学校自立活動教諭免許状	視覚障害教育、聴覚障害教育、肢体不自由教育、言語障害教育
養護教諭免許状	
栄養教諭免許状	

5

大学における教員養成の仕組み

- 学位と教職課程における単位の修得により教員免許状が授与とされる。
- 教職課程は免許状の種類毎に、大学の学科等を文部科学大臣が認定。

(※ 幼稚園及び小学校の教職課程は「教員養成を主たる目的とする」学科等でなければならない。)

学士の学位等 + 教職課程の履修 ⇒ 教員免許状

学士=1種免許状が標準
(短期大学士:2種免許状
修士:専修免許状)

① 教科に関する科目

(小:8、中:高:20単位以上)

② 教職に関する科目

(小:41、中:31、高:23単位以上)

・教職の意義

・教育の基礎理論

・教育課程及び指導法

・生徒指導、教育相談及び進路指導

・教育実習(小中:4週間、高:2週間程度)

・教職実践演習

③ 教科又は教職に関する科目

(小:10、中:8、高:16単位以上)

※ 上記①②から選択

※単位数は1種免許状の場合

学校種毎に授与
(中学校、高等学校の場合には教科種毎)

4

＜免許状の種類＞

普通免許状 H20年度授与件数：217,629件

①「大学における養成」が基本。

② 現職教員の自主的な研鑽を促すため、一定の教職経験を積み、大学等で所要単位を修得した者に、上位免許状を授与する途を留めている。

特別免許状 H20年度授与件数：59件

① 授与要件

② 授与要件

＜免許状主権の例外＞

① 特別非常勤講師 H20年度派出人数：21,369件

② 専科担任制度 H14.7.1～H21.3.31の会計特裁：

課程認定を有する大学等の数

	大学				短期大学			大学院				
	国立	公立	私立	計	国立	公立	私立	計	国立	公立	私立	計
大学等数	82	75	576	733	0	21	357	378	85	69	447	601
課程認定を有する大学等数	76	50	465	591	0	12	261	273	79	35	310	424
割合	92.7%	66.7%	80.7%	80.6%	0.0%	57.1%	73.1%	72.2%	92.9%	50.7%	69.4%	70.5%

免許状取得者数及び教員採用者数について

授与年度	免許状取得者数(人)	教員採用者数(人)
昭和39年度	49,464	32,936
昭和44年度	131,973	36,747 ※
昭和50年度	152,915	53,413
昭和56年度	168,433	56,591
昭和62年度	142,152	44,228
平成5年度	128,342	33,586
平成11年度	115,669	26,895
平成17年度	117,903	40,156

●免許状取得者数：教職員課調べ

●教員採用者数：学校教員統計調査(採用年度は授与年度の翌年度)

調査対象は国・公・私立の幼稚園、小学校、中学校、高等学校、盲学校・盲学校・養護学校(現在の特別支援学校)、中等教育学校など。 ※の調査対象は、公立の小学校、中学校、高等学校、盲学校・盲学校・養護学校(現在の特別支援学校)及び私立の幼稚園、高等学校

＜参考＞

・平成17年度教員免許状取得者数(教職員課調べ)

小学校	中学校	高等学校
16,576	51,190	73,509

・平成18年度国公立学校教員採用者数(新卒者)(学校教員統計調査)

小学校	中学校	高等学校
5,025	2,088	1,656

所有免許状別教員構成等

＜現職教員の免許状別保有割合＞(平成19年度)

区分	専修免許状	一種免許状	二種免許状
幼稚園	0.4%	21.0%	73.7%
小学校	3.2%	80.2%	14.7%
中学校	5.4%	89.4%	4.8%
高等学校	24.2%	74.9%	

(学校教員統計調査)

＜公立学校教員採用者の学歴別内訳＞(平成21年度)

区分	小学校	中学校	高等学校
教員養成系大学・学部	41.0%	25.8%	12.6%
一般大学	49.5%	59.7%	63.3%
短期大学等	3.5%	1.7%	0.7%
大学院	6.1%	12.8%	23.4%

(教職員課調べ)

教職大学院(専門職学位課程)制度の概要

1. 教職大学院の特性(既存の修士課程との違い)

① 実務家教員(教職等としての実務経験のある教員)を必要専任教員の4割以上置くことが、法令上規定されている。

② 45単位のうち10単位以上は学校等での実習を行うよう義務化している。

③ 既存の修士課程では学生が専門分野の研究に従事しているが、教職大学院では研究指導を受けることや修士論文の提出が義務づけられていない。

④ なお、大学は7年ごとに機関別の認証評価を受けることが義務づけられているが、さらに、教職大学院は5年に1回、分野別の認証評価が義務づけられている。

2. 教職大学院の具体的な仕組み

①修業年限：標準2年

②修了要件：2年以上在学し、45単位以上修得(10単位以上は学校等での実習)

③教育課程・方法：事例研究、フィールドワーク等を積極的に導入した「理論と実践の融合」による体系的授業科目

④教員組織：必要専任教員数最低11人(うち実務家教員4割以上)

3. 現状(平成22年度)

① 教員就職率(現職教員を除く)【平成21年度】

② 入学定員充足率：90.2%(暫定値)(教員養成大学・学部56.6%)

③ 志願者数：1,198人(前年度より7.3人増)

④ 入学者数：802人(前年度より5.5人増)

現職教員：391人(前年度より8人増)

学部新卒生等：411人(前年度より4.7人増)

教職大学院の現状(平成22年度)

学 校 名	研究科・専攻名	定 員	学 校 名	研究科・専攻名	定 員
1 北海道教育大学大学院	教育学研究科 実務教員養成専攻	45	26 京都大学大学院	教育学研究科 教職専攻	12
2 宮城教育大学大学院	教育学研究科 実務教員養成専攻	45	27 京都大学大学院	教育学研究科 教職専攻	12
3 山形大学大学院	教育学研究科 教職実践専攻	26	28 玉川大学大学院	教育学研究科 教職専攻	26
4 群馬大学大学院	教育学研究科 教職実践専攻	16	29 聖光大学大学院	教育学研究科 教職実践専攻	26
5 東京学芸大学大学院	教育学研究科 教職実践専攻	26	30 神奈川大学大学院	教育学研究科 実務教員養成専攻	26
6 上野原大学大学院	学校教育研究科 教職実践専攻	26	31 神奈川大学大学院	教育学研究科 実務教員養成専攻	26
7 新潟大学大学院	教育学研究科 教職実践専攻	26	32 25大学		840
8 山梨大学大学院	教育学研究科 教職実践専攻	26			
9 長野大学大学院	教育学研究科 教職実践専攻	26			
10 新潟大学大学院	教育学研究科 教職実践専攻	26			
11 新潟大学大学院	教育学研究科 教職実践専攻	26			
12 新潟大学大学院	教育学研究科 教職実践専攻	26			
13 新潟大学大学院	教育学研究科 教職実践専攻	26			
14 新潟大学大学院	教育学研究科 教職実践専攻	26			
15 新潟大学大学院	教育学研究科 教職実践専攻	26			
16 新潟大学大学院	教育学研究科 教職実践専攻	26			
17 新潟大学大学院	教育学研究科 教職実践専攻	26			
18 新潟大学大学院	教育学研究科 教職実践専攻	26			
19 新潟大学大学院	教育学研究科 教職実践専攻	26			

教員免許更新制の概要

教員として必要な資質能力が保持されるよう、定期的に最新の知識技能を身に付けることで、教員が自信と誇りを持って教壇に立ち、社会の尊敬と信頼を得ることが目的。 <教員免許更新制の導入：平成21年4月1日>

1. 免許状の有効期間の更新

- 普通免許状及び特別免許状に10年の有効期間を定める。
- 都道府県教育委員会は、以下の者から申請があった場合に、その免許状の有効期間の更新をすることができる。
 - 文部科学大臣の認定を受けた30時間以上の免許状更新講習の課程を修了した者
 - 免許状更新講習の受講を免除される者
 - 教員を指導する立場にある者 ※知識技能が不十分な者は不可
 - 優秀教員表彰者
- 現職教員にも同様の制度を適用する。
 - 旧免許状（平成21年3月31日以前に授与された免許状）には有効期間は定められない。
 - 旧免許状を有する教育職員等は、免許状更新講習を修了確認期限までに修了しなかった場合、その者の免許状は効力を失う。
 - 受講対象者は、毎年約85,000～89,000人程度

2. 免許状更新講習

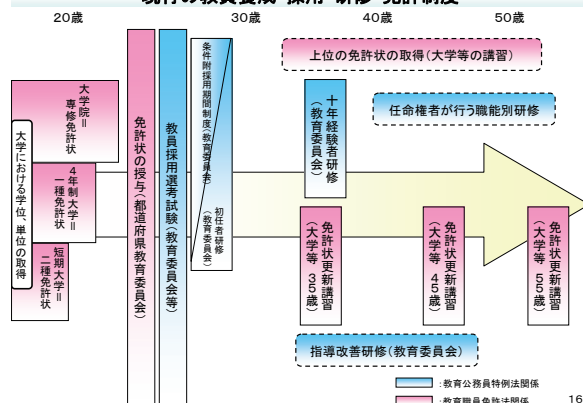
- 免許状更新講習を開設できる者

大学：指定養成機関、都道府県等の教育委員会、独立行政法人・公益法人など
- 免許状更新講習の内容
 - 教壇についての省察並びに子どもの変化、教育政策の動向及び学校の内外における連携協力についての理解に関する事項（12時間以上）
 - 教科指導、生徒指導その他教育の充実に関する事項（18時間以上）

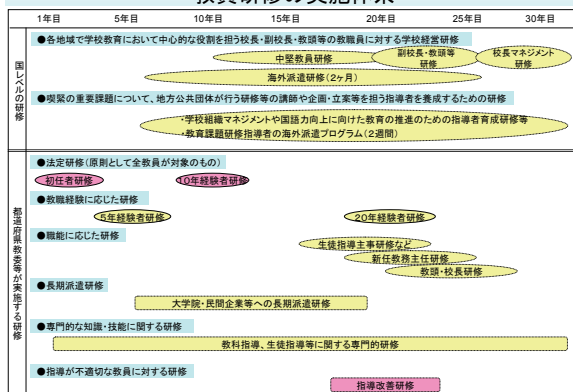
3. 実施のための取組

- 平成22年度予算において、教員免許制度の抜本的な見直しの方向性が示されるまでの間、へき地等で講習を開設する大学への補助など、大学における教員の現職教育への支援等を行うための経費として約2億4千万円を計上

現行の教員養成・採用・研修・免許制度



教員研修の実施体系



教員の人事管理制度

○公立学校の教員は公務員

義務教育諸学校(小学校・中学校)は市町村立

→市町村の公務員(教育公務員)

高等学校・特別支援学校は都道府県立学校

→都道府県の公務員(教育公務員)

○公立義務教育諸学校(小学校・中学校)は、市町村立学校であるが、

・教育公務員については、都道府県が任命権者

・教育公務員の給与

→(市町村の教員でも)都道府県が払う。(うち、1/3は国が負担)

○人事管理は、各任命権者(都道府県)の教育公務員制度として行う。

・指導が不適切な教員に対する人事管理システムの適切な運用

・新しい教員評価システム

・優秀教員表彰

●国際連合大学 2011-2012 年国際教育交流事業●

中国教職員招へいプログラム

実施報告書

2011 年 12 月

編集・発行

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)

〒162-8484

東京都新宿区袋町 6 番地 日本出版会館

電話 (03) 3269-4498

Email exchange@accu.or.jp

URL <http://www.accu.or.jp>

Printed in Japan by HokuetsuPrinting Inc. [300]

©2011 Asia-Pacific Cultural Center for UNESCO (ACCU)